

---

# 忘却の魔法使い

天宮翔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

忘却の魔法使い

### 【Nコード】

N56810

### 【作者名】

天宮翔

### 【あらすじ】

とある世界の魔導師「魔法使い」が並行世界に転生した。

桜咲く季節、一人の少年は私立聖祥大附属小学校3年生となる。

そんな新学期の始め、ごく平凡な毎日を過ごしていた少年は、何気なく大きな桜の木がある公園を訪れた。

そこで少年はとある少女に出会う。

その少女を見て少年は僅かに熱を帯びた。気高く、美しく、そして、守りたいと思わせる魅力を持った少女。

……出会いは偶然ながら、どこかで出会ったような気がする。

始まりは唐突で、彼の日常は彼女との出会いから大きな展開を迎える。それはひとつの約束 「第一章・無印編完結！ 次回から一期と二期を繋ぐ空白期に突入します」

## プロローグ（前書き）

とある世界の少年は涙を流し、絶望した。

そんな少年を陰ながら見守り続けた二人の男女は、彼の幸福を祈り、ひとつの計画を始動した。すべては彼の明日のために

貴方に幸せを。……私は貴方を愛していましたよ

## プロローグ

桜咲く世界で膝を着く銀灰の少年。

その後ろには漆黒の少年と黒髪の少女が手を合わせる。

彼らの前には黒曜石を使った石碑が建てられている。石碑には「  
、眠る」と彫られていた。

銀灰の少年の瞳は水が溢れ、綺麗な銀灰の瞳が色を濁す。背後では二人が泣き止ましても彼はその場から動くことはなく、一歩たりともその場を離れようとしない。

それに痺れを切らした漆黒の少年は銀灰の少年の肩を乱暴に掴む。

「いつまで泣き続けるつもりだお前は」

「ちよつと、それは禁句でやりすぎですよ」

銀灰の少年に怒鳴りつけるように強く言う漆黒の少年。黒髪の少女は少年の行動に仲裁に入るが、腕を引っ張るも漆黒の少年の腕はビクともしない。

それに対し、銀灰の少年は虚ろな瞳で漆黒の少年を一瞥する。漆黒の少年は何が可笑しいのか、少年の目を見て唇を歪めた。

尚、黒髪の少女は二人の一触即発する淀んだ空気に慌てふためく。

「……何が可笑しい」

銀灰の少年が口にした。

黒髪の少女は驚き、漆黒の少年は冷静に応答する。

「ふふ。ようやくこちらに反応したなと思ってね。……悪い。三日三晩、寝ずにずっと泣き続けているから壊れたかと考えていた」  
「壊れる？ とつくの昔に俺は壊れてるよ。 に出会えなければ。」

兄さん、あんただだって壊してるさ。何なら、今壊しても良いよ」

「お前程度が俺を壊すだと？ それこそナツシングだ！ 愚弟に壊されるほど俺は弱くないぞ。力も、心もな」

「……なら教えてくれよ。俺はどうすればいい？ この行き場のない怒りを何にぶつけ、この消失感を何で補えば良い。兄さんならわかるだろう？ 大切だったものを奪われた、俺と同じ……」

「甘えるなよ愚弟。お前は俺のように、この気持ちを簡単に捨てられるわけがないだろうが。お前は優しすぎるんだよ。何もかも一人で背負い込み、誰にもそれを吐かない。お前は俺と違いすぎる」

漆黒の少年は弟である銀灰の少年に言い捨てる。

黒髪の少女も少年の言葉に頷く。少女も続く。

「私もそう思いますよ。貴男は優しすぎる。私や が何度聞いても、貴男は何でも無いの一点張り。私たちは貴男のその負担を少しでも担いたかった。あの子達も同じです。どれだけの魔法を使い、どれだけの力を持つと一人の人なのですから」

黒髪の少女は銀灰の少年を抱きしめる。

少年はいつたい何をも思ってたが、されるがまま、彼女に身体をを預けた。少しだけ、甘えても良いよな。

少女は少年の内情を悟ったのか彼をさらに強く抱きしめた。

銀灰の少年はどっと疲れが出たのか、緊張の糸が途切れ意識を手放した。

「……どうやら眠ったようだな」

「はい。そうみたいですな」

少女は銀灰の少年を膝の上に乗せ、頭を軽く撫でる。少年はこちよばいのか小さく体を震わせた。

「それで、良いのか？」

「何がですか？」

漆黒の少年に少女は疑問を返す。

少年は肩を竦め、少女に近寄った。

「このまま何も言わず、転生させても？」

少年は少女に呟いた。少女はその返答に頷く。

少年もそれをイエスと捉え、とある術式を少女と眠りに就いた少年の下に展開する。

少年と少女は眠りに就く少年に、今まで見せなかった笑顔を見せた。

来世では幸福であらんことを

貴方に幸せを。……私は貴方を愛していましたよ

少女はゆっくりと少年を地べたに寝かせる。その刹那、少女は少年の額にキスを落とし、その場から離れた。

次の瞬間、術式は複雑な魔方陣を描き、七色の虹彩を放つ。光が強まるごとに少年の身体から銀灰の粒子が零れ、徐々に姿が薄くなり強烈な光を放つ。

魔方陣から徐々に光が失われ、完全に消え去ると眠りに就いていた少年は、跡形もなく姿を消していた。

## プロローグ（後書き）

プロローグから複数の伏線を置かしていただきましたが如何でしたでしょうか？

最初からクライマックスなような気もしませんが、初めての試みでどうだろうかと思いつつ執筆しました。これからどう話が進んでいくか自分でもわかりませんが頑張って執筆して行きますのでよろしくお願いします。

ついでにちょっとした次回予告を

予告

舞台は海に隣接した街「海鳴市」

私立聖祥大附属小学校3年生となった少年は平凡な毎日を送っていた。

そんなある日、少年は久しぶりに大きな桜の木がある公園を訪れた。そこで少年はとある少女に出会う。その少女を見て少年は僅かに熱を帯びた。

気高く、美しく、そして、守りたいと思わせる魅力を持った少女に

最後に感想を。

初めてパソコンで執筆したけど、パソコンで執筆は難しいですね。

## 第1話「歌姫と桜」（前書き）

私立聖祥大付属小学校。

桜咲く新学期、少年は小学3年生となった。平凡な毎日を昼寝で過ごす彼は、新学期になっても素行はそのまま、周りからは昼寝王子と呼ばれていた。

そんな彼は樹齢400年の大きな桜の木がある公園を訪れた。それは単なる気まぐれで、ただ桜を見たいと思ったから。そうして彼は金色の少女と邂逅した。

気高く、美しく、尚且つ、護りたいと思ったひとりの少女に

## 第1話「歌姫と桜」

私立聖祥大付属小学校。桜咲く新学期。出会いの季節がやって来た。

子どもたちは新しい学年と新しい友達に胸を躍らせ、終業式以来の友人たちとの再会を楽しみにしているものもいる。

今日からまた新たな学期が始まる。少年少女たちは始まりの始業式に臨む。

「ふわあ。眠たい……」

そんな中、始業式が始まってそうそう、眠たそうな顔で椅子に座っている、ひとり少年がいた。

『昼寝王子』と有名な彼は小学校に入ってから、殆ど寝てばかりの日常を送っていた。授業の大半は睡眠に費やし、残りは食事など趣味に充てている。

担任は彼をどうにかしようかと奮闘するも更正する兆しがみえない。授業中に問題を解かせるも、どんな問題ですら簡単に解いてしまう。逆にミスを指摘されることが多く、頭痛の種のひとつである。

最近ではあまり寝ないでくれているが、歴史や算数（数学）についてはたまに寝ていたり、国語や道徳については完全に熟睡している。

彼の日常はそんな平凡な毎日である。……平凡だと思う。

「かつたるい……」

少年は半眼で面倒そうに呟いた。

始業式が終わり、クラス発表が行われた。クラスは去年と同じだが中身は全く違う。聖祥の三姉妹がクラスに加わっている。

「三姉妹ね。どうでも良いけど関わりたくないな。……関わったら最後、安らぎが遠のきそうで怖いし」

クラス表から目を逸らし、横を見ると幸か不幸か当人たちが集まっていた。

左から高町なのは。アリサ・バニングス。月村すずか。この三人を仲良しグループとし、聖祥の看板娘たち、聖祥の三姉妹と男子陣から呼ばれているらしい。

よくその意味はわからないが、何でも男子たちの大半は、彼女たちに少なからず好意を持っており、それらの男子たちが付けた通り名で、崇める言葉らしい。

「……早く学校終わらないかな？」

少年は人垣の中で愚痴るように呟いた。昼寝王子はどこにいてもめんどくさがりやである。

学校は午前中で終了した。

新クラスに集まったのは、殆ど前クラスと同じだった。新人としては先に上げた三人と、新たな転入生二人を迎えたぐらいだろう。

転入生は緋色の髪を持った榊原氷華と、その双子の妹榊原結衣の二人である。

どちらも将来有望な容姿をしており、男子陣の大半はホの字である。

二人の転校生の紹介が終わると、次は新クラスでの自己紹介。めんどくさがりな僕は寝たフリで通そうとしたけど、結局やらされた。

担任曰く「自己紹介ぐらいいはして下さい」だそうだ。

寝てれば、昼寝王子の通り名を持つ僕だから、それだけで紹介になると踏んだんだけどな。

そう簡単に世界は、思い通りに事を運んでくれないみたいだ。まあ、良いけど。

「自称昼寝神です。よろしく」

自己紹介？を終えると昼寝王子はすぐさまうつ伏せになり、夢の世界をさ迷った。

周りからは苦笑の音が零れたり、担任が「き、きちんとやりなさい！」と言ってるみたいだけど、気にせず情眠を貪る。

そうして時は、現在に至る。

現在僕は久しぶりに、街を象徴するひとつ、樹齢400年の大きな桜の木がある公園にいる。理由としては大したことはなく、ただ桜をみたいと思ったからだ。

まあ、桜の木を背もたれに日向ぼっこを考えていたのは内緒だけどね。

「久しぶりに来たけど、何にも変わってないよなあ。まあ、良いことだけど、桜の木一本に回りは草木って、風情がないね」

見渡す限り、桜は「海鳴市」の歴史を重ね続けるこの一本のみ。他は針葉樹やただの木々のみ。これらの樹木は数年前に植え替え

られているから、事実上、この桜の木だけがこの街と共にある。あとは緑が広がる芝生だけである。

そういえばさつきから歌が聞こえるけどどこから……。

「っ！？ 誰か居るのかな？」

桜の木に近づくとそこに綺麗な女の子がいた。容姿はシルバープロンドが特徴のセミロング。両サイドに小さなお団子を作ったツイントール風な髪型をした少女。

同年ぐらいの少女だがどこか同年代の少女の風貌を脱している。小学生の容姿ながら気品溢れる淑女のような。

僕は彼女を見て世界が停止した錯覚を覚えた。僅かに熱を帯びた唇。心音が速まる。尚且つ、彼女を見た瞬間、目の前がぼやけた。

「君は……一体……？」

「私？ 私は夏樹果凜。貴男は？」

「僕は……神城ユウヤ。私立聖祥大付属小学校所属の3年生だ」

僕は初めてはぐらかさずに名前を名乗った。夏樹果凜と称した少女に。

だけど、名前を聞いた時、彼女には自分をはぐらかすことは出来ないと思った。

こんな気持ちになるのは生まれて初めて……。いや、二度目である。

一度目は誰もいないたったひとりの両親。そして、肉親以外で初めて少女。

彼女、夏樹果凜を護りたいと心の底から思えた。

気高く、美しく、尚且つ、護りたいと思ったひとりの少女に

僕、神城ユウヤはこの世界で初めて、心の底から護りたいと思う少女と出会う。

僕の心を掻き乱す、『歌姫』夏樹果凜と桜の木で邂逅した

## 第1話「歌姫と桜」（後書き）

ようやく主人公の名前が出ましたが、引っ張りすぎましたかね？  
ただ、まだ原作キャラと出会ってないのがあれな気がします。名前は出てるのに会話はなし。新キャラの方が出番早いですし。理由はいろいろあるんですけどね。

ちなみに私のサイトを訪れたことがある方はわかると思いますが、オリジナルキャラはサイトに登場するキャラを弄って使っています。彼らのストーリーは複数に枝分かれしており原点がとある執筆中の小説です。

では、そろそろ次回予告を

予告

神城の少年はひとりの少女と出会い、新しい自分を見つけていく。  
そして彼は金色の少女との楽しい談笑のひと時を味わう。楽しい時間  
間は時が進むのが早く、夕暮れを迎えた二人はまたここで会うことを約束し別れた。  
彼は少女を公園の外まで見送り、自宅に帰ろうとする。だが彼はベ  
ンチに座るある少女を見つけてしまった。

## 第2話「公園でのひと時」（前書き）

神城の少年はひとりの少女と出会い、新しい自分を見つけていく。そして彼は金色の少女との楽しい談笑のひと時を味わう。楽しい時間には時が進むのが早く、夕暮れを迎えた二人はまたここで会うことを約束し別れた。

彼は少女を公園の外まで見送り、自宅に帰ろうとする。だが彼はベ  
ンチに座る少女を掛けられた。

何だか懐かしいな

## 第2話「公園でのひと時」

どれだけ時間が経っただろう。

僕は家族以外で数時間も話したことは、過去に数える程度。一方的に聞く受け手であったが、今の僕は違った。

「夏樹はどうして此処に？」

「ん〜。何となくかな。この公園には街で一番大きな桜があるって聞いてたから見てみたかったんだ。ユウヤ君はどうしてかな？」

「僕？ 僕は……昼寝のためかな？」

「……日向ぼっこってこと？」

「うん。まあ、そうかな。此処での昼寝は普通と違ってとても気持ち良いんだ」

僕がそう言っただけで桜の木を背もたれに座ると、果凛はクスッと小さく笑う。

あれ？ 笑われた？

昼寝にしに来たって可笑しいのかな？

果凛の表情はどことなく笑みがある。それは純粹な笑みであり、人を馬鹿にしたような笑みではない。

ただただ可笑しくて、当たり前過ぎる自然な微笑み。その顔を見ていると怒るにも怒れず、ユウヤは微妙な顔で果凛を見つめた。

その視線に気づいた果凛は、また少し微笑を零した。

「ふふふ。ごめんなさい。君が本気で昼寝のために此処に来たと言ったから可笑しくて」

「えー。これでも正当な理由だと思うんだけど。だって、この桜の木をバックに陽射を浴びながら寝るんだよ。とても気持ち良くないかな？ 日向ぼっこに最適な昼寝スポットとして発展するはずだよ」

「んー。確かに日向ぼっこは気持ち良いし、お昼寝には最適かもしれないけど……。観光スポットみたいには発展しないと思うよ?」  
「大丈夫だよ。僕にとつては観光スポットも同じだから。だけど、夏樹が言う通り難しいだろうね、みんなの観光スポットには……」

ユウヤは笑顔で果凜に言った。

果凜はその答えに対し「ユウヤ君。それじゃあ矛盾してるよ。だけど、そういうの好きだな私。自分だけの秘密の場所スポットみたいで」と複雑な顔をしつつ、羨ましそうに呟いた。確かに、夏樹の言う通り、この場所は秘密の場所と言える。

実際此処に樹齢400年、長寿の桜があることを知る者は少ない。この街の原住民でもほとんど知られていない、樹海に位置する場所だ。

図書館や海鳴市の歴史書ならば、情報を手にすることは出来るが、此処まで来るには地図がない。

一度公園の森……樹海に入れば神隠しに遭うと言う噂もあり、子どもを此処に入らせないように、親たちは小さい頃からそうした昔話をして、子どもを恐がらせ、近寄らせないようにしている。

だが、子どもは好奇心旺盛の者も少なからずいる。現に僕や夏樹も此処にいる。

そのため此処の桜に近寄れるものは少なく、観光スポットとして発展することはないだろう。

「だけど。本当に良いよね、此処は。誰にも邪魔されず、自分だけの世界にいるみたいで安心できるよね」

「ああ、同感。此処にしていると安心できる。それに、今回なんか偶然だけで夏樹と会えたし」

「ふふふ。私もユウヤ君に会えて嬉しいよ。もしかしたら此処は縁結びのご利益でもあるんじゃないかな?」

「そうかもしれないね? 今回だけかも知れないけれど、少なから

「ずあるかも」  
「でしょ！」

果凜はユウヤの同意にすぐさま振り返った。自然に、いつの間にかユウヤの横に座っていた果凜は、振り返るとユウヤの顔との距離がキスできるほど近付いていた。

ユウヤも果凜の顔がいつの間にか正面にあり驚く。だが、一寸見つめ合うと二人はどちらからでもなく、笑う。ただ笑う。

何が可笑しいとかではなく、恥ずかしかったからでもなく、自然と笑いが零れたのである。

二人はその後お互いを意識することなく、自然体で談笑を楽しんだ。

楽しい時は時間が過ぎるのが早いと言うが、どうやら事実のようだ。いつの間にか青空は夕暮れ時を迎えようとしていた。

「もう家に帰る時間だね。楽しい時間はすぐに終わっちゃうね、ユウヤ君」

「そうだね」

「じゃあ、私は帰るね。帰りが遅くなったりしたらお母さんから怒られちゃうから」

「うん」

「ユウヤ君も早く帰りなよ。あ、そうだ。ユウヤ君。また、此処で会えるかな？」

「えっ？ それって……」

「だから、また、此処でお話ししようってこと。だけど無理には言わないから……」

果凜は少し寂しそうに言った。

ユウヤは少し考える素振りを取るが、すぐさま微笑む。

「こちらこそ、また、夏樹とお話したいな。夏樹と過ごす時間はとても楽しいし、夏樹はもう友だちだよ」

満面の笑みを浮かべ、ユウヤは左手を果凜に差し伸べた。

「友だち？ ユウヤ君が、私の……」

果凜は繰り返す。フリーズしたパソコンのように。

こういったことにはあまり経験がない果凜。ましては、男の子と友だちになることなど生まれて初めてのことであった。

割とフレンドリーな性格ため男女共に分け隔てなく友人を持つ彼女。だがそれは自分からであって、今回のような相手から差し伸べられるのは初めてであった。

男の子の友人に至ってもそうだ。友好的な友人は居ても、本当の意味での友だちはいなかった。

「ユウヤ君。……ありがとう」

しかし、果凜はすぐさまユウヤの手を取った。両手で、今まで見せたことがない素晴らしい笑顔で。

ユウヤはこの時、不覚にも果凜の笑顔に頬を染めた。気を許したものには感情を見せるが、起伏が少ないため、成熟した女性に抱きしめられたであろうと、お風呂に入ろうと、頬を染めるようなことはなかったユウヤだが、今回は違った。

果凜の笑顔はユウヤにとって眩しすぎた。彼女と居ると自分が変わっていくのがわかる。

何だか懐かしいな

ユウヤは心を満たす何かをそう呟いた。

果凜と友だちになって公園の外まで見送った。桜がある此処から帰り道がわからないと焦っていたからである。

(まあ、樹海と呼ばれるぐらいだから帰り道がわからなくなるのは当然か)

ユウヤは桜がある森を見て納得する。

果凜を見送った後、自分も帰ろうと公園を横切る。

「ユウヤ、君？」

どこからともなく声がした。

名前を呼ばれたユウヤはその声に思い当たる節がある。後ろを振り返る。

ベンチに座る紫色のロングヘアを靡かす、少女が目に入った。

「……すずか」

それは、聖祥の生徒であり、同じクラスのクラスメートであり、友だちで幼馴染『月村すずか』がベンチに座っていた。

刹那、すずかにユウヤは抱きつかれた。

## 第2話「公園でのひと時」（後書き）

良い雰囲気になりつつ、期待通りに進まない。それが私のモットーです。いえ、そうじゃありませんが。

と、一人漫才はこの辺で……。原作キャラもついに登場。しかし、こちらも期待に応えていませんね。申し訳ないです。

伏線を多数置いて行くためなかなか進まないんです。早く戦闘シーンを書きたいです。と、愚痴を零しちゃいましたね。

とりあえず、次が更新できれば原作に入ると思うのですがどこから介入しようかな？ まだ、計画を立てていません。

あと、設定資料なるものを作ってますのでそちらもご覧ください。キーワードは『忘却』で調べるか、私のページへ。

では次回予告なるものを

予告

世界は何時だって不条理で、人に幸福ではなく不幸を運ぶ。

どうしてこうなる？ 僕が何かしただろうか？

目の前に映る光景は現実なのか。それとも虚像なのか。

ただわかってしていることは、人は何時だって盤上の駒だって言うこと。もしくは、ゲームのキャラクターなのかもしれない。

神様が居るなら教えて欲しい。あんたは何をしたいんだ？

今回の予告は大して重要ではないので気にしなくても良いですよ？

### 第3話「紫とメイドと流星。そして……」(前書き)

突然少年は紫の少女に抱きつかれた。

いったい何事かと思えば、それは……。

そして、彼の平凡な日常は終わりを迎える。空から21の流星が見えた。

それは本来、人の肉眼では捉えることは出来ない。だが、彼には見えた。

その異質な碧眼の瞳を思わせる色と形状をした宝石の輝きが

平凡な日常は終わりを迎えるけど、悪い気はしない。今の退屈な日々を脱するには……

### 第3話「紫とメイドと流星。そして……」

突然すずかに抱きつかれたユウヤはその衝撃を殺し切れず、一、二歩程度後ろに後退する。

ユウヤの頭の中ではアラートが鳴りつつも、第三者の観点から状況を分析する自分がいた。

「……すずか。一体どうしたんだ？」

すずかの両肩を持って前に押し出し、自分への拘束を解く。

すずかは簡単に離れてくれたが、俯いたまま理由を話そうとしてくれない。

ユウヤは困り顔ですずかを見つめる。

「口を閉じたままじゃ、話も出来ないぞ、すずか」

ユウヤは再度訊ねた。すずかの顎に左手を当て、自分の顔を見るように動かす。

と、すずかは徐々に顔を赤くさせ、りんごのように真っ赤になる。

「か、かお……」

「ん？ どうした。話す気になったのか？」

「……顔が近いよ!？」

「っ!?! おいッ!」

すずかが突然、悲鳴を上げたかと思うと僕を突き飛ばす。とつさのことで対応に遅れを生じた僕はバランスを崩し、尻餅をついた。

すずかの突拍子もない行動に反射的に声を上げたユウヤ。すずかはその声に肩を跳ねらせ、ばつが悪そうな顔をする。

「つつつ。いきなり抱きつくわ、突き飛ばすわ。一体何だっただ、  
すずか?」

「そ、それは……」

再度俯くすずか。これじゃあ無限ループに陥るのも時間の問題だ  
な。

それにこの様子だと説明したいけど、突き飛ばした謝罪をしない  
と、と思ってるんだろつな。……ああ、面倒な。

「とりあえず、謝罪はいらぬから説明をくれ。僕も今のは不用心  
過ぎたからな」

此方から謝っておけばあとはどうとでもなる。それに顎を引くつ  
て……女の子に簡単にするものじゃないな。反省、反省。

ユウヤは自分の不用心な行動を反省し、自己完結させた。

「で、そろそろ落ち着いたな。じゃあ、説明してくれ。どうして抱  
きつかれたのか。その返答を……」  
「う、うん」

少し間を置き、すずかをベンチに座らせ、落ち着きを取り戻した  
頃合いを見計らい訊ねると、もじもじさせながらもようやく返答を  
貰えた。

抱きつかれた真相を訊くと至って簡単なことだった。と言うか、

酷い理由だった。それはもう、少女らしい？返答である。

何でも、最近の僕は私すずかに冷たいとか、学校でもお話ししようとか、何日かしたら、高町とバニングスユウヤに僕を紹介したいとか……くだらない。

失敬。僕にとってどうでも。違うな。……僕が最も関わりたくない、二人と友だちにならないと提案してきた。……じっくりだな。

と、まあ、愚痴と面倒事が一気に転がり込んできたのだ。とりあえず、愚痴は許そう。後ろめたいことはないと言断言できるが、すずかに冷たいと言われれば断言は出来ない。

学校で会話をしない上、月村家にも最近では音沙汰ないのはすずか、月村家にとっては周知の事実だ。しかし、学校で会話をしないのには理由がある。

ひとつは僕の存在がすずかに悪い印象を持たせるかもしれないからだ。

……『昼寝王子』の通り名を持ち、尚且つ、上位の成績を納める僕だ。そんな不思議な存在が、すずかと話していれば、……すずかが不思議少女になるかもしれない。

それに、すずかの友人、高町やバニングスと関わったら、平凡が終わりを迎える気がするから。

(んー。……どうも、夏樹とお話ししてからキャラが変わった気がする。いや、テンションが上がってるからか。仕方ない)

あまり人接しない彼だが、気を許した者とは口調が変わる。どちらが彼の本質か、それはわからないが、どちらも彼であることは事実だろう。

「それで、ユウヤ君。なのはちゃんとアリサちゃんと友だちには…

……  
「……今は難しい。まだ、ね」

それが、僕から答えられる一言。  
実際、彼女たちは嫌いではない。けれど平凡な毎日を崩されるのは嫌だ。……と、まあ、建て前はそうだが、本音は違う。

まだ、彼女たちと友だちになれない。それが本音であって、答えである。

「まだって、どのぐらい？」

「んー。遠くない未来かな？」

それも本音である。

僕の答えであって、すずかへの返答であった。事実、それはもう……。

その後はすずかにどうしてなのかと、しつこく訊かれたがはぐらかし続けた。

そして軍配を上げたのは僕。すずかは理由を訊くのを諦め、僕と一緒に帰ろうと言うが、やることがあると行って、僕はすずかと別れた。

「友達か……」

夜空を見据え、手を伸ばす。

僕に友達を、ね。……僕も変わりつつあるというのかな。人は変わらざるえない。それが人の本質とでも言うのだろうか。

「子どもにしては大人びた理屈、だよな。……まあ、それが僕だから仕方ないか」

世界は異質。僕も異質。

そう思うことがよくある。自分の存在を否定する訳でもなく、本質だと理解している。この手は……。

「……さて、どこに落ちたか」

空から21の流星が見えた。

それは本来、人の肉眼では捉えることは出来ない。だが、彼には見えた。

その異質な碧眼の瞳を思わせる色と形状をした宝石の輝きが

「どうか致しましたか？」

どこからともなく声がする。

ユウヤの背後に控えるメイド服の美女。何時の間に現れたのかわからないが、彼女はユウヤの傍に控えていた。

「いや。何でもないよ、フォロウ」

「そつで御座いますか。では……」

そつ言つと、フォロウと言うメイドは姿を消した。ユウヤはため息を吐く。

そして、小さく微笑んだ

「平凡な日常は終わりを迎えるけど、悪い気はしない。今の退屈な日々を脱するには……」

何時の間にか手に持つ本を開いて眩く。それは古びた本で、中には古びた文字が執筆され、読むことは不可能である。古代語にも似ているがそんな物ではない。

それは異質な臭いを流す、不可解な書。人が持つには異端な存在。ユウヤは書から目を逸らし、空を眺める。落ちてくる輝きを見て、ユウヤの心が踊った。彼が求めるものはそこにある。

彼が求めていたのは、日常からかけ離れた、異常行為なのだから

### 第3話「紫とメイドと流星。そして……」（後書き）

さて、今日も後書きの始まりです。

前回の後書きの予告にも書きかましたストーリーが今回の物語には予告はほとんど関係ありませんでした。というより全然関係ありませんね？

しかしながら、今回はユウヤの本質を少々お見せしましたが如何でしたでしょうか。大人顔負けの小学生いたんに思えた方も多いかと思えますが、これは彼の一部であって本来の彼のひとつの顔といえます。彼は別に狂った子ではないのです。

ただ、全てに達観しているから今の顔が形成されたといえます。そして、戦闘狂なわけではないので悪しからず。

では次回予告に移ります。

予告

少年は知った。現実には非現実があり、幻想があるのだと。

少年は知った。世界にはまだ、たくさんの幻想があるのだと。

知ってしまった幻想。

それは非現実であり現実である。自分だけではないのだと。

それは異質であり異質ではない。自分には力があるのだと。

それを人はこう呼ぶ。『魔法』と

今回も次回更新の内容とあまり関わりがない？かも。

#### 第4話「魔法と少女」（前書き）

少年は世界に退屈していた。

毎日が変化もなく、ただ平凡と過ぎ去っていくならば昼寝をしてる方がまし。

彼はそう考えていた。だが今回、彼は見つけた。世界にとって異常だが、彼にとっては些細なこと。

彼は自ら平凡から脱し、日常からかけ離れた、異常行為へ足を踏み入れる。

とりあえず、退屈しのぎにはなった。……だけど、厄介事はごめんだ

## 第4話「魔法と少女」

夏樹やすずかと公園で出会ってから数日が経ったある日。  
学校では本格的な授業が始まっていた。

「……」

やすずかは弁当箱を鞆から取り出しながら、寂しげな顔でひとつの空席を見つめていた。そこは、数日前に公園で別れた幼馴染み、神城ユウヤの席である。

彼は現在学校を欠席している。理由は風邪と言うことだが、お見舞いに行くも、彼は家にいない。

両親は海外出張で家を空けており、神城家にはメイドとして住み込みで働いているフォロウさんしかいなかった。

フォロウさんが言うには病院に行っている、お休みになっていると理由を付けられ、家にながらせて貰えない。

「やすずか、どうしたの？　ボーっとして。と言うより、何で神城の席を……」

やすずかがユウヤ君のことを考えていると、アリサが怪訝な顔付きでやすずかを見る。

「うんうん。何でもないよ」

やすずかはアリサに何でもないと、笑顔を浮かべるが、不安げな気持ちには隠せなかった。零れるように「……ただ、心配なだけだから」と呟く。

アリサは「やすずかを心配させるなんて……神城の……」と言って

いるが、少しきこちない。アリサは、あの一件以来、神城ユウヤを苦手としてる。

その一件とはすずかとアリサが仲良くなる以前まで遡る……。

「アリサちゃん、すずかちゃん。早くお昼ご飯を食べよう。屋上で私たちの場所がなくなっちゃおうよ」

昔を思い浮かべようとしていたとき、廊下から、栗色の髪を持つ少女が二人に声をかける。少女、高町なのはが弁当箱を持ってお昼を誘ってきた。

私とアリサちゃんは、なのはちゃんの誘いに頷き、すぐさま後を追う。

なのはちゃん。グットタイミングだよ。すずかは内心で、なのはの誘いにガッツポーズをしていた。

場所は変わって学校の校外。

すずかたちが昼食を食べるため、屋上に向かっている頃、噂の少年は森の中にいた。噂の少年、神城ユウヤは学校をボイコットしていたのである。

「すずかには今度、謝らないとな。お見舞いに来てくれたのに門前払いしてしまったし。学校でもお話しすると約束したのに……。それに僕が学校をボイコットしていると知られたら」

ユウヤもまた、すずかのことを考えていた。謝罪の理由と謝罪方法を。そして、バレた際の恐怖を想像もとい考えていた。

「しかし、春だというのに肌寒い日が続く。これも地球温暖化が原因なのか？」

的外れなことを考え、気を紛らわらす。

と、ある場所で足を止める。そこは荒れ果てた大地だった。ついさっきまでは、緑溢れる森であったが、ここは地が抉れ、木々が折れている。

「さて、此处で何かあったのは事実。痕跡はこの荒れた森の一角のみ」

周りを見渡すが、荒れた地形は原因不明。動物が逃げ出した訳でもなく、ましてや、怪獣なんて非現実的な生物が現れた訳ではないだろう。

だが、ユウヤの考えは非現実だった。

晴天だった空は、暗闇に染まった。

時刻は夜。

銀髪を緩やかに靡かす少年が、高層ビル街の一角に佇んでいる。見据えるは一点。黒い淀みと桜光の軌跡。

「なるほど。アレが噂に聴く魔導師の杖か。となると、あの黒い淀みはロストロギア、なのかな？」

全体を白い衣で隠す少年は呟く。

衣の背には銀の十字架が刺繍され、顔はフード越しからほら見える、銀髪のみ。顔は見えないが身長から見て、高校生程度の少年であると思われる。

「『魔法』にまだ慣れてないみたいだな、あの子は……」

どうするべきか。

介入するもよし。傍観するもよし。

黒い淀みは白き魔導服を纏った少女を追い込む。

「……カウント」

少年は片腕を平行に伸ばす。

左腕に現れる円陣。お伽噺やフィクションに見られる、魔法陣が展開する。

少女の魔法が桜なら少年の魔法は銀。違いは杖を使用するかしな  
いかのみ。少年の魔法は後者である。

「……3」

魔法陣は複雑な術式を描き、銀の輝きを放つ。膨れ上がる銀の円球。バスケットボール程度の魔力の塊エネルギーを魔法陣の前に生み出す。

「…2」

さらに膨れ上がり、収束する魔力の塊。直径30cmほどの大き

さまで膨らむ。

遂にカウントダウンは大詰めである。

「1」

魔法陣、収束した魔力の塊を固定。

魔法陣を制御する左腕に銀の魔力が収束し、銀の杖を生み出す。

それは少女が使う機械仕掛けの杖ではなく、金属で出来た本物の杖。

ただし、その杖は神秘を生み出すとされる、伝説を形にした「物質化した奇跡」と云われる宝具のひとつ。

「第五式『天破光滅』」  
デストリユクスイオン

魔法陣に杖の一撃を与える。

魔法陣はその衝撃に爆発的な光を放つ。刹那、膨大な熱量を持った、莫大な銀の魔力の砲撃が黒き淀みを飲み込む。

銀の軌跡が消失するまで僅か10秒。

周りを確認するも被害はなかった。

黒い淀みは消失し、残ったのは碧眼の宝石と反撃に移ろうとした白き少女。そして、フェレットの驚いた表情だけだった。

「やりすぎた、かな。最低限の威力に抑えたつもりだけど……まだ出力調整が必要みたいだね」

少年は今撃った収束魔法について、ぶつぶつと反省点を呟く。

だが、それも一瞬。碧眼の宝石を杖に封印した少女とフェレットが、此方に向かってくる姿を捉えた。少年はため息を吐く。

「とりあえず、退屈しのぎにはなった。……だけど、厄介事はこめんだ」

少年は少女とフェレットを見据え、足下に銀の魔法陣を編む。魔法陣は膨大な光を放つと共に少年をその場から消した。

俗に言う、転移魔法の術式である。

少年が転移したのと入れ違いに、少女とフェレットはビル街に辿り着いた。

しかし、少年の姿は疎か、痕跡すらそこにはなかった

#### 第4話「魔法と少女」（後書き）

さてさて今日も始まりました、後書きです。

魔法少女がついに生まれましたがあっけない出番でした。というより新キャラのほう活躍してましたね。それと、ヒロイン力を開花させていくですか。なのはたちが脇役になつてる状況ですね。

私も執筆していてこのような状況に陥るとは思いもしませんでした。とくにすずかのヒロインとしての才能に私はびっくりしています。

また、新キャラの実力が何か凄すぎて……。彼一人で事件解決するんじゃない？とか思ってたります。

しかし、それは 아닙니다。ですが、彼が無双化したら世界滅ぶかも。と冗談はこの辺で、あまり意味を持たない次回予告へ。

予告

高町なのは

聖祥大付属小学校3年生。

彼女はつい最近までどこにでもいる平凡な少女と言っても過言ではなかった。

しかし、ひとつの出会いが彼女を新たな世界へと導く。

『魔法』

それは世界に蔓延る幻想の一種。

しかし、少女は『魔法』と呼ばれる力を手にした。

『逆十字架』

それはひとつの罪であり、断罪者。

裁きを下す、執行人。しかし彼はこう呼ばれた。『忘却の魔法使い』と

はい。今回も次回予告とあまり関係ありません。ただ、これらの単語はある意味ではキーワードになっている……のかもしれない。この小説を読まれている皆様。もしよければ今まで出てきた単語を心の片隅に置いていただければ幸いです。

## 第5話「高町なのはの憂鬱」（前書き）

魔導師として覚醒した高町なのは。

そんな彼女はユーノと呼ぶフェレットが発掘した、???のジュエルシードと呼ばれる宝石を封印する手伝いをすることになる。

そして、魔導師としてすぐに相対したジュエルシードの封印のさなか、彼女を助けるように一陣の銀の閃光が横切る。たった一撃。圧倒的な魔法の力で彼女が苦戦していたジュエルシードの暴走を止めた。放たれた先を見ると暴走を止めた人物は消えていた。あの銀の魔力光を放った人が誰なのか……、彼女は夜空を見上げる。

非日常に足を踏み込んだが、相変わらず平凡な日常を送る高町なのは。

今日はそんな高町なのはが見たとある風景のひとコマである

な、なんなのよッモー!!

## 第5話「高町なのはの憂鬱」

こんにちは。

高町なのはです。ひよんなきっかけから魔法少女をはじめました。

「ユーノ君。アレは一体何だったのかな？」

私の隣にいるフェレット、ユーノ君に危険なところを助けられた銀の閃光について訊ねる。ユーノ君は神妙な顔つきで周りを見渡すとひと息吐いて、説明してくれた。

「僕もわからない。ただ魔導師の仕業には違いがないんだ。そして、普通の魔導師じゃないことは確かだよ。ああ。なのはも初めて魔法を使って、あれだけの動きを見せてたから才能があるよ」

ユーノ君はそう言った。

私はユーノ君に褒められたことが嬉しかった。同時に、私はユーノ君が言う魔導師の人にひとつの疑問を覚えた。

「普通の魔導師じゃないって？」

「規格外、と言っているのかな。本来なのはのような莫大な魔力量を持つ魔導師は数が少ない。そうするとなのはも規格外に入る」

「うんうん」

「けれど、あの人は暴走したジュエルシードを圧倒的な魔力でねじ伏せた。その際に放出された瞬間魔力は、なのはの三倍以上はあると僕は考えている」

「……え？ ええっ！？」

私の三倍！？

それは確かに規格外と言うユーノ君の答えは当てはまるね。私の魔力も十分規格外と言ってたし。だけど……。

「ユーノ君。あの人はどうしてジュエルシードの暴走を止めてくれたのかな？」

「それは……僕もわからない。魔力を感知した時には暴走したジュエルシードに砲撃が当たっていた。その時僕はジュエルシードを狙った魔導師か何かかと思っただよ。けれど、砲撃を放った魔導師は暴走を止めただけで、その場から去った。……一体なにがしたかったのか僕にはわからないよ」

ユーノ君は自分の推論を述べて、ため息を吐いた。ユーノ君の話は筋が通っている。だけどそれは、私が欲しかった答えではなかった。

「私はあの砲撃……だっけ？ 砲撃を放った魔導師さんは、私を助けるために砲撃を撃つたように思えたよ」

「なのは。……そうかも知れないね。けれど、注意だけはしておいて。もしかしたら今回だけ……かもしれないからね」

「うん。わかったの。だけど、今度出会ったらお礼を言いたいな」  
「そうだね」

ユーノ君はそう言ってジュエルシードの暴走の跡を見る。

私が魔導師に目覚めた場所。ユーノ君を預かってくれていた、病院？

私たちは二人（一匹を含む）で絶句した。

「ゆ、ユーノ君？」

「な、なのは……」

「ごめんなさい……」

私たちはジュエルシードの被害にあった病院の成れの果てを見て、逃げ出した。

中の動物さんたちは無事だったようだけど、私たちは逃げるしかなかった。

家まで逃げ着くと、少し怒っていたお兄ちゃんと、心配してくれたお姉ちゃんの二人が門柱にいました。

その後はフレットことユーノ君の紹介と、外出した事情を掻い摘んで説明すると、とんとん拍子で話が進んで、ユーノ君を家で飼えるようになりました。

ただしその後、夜、勝手に外出したお説教があったけど。……正座はキツイよ〜。

次の日。

私はテレビのニュースをビクビクしながら見ています。昨日の病院の被害についてを確認したかったから。

「あ、あれ？」

ニュースが終わるまで病院のびの字もなく、ニュース番組は終わってしまいました。あれ？

私は疑問に思いながらも学校に行く時間になったため、ユーノ君に病院のことを頼んで私は学校に向かいました。

学校までの道、アリサちゃんとすずかちゃんと合流したけど、やはり動物病院のことは何も知らないようです。ちなみに、ユーノ君を家で飼えることを説明すると私のことのように嬉しそうにしてくれました。

だけど、病院のことはまるで狐に化かされたような気分なの。けど、私の胸には確かに昨夜に起こったことは事実だと訴えます。

それは魔導師の杖。不屈の魂『レイジングハート』の赤い宝石がキラリと光る。

学校に着くとすずかちゃんの幼馴染、神城ユウヤ君の姿があった。『昼寝王子』と言うあだ名を持つ彼は名の通り何時も寝ている。というよりも寝ている姿しか見てないような……。

体育や実験、昼食の時間は必ず起きてるけど。ほとんどが寝ている。

「今日は来てるようだけど、相変わらず寝てる姿しか見せないわね、こいつ」

「アリサちゃん。抑えて抑えて」

アリサちゃんが神城君の頭を叩こうとするのをすずかちゃんが止める。

二人も相変わらずだなあ。……あれ？

神城君の左袖から白い布地が見えた。包帯を巻いてる、のかな。

「今日こそは、覚悟ッ!」

「だから、抑えてよアリサちゃん!!」

私が神城君のことを見ていると、すずかちゃんの拘束を振り切ったアリサちゃんが、勢い余って神城君の左腕にぶつかつた。同時に頭を叩いてしまった。

「……………何をしてるんだ、バニングス？」

神城君がむくりと体を起こす。

目は笑っておらず、虚ろな赤紫の瞳で、犯人のアリサちゃん目を捉えていた。

「な、なによ!」

虚ろな瞳に対抗するように、アリサちゃんも強気な態度で神城君に立ち向かう。

だけど、神城君の威圧に背筋から脚にかけて揺れていた。……………謝れば早いのに。

私は何時も変わらないアリサちゃんの態度に苦笑を漏らした。

「……………すずか」

アリサちゃんからすずかちゃんに視線を移す神城君。それにはすずかちゃんもちいさくなる。

「えーと」

「ここ数日はすまない。とりあえず弁明はそれだけだ。じゃあ、お休み……………」

「ほ、ほえ!?! うん。お休みなさい」

「ああ……………」

神城君はそう言って再び眠りについた。私とアリサちゃんは蚊帳の外。すずかちゃんは苦笑を漏らしていた。というより私たちは話について行けなかった。

すると、正気に戻ったアリサちゃんが髪を逆立て叫んだ。

「な、なんなのよッモー!!」

その日、アリサちゃんの声が学校内全土に響いたとか、響かなかったとか……。

また、再び、神城君を叩こうとしたのは言うまでもなく、それを必死に止めたすずかちゃんは勇者でした。 当の本人は夢の中をさ迷っていたようだけど……。

けれど、神城君はどうして何時も寝てるのか。……謎が多すぎるよ。

## 第5話「高町なのはの憂鬱」（後書き）

……やってしまった。

その一言に尽きます。私は旅に出ます。探さないでください。旅については冗談ですが、やってしまったのは事実。

んー。最後はなんとなくユウヤの学校の姿を描写したかったのですが、如何せん語彙力が足りず痛い子に見えるかもしれませぬ。というかアリサを無視し、すずかに謝罪を述べて夢の世界に漂うユウヤ。本作のユウヤらしいのですが……。

皆さんのにはありでしょうか？ 感想を頂ければ嬉しいです。

今回は次回予告はお休みです。ネタがない訳じゃありません。

次回はアリサ視点の日常風景。「アリサ・バニングスの憂鬱」を予定しているからです。

では、ひとことでも良いので感想をお待ちしています。

**第6話「アリサ・バニングスの憂鬱」(前書き)**

アリサ・バニングス

聖祥大付属小学校3年生。

高町なのは、月村すずかの親友。

神城ユウヤに敵意を持つも反面では……。

そんなアリサ・バニングスのとある一日を語ろうと思う。

今日はとんだ厄日だわ

## 第6話「アリサ・バニングスの憂鬱」

私の名前はアリサ・バニングス。  
一応、学校一の秀才と呼ばれているわ。だけど、たったひとつ私  
が負けているものがある。

算数（数学）についてののみ、昼寝好きな神城ユウヤに負けている。  
何時も寝ていて、どこで勉強をしているかわからない男子に私が  
負けた。

有り得ない

「ああ。憎たらしい」

「アリサちゃん」

すずかの声に引き戻された。

……すずかの幼馴染じゃなかったら今にでも問い質ただしているとこ  
ろよ。

私は神城ユウヤをキツと睨みつけた。

「んー。まあまあかな」

するとなのはが今返された算数の答案を見て呟く。どれどれ。

私はなのはの後ろから答案の点数を確認した。私はその点数に、  
先ほど消火された火が再び点火した。

「それでまあまああって何よー！ 満点じゃない、なのは！？」

「く、ぐるじいよ……アリサちゃん」

私は私の逆鱗に触れたなのはを掴み、振り回す。なのはも悪だわ。

私はなのはに制裁を加える。

「いたい。痛いってば」

私は聞く耳を持たず、次に頬を抓る。

……癖になりそうだわ。何よ、この柔らかい生物は。だけどこれは制裁。

あの、神城ユウヤと同じ結果を叩き出す、なんちゃってなのはへの制裁なのよ。

「うう。痛いよアリサちゃん。アリサちゃんだって満点じゃ……ひっ!?」

「ふふふ。どの口が言ってるのかしら」

「いたふいです」

そう。私も満点よ。

だけどなのは。なのはは理数系は実際私より出来てるのよ。羨ましい。

そして、努力すら見せない神城ユウヤがなのはより上ですって！  
納得出来る訳がないわよ!!!

アリサはふっふつと湧き上がる、恨みつらみをなのはの頬を弄り  
ことで発散していた。

「なのはちゃんもアリサちゃんも仲が良いな。……私も」

そんな二人の仲むつまじい光景を隣で見ていたすずか。ユウヤの姿を見て頬を染めていた。

と言うより、彼女たちの姿は微笑ましいものなのだろうか？

数分後。

なのは完全にノックダウン。

机の上で目を回している。私はお肌つやつやで現在進行形で上機嫌よ。

「んー。流石にやりすぎたわね」

弄くり倒したなのはを見て、少し罪悪感を感じた。神城ユウヤへの理数系の嫉妬を次に良いなのはへと八つ当たりをしてしまったのは反省している。

「今度からは三分の一まで自重しましょう」

私は考え改め、再度こうしたことが起きれば自重することを誓った。

「やらないで、欲しいなの……」

あら。私の自重の誓いを聞いたのか、謔言のようになのはは呟いた。

……訂正。抑えるように努力するわ。

だけど、なのはの頬ってぷによぷによして気持ち良いのよね。たまになら

「うっうー。酷いよー」

……気絶してるのよね。

その前に私の心を読んだの？ 気の、せいよね。何度見ても伸びてるし。

なのは、夢の世界で何を見てるのよ

なのはの夢。

「うううー」

なのはは今、壮絶な戦いに巻き込まれていた。目の前に迫る、ブ  
ロンドの影。

「ふふふ」

「ま、待って！」

「待ってはなしよ、なのは」

それは、手を開いては閉じて近づくアリサ。その姿はまさに悪魔。そう思えたとなのはは後に語った。

アリサの不気味な動きになのはは後退する。しかし、後ろはもう壁。これ以上下がることは不可能。

「なのは、覚悟っ！！」

「いーやーっー！！！！」

なのはの悲痛な叫びを引き金に、髪を逆立てたアリサがなのはに

飛びかかった。

そして、なのはの頬をぷにぷに、めちやくちやに弄り始める。

「やめ……、痛……。止め……」

「それは却下に決まってるじゃない？ ふふふ、なのは」

「アリサちゃん、息が、…やめ……ひど、いよ……」

なのはの頬は変幻自在に変化し、頬は蒸気する。アリサも同じように息が荒くなり、鼻息までも荒くなる。

なのはの頬は抓られ、痛みから赤くなるだけでなく、アリサに鼓動するように息も荒くなる。遂には……。

なのはの視界はアリサの満面の笑みを前に、ブラックアウトした。

「はっ！…！」

なのはが急に起き上がった。

まだ、休み時間だけかどうかしたのかしら？ 気絶してた割には元気……。

「なのは。顔が赤いけど、どうかしたの？」

「あれ、ホントだ。なのはちゃん大丈夫？」

私とすずかは目を覚ましたなのはに訊ねた。肩で息してるし、気

分が冴えないようね。心配だから保健室に……。私のせいで気絶したから心配な訳じゃないわよ。

ただ、友達として心配な……。って、私を見て何で顔を更に紅くするのよ!!

「あ、アリサ、ちゃん？」

「な、何よ、なのは。私がアリサ・バニングス以外に見える訳？」

「ほ、本物？」

「はあ？」

どうもなのはの状態が可笑しい。

私を見た瞬間、「本当に本当に、アリサちゃんだよな？」としつこく訊いてくる。私が私以外に居たとでも言いたいのかしら。

「なのは。あんたまだ寝ぼけてるんじゃない？」

私がそう言うとなのはは周囲を見渡し、首を傾げる。

「あ、あれ？ 私……。な、なんだ。夢だったんだ。だけど私何時間の間に……。ん？」

私を見ながら頭に幾つもの？を上げるように、悩むのは。

一体どんな夢を見てたのかしら。……恍惚そうな顔をしてたけど……まさか、ね。

私は頭を何度も振り、変な想像を振り払った。ああ。なのはが変だから私まで

私はチラリと神城の席を見やった。

刹那、神城はニヤリと笑みを零したように思えた。

私はそれに驚いた。そしてもう一度見たけど、神城ユウヤは規則

正しい吐息をつきながら惰眠を貪っている。

気のせい、よね

再度見るけど神城ユウヤは笑みどころか可愛ら……何を！？  
ふーはー。ふーはー。……か、神城は子ども特有の寝顔で寝入っている。

なのはのせいで私まで……

なのはを横目で見やる。

しかし、未だ現実と夢の境目を行き来しているようで、当分戻って来れないみたい。……はあー。

今日हतんだ厄日だわ

## 第6話「アリサ・バニングスの憂鬱」（後書き）

……私に文才の才能がないことにお気づきの人はどのくらいいるのでしょうか？

どうも、キャラ崩壊してる……もとい、キャラが勝手に一人歩きしている。そんな気が。アリサが壊れたと思われた方は拳手を願います。

パトラッシュは人生の墓場にたどり着きました。あそこは小学生がいちゃラブする地獄でした。まる。

そんな感じで妄想の世界にダイブしていますとあら不思議。ある意味百合が……。

さて、どうしよう？

では、次回予告を……と、言いたいのですが今回もなしです。

正直ネタがありません。まだ執筆を始めてないので

とりあえず私が考えた宝具の名前を書いておきます。何でや!？

『レーヴァテイン穢れなき陽光の杖』

『クレアート神創真世』

いつか登場します。ちなみにどちらも杖です。……たぶん。

では、小説または宝具名の感想待ってます。

## 第7話「真価」(前書き)

今日は小学生の皆さんがお楽しみの日。

そして、今日も彼は夢の中にいた。

しかし、彼は悪夢を見る。……どうしてこうなった？

もう二度と体育なんかしたくない

## 第7話「真価」

学校が始まって一週間弱。

今日も今日で退屈な1日が始まる。……僕はそう思っていた。

「ユウヤ君」

誰かが僕を揺する。

誰だ！ 僕の睡眠を妨害する奴は！！ 今日には陽向が気持ち良いんだ。

こんな暖かい日は、絶好の昼寝日和なんだから揺すらないでくれ。まだ、三時間しか……。

「ユウヤ君ってば！！」

うおっ！？

思いつ切り揺すられ、支えを失った腕が机から離れた。

僕の体はそのままバランスを崩し、慣性の法則に従い地面へと一直線に落下する。

「痛っ！？」

「わっ、わっ。ごめんなさい！」

「うう。いたたっ。誰だよ、僕を起こしたの……すずか？ 何でこ……なるほど」

倒れたまま周囲を見やると、真っ先にすずかの泣き出しそうな顔が映った。

その瞬間、僕を起こしたのがすずかだとわかる。

そして、すずかの足の付け根から顔まで見やると、今の彼女は体

操服に着替えていた。なるほど……ね。

「体育か。で、僕をどうするつもり？」

「ユウヤ君、体育は出るよね？」

「……出ない、と言ったら？」

「んー。一週間……」

「……わかった。出るよ。出れば良いんだろ」

「うん。わかれば良いんだよ」

すずかは天使のような可愛らしい笑みを浮かべて、僕の手をとった。

はい。すずかの満面の笑みには勝てません。いえ。無言の圧力ですね、アレは。

僕は急いで体操服に着替えた。着替えるのに掛かった時間は、僅か20秒。

僕もやれば出来るもんだね、うん。

体育館にすずかと共に向かう。

体育館にはクラスメートがほとんど集まっており、準備体操を始めていた。

(さて、どうやって逃げるか)

僕の右腕はすずかの左腕に絡めとられ、身動きがとれない。

今回は本当に逃がす気がないな、すずかの奴。

「あら？ ……神城君。今日は体育に出るのかしら？」

逃げる魂胆を考えていると担任に見つかった。僕は思考を切り替え、無難な答えを返した。

「はい。不服ですが今日は出ますよ」

「不服って。……まあ良いわ。これからはもう少し……」  
「では、僕は此処で……」

担任の長い説教に入る前に僕はすずかを連れて、準備体操をするクラスメートの中に紛れた。

担任は「あら？ 神城君？ ……ま、また。またなのね！！」と叫んでいた。

何が「また」なのか。

まあ、どうでも良いけどさ。

僕は再び思考を切り替え、横で楽しそうな顔をしているすずかを見やる。

「それで、すずかさん？ 何時になったらこの拘束を解いてくれるのかな？」

「んー。今日はドッチボールだから、勝負してくれるなら……良いよね？」

「了解。もう逃げられないから構わないよ。ただし……」

「真面目にやってね」

「……わかった」

うん。

すずかの笑みは素晴らしいね。まるで天使だよ。だけど、背後に

どうして阿修羅さんが居るんでしょうか？

準備体操を終えると、すぐさまチーム分けが行われた。どうやら  
すずかの期待通り、チームは別になったみたいだ。

さて、すずかの期待通りの試合になるかはわかりませんが、真面  
目にやりますか。

僕は僕に掛けた暗示のひとつを解いて、ドッチボールの試合に挑  
む。

試合は佳境に入り、残りは僕と高町、榊原妹、他二人。

すずかのチームも似たり寄ったりで、アリサと榊原姉、他二人が  
残っている。

今ボールを持っているのはすずかだ。

「ユウヤ君。今日はホントに真面目にしてくれてるみたいだね」

「ああ、とりあえず 速っ!?!」

すずかの投げる豪速球と見間違う素晴らしい球を避けるユウヤ。

と言ってもギリギリである。あと数ミリ避けるのが遅ければ、確実  
にアウトだった。

「んー。高町は運動音痴。榊原妹は……よくわからん。他は……ダ  
ブルでアウトかよ」

外野から二人が狙われ二人同時にノックダウン。何とかボールは  
すずかのチームに返さなかったが、ボールは高町か。

前途多難だな、おいつ。チームを分析していた僕は頭を抱えた。

「行くよ。えいつ!」

高町はスローボールと見間違っことがない、超低速ボールを投げた。しかし、それは難なくアリサにキャッチされる。

当然の結果だよな、うん。

「なのは。これはいわよ」

「うつつ……」

バニングスは呆れ顔で高町に言い捨てた。高町は悲痛な声を上げ、その場に崩れ落ちる。

「つて、高町ッ!」

「ふえ?」

「ふえ、じゃない! まだ試合は」

しかし、時は遅し。

バニングスは高町目掛けてボールを投げた後だった。

「ちっ。間に合わ……」

「任せてください!」

「っ!?!」

ユウヤより早く、誰かがなのはの前に立ちふさがりボールをキャッチする。

なのはを助けたのは噂の転校生、榊原結衣だった。

「次はこちらの番ですよ!」

榊原妹はそう言つと、距離が近いすずかを狙わず、その左横に居た女の子を狙つた。

それも、よく計算された軌道で、その少女に当たると、そのままの速度で斜めに並ぶ男の子に当たり、ボールはそのまま地面に落下した。

「芸達者なことだ」

僕はその巧みな技術に、拍手する。

女の子って、凄いね。色んな意味で。

そう思っていると、豪速球がこちらを捉えた。僕はそれを瞬時に上空にワンバウンド、威力を抑えて難なくキャッチする。

「へー。今のを捕るんだ。やっぱり、実力を隠してたんだね、ユウヤ君」

僕に豪速球を投げた張本人、すずかは呟く。周りもそれには目を見開く。

あの『昼寝王子』が『スポーツ姫』とまで言われる、運動神経抜群の月村すずかのボールを捕つたのだ。周りは驚くに決まっている。しかし、すずかにとっては予想通りの展開だったのだろう。

彼女は驚くどころか笑っていた。

うん。狙われたね、これは。

「……僕、外野に」

「却下だよ」

「わかったよ。仕方ないから最後まで付き合つてやる。ただし、高町、バニングス、榊原姉妹。お前たちは邪魔だ」

僕はボールを回しながら、断言した。

四人は不服そうな顔をしたが、すずかの進言で外野に出てくれた。  
……僕って、信用ないのか？

後ろを振り返ってみるが信用どころか、友達いないな。すずか以外

「よし。舞台は整ったよユウヤ君」

「ああ。僕に信用も友達もいないこともわかったよ。じゃあ、始めよう」

僕は、久しぶりに本気を出した

体育が終わった後、僕の周りに何故か人が集まった。どうやら、すずかとの真剣勝負の熱気に当てられたようだ。

ん？ 結果はどうなったかって？

引き分け。と言うか時間切れかな？

すずかは自分の負けと言ってたけど、あれはどう見ても時間切れだろ。

ボールを落としたのも、担任の声に釣られてみたいだし。

実際僕も冷や冷やしたし。 だけど。

もう二度と体育なんかしたくない

僕は心の底からそう思った。だってアレは……小学生のレベルじゃない。

その分、すずかは楽しめたようだけど、僕は楽しめなかった……。何て言ったら嘘だ。すずかには悪いけど、今回の試合は退屈のぎにはなったさ。

## 第7話「真価」（後書き）

はい。今回も私の妄想大爆発！

ユウヤ君にとっては退屈しのぎになりましたが、それ以上に阿修羅を見ました。

まあ、本来の彼女は優しい性格なのですが、今回は心を鬼にしたようです。いつもいつも、寝てばかりのユウヤ君を案じて阿修羅を起動しました。

しかし、試合はずすかの趣味です。滅多にユウヤは体育に出ませんし、また、いままでは同じクラスじゃなかったので一度真剣勝負をしたかったでしょう。

結果はどうあれ楽しめたお二人でした

さて、次回予告なのですが、今回もありません。

しかし、今回はようやく原作に入ると思います。お楽しみに

では、一言でもいいので感想をお願いします

## 第8話「儂き夕陽」（前書き）

とある休み。

少年は久しぶりの休みを満喫するはずだった。

そして一方では再び、桜色の魔法が空を翔る。

だが、少女は知らない。

その先に魔法の現実を見せられるとは思っても寄らなかった。

夕陽は彼女の涙の代わりに儂くも、夜の始まりを告げる……

## 第8話「傳き夕陽」

神城ユウヤの朝は早い。

朝の6時30分、神城家メイド長フォロウはユウヤの寝顔を見ていた。

本名不明、経歴一切不明の謎のメイドさん。ある日、ユウヤがふとしたきっかけで出会い、神城家に「神城家がメイドを雇っている」と聴き、売り込みに来ました！」と頭が痛いことを言って、何時の間にか神城家の一員になっていた。

他にも11人のメイドさんがいるが、今は本家で働いている。それもフォロウと同じく過去が不明なものばかりである。

父、神城颯はやては早朝、母、神城美空みそらと帰って来るとユウヤとフォロウの姿を襖越しから見やった。

美空は「颯そうちゃんは変態さんになったんだね！」と涙を流し、居間へと籠もった。と言うか、美空さん。

何故私は実の息子を見守っているだけで、変態さんなんですかね？  
颯はやては頭に疑問符を浮かべながらも、再びユウヤとフォロウを見やる。

実際、得体の知れない人をメイドとして……それも、神城家での最高職であるメイド長にするのはあんまりだと考えるものもいるだろう。

しかし、これは愛息子、ユウヤの意図を組んでの決断だった。

「メイドとして何かひとつでも秀出ていれば、メイドとして雇っても良いんじゃないかな？ 父さん、爺ちゃん。どうかかな？」

小学校一年生になったばかりの暑い、夏休みことだった。

フォロウと言う謎めいた美人を連れて来て、なんやかんやで結局12人も拾ってきた。

流石に父である私も、その時だけは肝を冷やしたものだ。捨て猫感覚でこれはないだろう、と。

母さん、美空はただ笑顔を浮かべて「私は助かるわ。それに家族が増えることには歓迎するわ」と言った。

父さんに関しては「可愛いから良いよ！」の一言が帰ってきた。

しかもどれも好みだとか。特にドジっこサイコー！と言っていた。

うん。

神城家はこのままこの人を総帥にしている良いのだろうか？ こないない加減な企業が日本一の大企業で……。颯は将来の神城グループの安寧を心配していた。

そして結果は試用期間を設け、各自、メイドとして特質した能力を磨き、最終的に神城家メイド部隊『ユウヤ至上主義』の幹部に、認められれば、メイドとして雇うと約束した。

彼女たち『ユウヤ至上主義』は神城家メイドのエキスパートたちで、掃除から戦闘まで多種多様な能力が極めて高く、尚且つ、ユウヤを慕う、十全にして完成されたメイドたちである。

そんな彼らに勝てば、メイドとして最高峰のメイドとなる。

しかし、神城家のメイドは皆、曲者で彼女たちに関しては二つ、三つ難がある。

そのため、必ずフォロウを含めた12人の少女たちはメイドにならないと踏んでいた。

だが、そんな甘い考えは僅か三日で打ち碎かれた。

フォロウたち新人たちはあろう事か一日で神城家の幹部メイドを

除き、支配していた。自分たちより年下と考えられる者には『お姉さま』。年上には敬称に様づけ。

そして三日後には幹部メイドたちまでもが、彼女たちを慕う結果に……。

こうして、フォロウはメイド長に。他11人、フォロウの補佐兼ユウヤのメイドとして神城に仕えることになった。

「思えば、ユウヤがツンデレになったのも、フォロウがメイド長になってからだだったな。……試用期間を1ヶ月設けたのに三日でメイドたちを下し、1ヶ月で神城家メイドの頂点、メイド長の座についた最年少の少女……僅か17でユウヤを」

悔しく何かないんだからな！

これはただの汗だ。冷や汗だからな。

颯は誰にも吐露することなく、どこから出したかわからない枕を涙に濡らした。

ふむ。

どうやら颯様が覗き見をしていますね。すぐにユウヤ様に報告せねば。

噂のメイドさんとはある変態さんの存在に気づき、ユウヤにその旨を報告することを誓った。

第97回メイドさんの祭典で、世界が認めるパーフェクトメイドさんに輝いた彼女には、何でもお見通しである。

「もしくは、美空様にお伝えするのも良いものですね」

パーフェクトメイド。

それは主に仕え、時には主を身を呈して守り、時には主を導く至高の存在である。

メイドさんは主の平和な日常を守るため、今日も奮闘する。

僕は久しぶりの休日を満喫するため、フォロウを連れて河原を散歩していた。

それがいけなかったのか、もしくは、日頃の態度を見かねた神様が、試練を与えたのだろうか。

……ぶつちやけ、運がなかった。いや、ある意味では運が良いのか？

幼馴染の月村すずかと、僕を毛嫌いしていると考えられるアリサ・バニングスに連行されている。

その姿をフォロウは微笑ましく、二人の友人、高町なのはは苦笑を零し、傍観に徹していた。

……両手に花、もしくはハーレムと納得したいが、バニングスさん。……痛いから。万力の如くはないのでは？

さて、話を戻そう。

僕が連行された理由は、高町の父、高町士郎さんが指導しているサッカーチームに欠員が出て困ったところ、ちょうど僕が河原を

散歩しているのを見かねたさすが、ユウヤ君に出てもらおう。

と言う行程の結果、連行された。アレ？　さすが。それはもう決定事項だよ。……拒否権は……ありませんか。

「それで、神城ユウヤ君、と言ったかい？　君、サッカーの経験は？」

「経験はないですが、ルールはわかります。後は実践で覚えますよ」「実践で、かい。わかった」

土郎さんは僕の経験を聞いて苦笑を漏らす、仕方ないと渋々承諾した。

その気持ち、よくわかりますよ、土郎さん。僕も実際に立たないと思いますから。ただ、すずかのお願いですから……ごめんなさい。

「面倒くさい。どうしてこうなった？」

サッカーの試合は終わり、祝勝会と称し、高町家が営業している喫茶『翠屋』に連行された。当然、フォロウも僕と来ている。……結果はどうなったって？

……圧勝でしたよ。僕はドリブルが出来ないからアシストに徹した。

それが功を制したのか、悉くパスが通り、あれよあれよと……終わった頃には相手チームの顔は真っ青でした。

「すすかたちは体一杯に喜びを表現してたけどさ。フォロウはどこから取り出したのか、高性能カメラが幾つも三脚に建てていた。何をしてたんだ？」

「ユウヤ君。君のおかげで今日の試合は勝てたよ。ありがとう」

「いえ。僕はただ蹴るしかしてませんからそんな……」

「いやいや。君の絶妙なパスに正確無比なロングパス。どれをとっても君のアシストのおかげだ。そうだよな、みんな！」

「土郎さんがチームメイトの子どもたちに同意を求めると皆、頷くん。まあ、みんなが言うならそうなのかも知れないけど。」

「ユウヤはある一点が目に入った。」

「あれは、宝石か？ 碧眼の宝石。……嫌な予感がするのは気のせいだよな。」

「ユウヤ君、どうかした？」

「いや。何でも……ああ！ フォロウ。もう帰らないと」

「……そうでしたね。確かこれから颯様と美空様と共に久しぶりの昼食の予定が入っていましたね。では、私たちはこれで。高町様。本日のお誘い、主様にとつてとても有意義なお時間で御座いました。ありがとうございます」

「い、いやー。こちらこそ」

「すすか様、高町嬢、バニングス嬢。これからも主様と仲良くしてください。主様も精神は成熟しており、仲良くしにくいと思います。が、これでも……」

「フォロウ？」

「では、私もここでお暇させて頂きます」

「ユウヤの鋭い眼光にフォロウは息を潜め、頭を下げると翠屋を出る。」

「今日はお邪魔しました。すずか、また明日。……高町、バニングスもな」

ユウヤは小さな笑みを見せ、翠屋を出た。すずかはともかく。なのは、アリサ、他に居た女性陣は頬を染めた。

まだ見ない、すずかの姉は後になのはとアリサに語る。

ユウヤ君は普段寝てる姿がデフォルトだから、時たま見せる笑みにそれが相乗効果として加わり、女の子たちにギャップ萌を感じさせるんだ。と。

ビル街に再び、白き衣で身を隠した逆十字架の少年が降り立つ。眼下に広がるものは木の化け物。その大きさは素晴らしいほどに巨大である。

「また、随分と育ったもんだ……」

少年はその木を見て、明後日の方向を見る。同時に桜色の軌跡を捉えた。

初めて見たのは約一週間前。なかなかどうして、育ってるようだな。……魔法の力は。

「今回は傍観で良いみたいだね」

少年は地べたに胡座をかき、白き少女の活躍を見据えた。

見据えた結果、最後は素晴らしいと言える結果だったが、それも魔法に関してのみ。……少女は泣いていた。

悔しかったのだろう。……気づいていながら言えなかった。しかし結果的には助かった。だけど、あの時、と。

少女の前には、少年と少女が気を失って倒れている姿があった。

夕陽は彼女の涙の代わりに儂くも、夜の始まりを告げる……。

さて、帰りますか

少年は足下に銀の魔法陣を展開し、その場から去った。

## 第8話「傳き夕陽」(後書き)

今回は魔法の本当の姿に少し触れてみました。

まあ、前半は毎度ながら暴走をしています。最近はやキャラが一人歩き、もとい、暴走しているのが現状です。はい。

ユウヤたちの日常風景メインでしたが、ついに原作に突入します。今回はそのための布石です。

ちなみに、メイドさんは本作品中最強となります。

では、次回の更新の予告を。

次回はついに金色の魔法少女が登場します。

皆さんお楽しみに

## 第9話「雷光の魔法少女」（前書き）

月村家に久し振りに訪れたユウヤ。

月村すずかの姉、月村忍と久しぶりの会話を楽しむ中、彼はちょっとした夢の話始める。そして……。

そんな中、ジュエルシードの反応を月村家の森で感じたのは。彼女はユーノを連れて反応を示す場所へ向かう。しかしそこには、新たな魔法少女が

さて、語らひはこれにて終局です

## 第9話「雷光の魔法少女」

僕は今、月村家を訪れている。  
それはどうしてか……。

以前、すずかに忍さんたちへと顔を出すと約束をしてたからであつて、連行された訳じゃない。

……ただ、猫を追っていたら忍さんにばったり出くわした訳じゃないですよ。

しかし、何度見ても絶景だね。

猫屋敷。月村家を言い表す良い言葉だと思う。……そして

「忍さん。抱きつくのは止めてください」

「嫌よ、ユウヤ君。これは最近家に顔を出さなかった罰よ」

月村忍。

月村すずかの姉で、この屋敷の家主にあたるのではないだろうか？  
現在忍は胸の前で、ユウヤを抱き締めているところである。

「はあー。やっぱり抱き心地抜群ね、ユウヤ君は。癒やされるわ」

「それは嬉しいですが、僕にとっては苦しいだけですよ。と言つてとで」

「え？ きやつ！？」

ユウヤはほんの一瞬の隙を突き、瞬時に忍の拘束化から解放された。忍は驚き、可愛らしい声を漏らす。

しかし、ふう……。肩を外すのはやっぱり痛いな。

ユウヤは逃げる際に肩を外して、忍の鉄壁の包容から逃げ延びたのである。だが忍はそれにご立腹のようでユウヤに訊ねる。

「ユウヤ君、何で逃げ出したのかしら？」

「窮屈だからです。それ以外に何か？」

「……ある意味、しょ、正直ね。もっと子ども特有の返事を期待したのだけど」

「ははは。残念でしたな。ですけど、忍さんは彼氏持ちですよ。子どもを抱き締めてたら誤解を生みますよ？」

「それはそれで、恭也に嫉妬してもらうのには一向に構わないのだけど……。逆にそっちの方が良いかもしれないわね」

「どれだけラブラブ何ですか、お二人は……」

ユウヤは片目でそう一言呟くと、出された紅茶を一口飲む。忍は少々悪酔いしていたが、すぐに現実に戻ってきた。

「ふふふ。嫉妬かしら？」

「ありえないですね」

「ちょ、ちよっとその目は止してよ。ごめんごめん、冗談だから。

あつ。……そう言えば、最近すずかとはどうなの？」

「突然なんですか、どうとは？」

「んー。すずかと青春してるのかな〜って思ってたね」

忍はユウヤを見て妖艶な笑みを浮かべる。彼女にとってユウヤとすずかはお互い好意を持っていると、考えられている。

しかし、ユウヤは忍の話に乗ることはない。別に弄られるのには困らないが、あえて惚けることを選んだ。

「青春ですか。それで、僕がすずかと青春してるってどうしてですか？」

「んー。何というか、小さい頃から二人を見てるとお似合いだなと思ってたのよね。まあ、私はすずかを幸せにしてくれるのはユウヤ

君、貴男しかいないと私は確信してるからなのだけどね」

「そうですか。……確かにすずかは可愛いですよ。氣立ても良くて、淑女としての気品を持つ。将来忍さんのような美人になるでしょうね」

「ふふふ。私のような美人にね……。過大評価のし過ぎじゃないかしら?」

「さて、それは、どうでしょうね」

彼は笑みを浮かべて首を傾げた。

その姿は優雅でまるで絵に描いた、英国紳士のような姿である。

「……ユウヤ君?」

「では少し、僕の話に付き合ってくださいませんか、忍さん。ひとつ、ある物語を語りますから」

彼は忍の意図を無視し、語り始めた。

その時の彼の瞳は一瞬、色が変化した。澄み渡る銀の軌跡を垣間見た気がする。

「さて、語らいはこれにて終局です」

ユウヤはひとつの事柄を語ると席を立った。忍はそれを制止させず、神妙な顔つきでユウヤを見やる。

「貴男はどう思っているの？」

「僕は……いえ、俺は。これを本質だと捉えていますよ。自分のひとつであって一部。それを忘れた先に俺の存在はあると言えますか？」

「……私は」

「いえ、無理に答えなくても結構ですよ。精神が成熟し過ぎると、理屈ばかり述べて子どもらしくありませんでしたね」

ユウヤは自嘲気味に言葉を漏らす。

忍はそんな不安定な彼に何を言えば良いか、慎重に言葉を選ぶも、選ぶことは出来ない。

「では。僕はこれで……。すずかには会って帰るつもりですので心配なさらず。あと、今の話はそう深く考えないでください。僕もこれはよくわかっていないので」

ユウヤはそう忍に釘を打つと、部屋を出る。忍は何も言えず、瞳だけでユウヤを見送った。

部屋を埋め尽くすのは静寂。ただ、彼が去った後は哀愁漂う世界だった。

「……世界に退屈を覚えた少年と寂しがり屋な女神か。貴男はわからないと言っけど、それは……。何をその目で見て来たのかしら。あの時だって、私たちを」

忍はもう居ない、弟のような少年、神城ユウヤの後ろ姿を思い出す。

あの時も彼は、人が変わったように呟いた。それは悲痛な叫びなようなもの。

世界は退屈で、何時だって理不尽で、簡単に大切なものを奪ってしまう。

なら俺は、世界に抗おう。俺が俺でいる限り。手が届く範囲であるが、助けられるものは助けていくよ。

もう何も失いたくない。俺は、僕は

その時の記憶は今、彼にはない。目覚めた日には、その日に起こった大半の事柄をユウヤ君は忘れていた。

そして今回も、彼は言った。

今、話したものは、夢で見たひとつの物語です。ですがそれは、僕の本質に似通っている。

僕の本質。それは『退屈』です。

僕は世界に退屈してるんです。

そして、非日常を求めるあまり、身近な愛情や友情を感じられない。

ただ、相手の態度を見ればそれらはわかる。自分に向けている、あらゆる感情は全て。

学校でもたまにですが、ラブレターを貰うんですよ。だけど僕は全て断ります。

僕は『退屈』を凌ぎきれれば何だって利用する。それが僕の本質のひとつ。

だからこそ、わかっているからこそ、すずかや他の子たちの気持ちを汲み取ってあげられない。

それに、すずかを利用するだけ利用して、愛なしに一生……なんて。

ははは。だから……忍さんに聞いて貰いたかったのかも知れませ

ん。  
僕、俺と言う少年の本質の一端を。……僕が悩む、ひとつの事柄  
を

「はあー。貴男が誰であろうと私は貴男を『弟』と知っているわ。  
すずかが認めた男の子なんだから、その程度の夢物語に負けるんじ  
やないわよ。本質が『退屈』だと言うなら、貴男の本質は『飢え』  
なんじゃないかしら。愛に、人に、戦いに『飢え』ているのよ、ユ  
ウヤ君。ただ気づいてないだけ。もしくは、また何か違うもの」

私は窓から外を見下ろした。

どうやら時間通り恭也はなのはちゃんを連れて来てくれたようね。  
今日こそ、ユウヤに彼女たちを真つ正面から向かわせましよう。  
今頃、すずかの部屋に居る筈だし。

「ねえ、ユウヤ君。貴男はみんなにとって何者かしら？ その答え  
もまた、貴男の本質かもしれないわよ」

忍はくすりつと微笑み、談話室から出た。私は愛おしい彼の下へ  
行った。

只今僕は、すずかたちとお茶をしている。どうやら僕は忍さんの  
畏にまんまと引っかかったようだ。

テラスにはさすが、高町、バニングスの三人とフェレットのユーノ。

今は高町とユーノが居ないが……。

また、つい先程、メイドのファリン・K・エアリヒカイトさんがお茶を運んできたが、やはりファリンさんらしく不運補正が働いたようだ。

猫で目を回す。まさにファリンさんらしいドジだった。お茶が全て台無しになるかと思ったことだ。

「さて、高町はまだユーノを見つけてないようだな？」

「うん。確かに遅いね。もう五分以上は建つと思うよ」

「だけど、ユーノもユーノよ。急に森に入って行くだなんて……私たちも探しに行かない？」

「ふむ。バニングスの言葉も一理あるな。なら僕が行って来るよ。」

「さすがの屋敷はさすが以上に知ってるつもりだ」

「何よそのあからさまに怪しい言葉は……」

蔑んだ目で僕を捉えるバニングス。

……忍さんやノエルさんのせいでこの屋敷の隅々まで教えられたからな。仕方ないだろ？

僕は内心冷や汗もので、バニングスの目から自分の目を逸らした。

「じゃあ行ってくる。バニングス、食い過ぎるなよ？　さすが。五分経って戻らなかつたら忍さんと恭也さんと呼んでくれ」

「ふえっ、わかった」

「何を食べ過ぎるのよ!？」

「何って、デザートじゃないか？　じゃあ五分後に……」

さて、運動音痴の高町はどこに行ったことやら？　まあ、真っ直ぐ行けば見つかるだろう。後ろではバニングスが憤怒してるが、知

らない不利だ。うん。

僕は後ろを振り返らず、高町を探しに森に踏み込んだ。

その頃、高町なのは魔法少女に変身し、空を描いていた。彼女は目の前に対峙する金色の少女と空中戦を行っていた。

「貴女は一体……」

《Protection》

「きゃっ!!」

問答無用な雷の誘導弾スファイアが私を襲った。

うっ、痛い。けど、レイジングハートがとっさにプロテクションを張ってくれなかったから、危なかった。

「それを貰って行くな」

金色の少女はつい先ほどまで、子猫の願望を叶えていたジュエルシールドを封印する。

「待って!!」

「……」

私は去って行く、金色の少女を呼び止めた。

「貴女はそれを何に使ったつもりなの？」

「言えない」

「なら、貴女と私のジュエルシールドをひとつずつ賭けて。私が勝ったら貴女の名前を教える」

私は彼女の目を見て言いました。

彼女はその勝負を受けてくれた。彼女は黒金の斧を構え、先手を撃つ。私も真つ向から彼女を迎え撃った。

海上を飛ぶ、黒の歪なバリアジャケット魔導師の服を着た少女。

先ほどまで白の魔法少女と闘っていた少女である。

私はあの白の魔導師と戦い勝利した。

確かにあの子は強い。けどまだ魔力の扱いが慣れていないようで、ほんの少しの隙を突いて魔力ダメージでノックダウンさせた。

そろそろ結界の外だね。早く家に帰ろう。アルフも待ってる。私はスピードを上げた。

その刹那、世界は銀の世界に包まれた。

「これは」

私はこの光景に見覚えがあった。

この街に初めて降り立ったあの夜も、これと同じ光景を私は見た。そして……。

私は空を見上げる。海上にいた私の上空にはフードを深く被り顔を隠した、白の衣に逆十字架の刺繍が背にある私より年上の少年がいた。

「……ジュエルシードを賭けて戦わないか？」

彼は衣に隠れた左腕を出した。

左手には二つのジュエルシードが確かにあった。

## 第9話「雷光の魔法少女」（後書き）

……文章汚いな。と執筆してて思いました。

それに今回は伏線がかなり多くなつたため、場面転回が多くて執筆が難しかったです。自分で何を書いているのか分からなくなりましたしね。

とりあえず今回は前半ユウヤの本質？の一部を取り上げてみました  
がどうでしょう？

本来子どもがこんな思想持つのはありえませんが、彼の場合は特殊  
なんです。

それが今回の話で分かったかと思います。原点の彼はこれよりさら  
に達観していますが似たようなものです。

また、ついにフェイトが登場しました！

ようやく登場させましたがまだ名前が出てませんね。どこで失敗し  
たのやら……。

しかし、まだまだフェイトは活躍します。

次回更新分はフェイトと逆十字架が活躍しますので合わせてお楽し  
みに

第10話「激突する少女と逆十字架」（前書き）

少女は海鳴市に降り立った夜、逆十字架を背に持つ年上の少年と出会った。

その少年はこの街に住まう『魔法使い』だと告げた。

そして現在。

その少年は金色の少女に戦いを求めた

銀灰は一体、何をしたいんだろう？

## 第10話「激突する少女と逆十字架」

私は正体不明の少年と出会ったのはこれで二度目である。

あの銀の逆十字架を衣の背に刺繍した彼は、どこからともなく現れた。

「やあ、君は一体どこから来たんだ？」

世界が銀に包まれたと同時に後ろから声を掛けられた。私はとっさに振り返る。

唇と唇が触れ合うほどに近い、仮面を被った私より二回り大きな少年がいた。

「っ!？」

私は驚き、恥ずかしさのあまり後ずさる。急に視界に人がいつぱいに映ったのだから仕方がない。それに仮面と言っるのはインパクトが強すぎる。

私はバルディッシュを装着しようとしたが、その手を目の前の仮面の人に捕られ、変身することが出来なかった。

「ごめんね。驚かしてしまったようだ。だけど戦闘は勘弁。そつちの子にも言ってくれないかな？」

「えっ……」

私は手を捕られたまま、首だけ後ろを振り向く。

狼姿の使い魔、アルフが警戒態勢でいつでも彼を襲えるよう態勢を取っていた。

「俺は今日、戦う気はないんだけど……」

「じゃ、じゃあ離してください！」

「ああ、わかった」

彼はすんなり私の手を離してくれた。

私は「えっ」と声を漏らす。

急に離されて驚いたのもあるけど、簡単に離してくれたから。

「離れたけど、臨戦態勢は止めてくれない？ 怖いんだけど……」

「あ、はい。アルフ」

私の声にアルフはひと鳴きすると私の横まで来て、彼を睨む。

彼はその目に肩を竦めた。

「嫌われたようだね」

「あ、いえ……」

「大丈夫。俺が君を拘束したんだ、その子が怒るのも、警戒するの  
も仕方ないことだ」

「そうですか？ そう言えば……貴方は何者なんですか？ 私は貴  
方の気配を感じなかった。貴方は何時の間に私の背後にいたんです  
か？ それと、この世界の状態は貴方の仕業ですか？」

私は今感じている疑問を全て吐き出した。彼は考える素振りをし  
て答えを出す。

「その疑問、答えようじゃないか。……まずはこの世界の状態だけ  
ど。この世界は俺の結界。第四式『絶対庭園』」

「アブソルティ・ガーデン？」

「そうだ。この結界は外界と完全に切り離された結界で、ひとつは  
全ての事象を無効にする効果を持つ。魔法は使えても此処を破壊し

て逃げることは不可能だ」

「えっ。それって……私たちをどうするつもりですか!？」

結界が破壊出来ない。嘘かもしれなけど、万が一の場合もある…

…。

もし彼が時空管理局の局員なら……私はまだ捕まってあげることが出来ない。

そう決意を灯す。

バルディッシュを握る右手は汗ばんでいた。

「そんなに焦らないでいいよ。俺は今回、何もしないから」

「ふえ？」

私は彼の優しげな声に素っ頓狂な声を上げた。……彼は何もしないと言った。ならこの結界の意味は

「まあこの結界は、誰にも介入されなくなかったから張っただけ。俺が君の背後に気づかれずに居たのはこの『白面』<sup>ベルソナ</sup>が持つ認識阻害の効果。これで解答は良いかな？」

彼は難なく答えた。

それには嘘やごまかしはなく、全て真実と思える。結界はアルフに解析して貰ってたけど、何もわからない。

まず、術式がわからない。これでは解析も何もできない。

そして彼の仮面。『白面』<sup>ベルソナ</sup>と言ってたけどそれも全く解析が出来なかった。

いろいろと嘘臭いものはあるが、最後に介入されなくなかった。それは彼の本心だと思う。私たちのことを考えてのことだと、私は思いたい。

……彼の表情は仮面で読みとれないけど、どうも他人のことを考

えている節がある。

「それじゃあ、今回はこの辺で……あと。俺が何者かだったね。俺はこの世界の『魔法使い』さ。名乗りついでに、これを君に上げよう。名無しの少女さん」

彼はそう言うと碧眼の宝石を私に投げた。私は慌ててそれを捕り、もう一度彼が居た場所を見ると彼は消えていた。

同時に世界は最初に降り立った時と同じ姿を取り戻していた。

私は受け取った宝石を見る。同時にその宝石に目を疑った。

「ジュエルシード……。どうしてあの人が」  
「なんだいフェイト。って、それは!？」

アルフは人形ひとがたになって驚いた。私もこれには驚いたけど……。私はこうして母さんの探し物、ジュエルシードのひとつを手に入れた。

一体あの人は……。あつ。名前を言うの忘れてた

そして今、彼は私の前にいる。

「で、どうするっ？」

彼は私の前で二つのジュエルシードをちらつかせる。一体彼は何

がしたいのか、私にはわからない。  
ただど今は

「わかりました。その勝負、乗ります！」

私は母さんのためにジュエルシードを集める。バルディッシュを握り締め、私は彼に戦いを挑んだ。

フェイトと逆十字架の少年が激突した頃、ユウヤは気絶したなのはを見つけた。

一体何があったのか、彼は疑問に思い、周りを見据えた。  
地上に変化はないが、どこことなく……。

「いや。今は良いか」

僕は高町を揺すった。

しかし、高町は規則正しい呼吸で眠り続けている。……と言つよ  
り熟睡している。なんて気持ち良く寝てるんだよ、これは。僕も昼  
寝したいよ。だけど

もう一度辺りを見渡す。すると、なのはの横にユーノが居た。ず  
っと彼女を心配していたのだろう。

ユーノはなのはの動物であり友達だ。主人を大切に思う気持ちは  
強い。

「ユーノ。僕の肩に乗ってくれ。このままでは高町が風邪を引いてしまう。僕が運ぶから」

ユウヤはそうユーノに告げるとなのはをお姫様抱っこした。ユーノもそれを見て、ユウヤの肩に飛び乗った。

「はあ。面倒だな……」

ユウヤは空を見上げ、憂鬱そうに海のある方角を見据え、呟いた。

海上では未だにフェイトと逆十字架が交錯する。フェイトは戦斧『バルディッシュ』で凧ぐが、悉く空を斬る。

「俺に一撃を与えることが勝敗条件にしたが、どれも決定打にはならないな」

「っ！」

「君はパートナーであるバルディッシュの性能を十分に生かしきれていない。それでは俺に一撃すら与えられず、限界が来て自滅するよ」

逆十字架はフェイトの戦斧による打撃を腕で去なしていき、数発の拳撃を放ち、確実にフェイトを追い込んでいく。

武器を持つフェイトの方が有利に思えたが、無手である逆十字架

の方が勝負を有利に進めていく。

再び、金色と銀の軌跡が交錯した。

しかし、その交錯の最中、打撃も拳撃も交えることはない。

刹那、フェイトは逆十字架の背中を取り、バルディッシュをその背に向けた。

「バルディッシュ！」

《Photon Lancer Get set》

「フォトンランサー、ファイア！」

瞬時に展開した複数の砲台から金色の槍の魔法弾を放つ。

数にして六つだが、ほぼ零距离で放つ魔法弾だ。避けることも防御を張るのも無に等しく、直撃は確実だ。

フェイトはそう確信した。どれだけ強く、不明瞭な存在であつてもこれは……。

「惜しいな。今の攻撃は良かったよ」

魔法弾を放った先から声が響く、フェイトはバルディッシュを握る手に更に力を込めた。

煙が晴れた先には銀の炎の壁が立ちふさがり、金色の魔法弾を全て燃やし尽くす。

彼を守護するように、銀の炎は意志があるかのような動きを見せ、少年の周りに蛇の軌跡を描く。

フェイトはその光景に目を見開き、更に、傷一つない少年の姿を前にして、一瞬、思考が鈍った。

「しかし、数が足りなかったね。あと最低は六つは欲しいな。誘導性なしの直射型の魔法。弾速が速く、相手の一瞬の油断に使用するには良い魔法だ。俺なら展開時に四方から放てるよう設置するね」

少年が腕を一振りすると銀の炎は消える。そして、尚も続ける魔法の評価。

今を狙えば少年を落とせる。いいや違う。一撃を与えることができる。

一方のフェイトの思考は回転を取り戻すも、指先すら動けなくなっていた。まるで、金縛りにあっているような感覚。

フェイトは一滴の冷や汗を流し、少年の評価を聴くしかなかった。

「だけどもあ、合格にしましょう。これからの成長に期待と言つてとで」

彼がそう言つと私の体は自由を取り戻した。やはり彼が私に何かしたようだ。

「さて、……あつ。名前を聞いてなかったね」

「ふえ？ あ、そうですね。私の名前はフェイト・テストロッサと言います」

急に私の名前を聞いて来た彼に、私は思わず名前を覚えてしまった。

と言うより、さっきまでのシリアスはどうしたのだろうか？

だけど彼は気にせず私を見て言った。

「フェイト。運命か。良い名前だ。では俺は君をテストロッサ。いや……フェイトと呼ばして貰おう」

「……構いません。なら貴男の名前は？」

「俺かい？ そうだね。俺は『銀灰』もしくは『忘却の魔法使い』と呼んでくれないかな？」

私は最初、名前を呼ばれて驚いたが、嫌な気分にはならなかった。ただ彼は自分の名を明かさず、二つ名的なもので呼ぶように提案してきた。

どうしてかな？ 私は疑問に思ったがその指示に従い、『銀灰』と呼ぶようにした。

「それじゃあ、この二つは君のものだ。じゃあね、フェイト」  
「あ、はい」

彼はそう言う姿を消す。同時に世界は色を取り戻した。

私は手にした二つのジュエルシールドに目を落とす。そして、空を見上げた。

銀灰は一体、何をしたいんだろう？

私は二つのジュエルシールドを封印し、私の帰りを待つアルフが居る我が家に帰った

## 第10話「激突する少女と逆十字架」（後書き）

さて、ようやく戦闘らしい描写を書きましたが如何でしたでしょうか？  
少しは楽しめていただければ幸いです。

そして、逆十字架を持つ少年をユウヤと思っていた方々は今回の話を  
読み、さらに謎が膨らんだかと思えます。

尚且つ、まだまだ、ユウヤの活躍はありませんね。ただのモブキャラ  
の一部になりつつありますし。まあ、役得ばかりありますが、全  
ては逆十字架が掻っ攫っていきますから微妙ですね。

そして今回『銀の炎』が出ましたがあれが今回の鍵です。

あれは魔法であって魔法ではない何かに分類されます。伏線ばかり  
で申し訳ありませんが今回の鍵はある人に関係あるのでお話しでき  
ません。

では、次回の更新をお楽しみに

第11話「海鳴温泉と金色の少女」（前書き）

とある事情で高町家、月村家、バニングス家の家族旅行に参加することになった神城家。

そんな不幸を露知らずいつの間にか車にいた神城ユウヤ。彼は一体どうなってしまふのdarou?

そして、温泉街にはあの少女も

ふふふ。昨日の睡眠薬は良く効いてたみたいね

## 第11話「海鳴温泉と金色の少女」

「父さん、何故僕が高町たちの家族旅行に付いていくことになった？」

只今、父颯はやてが運転する車に母さんみそらとフォロウが乗車している。

「何故って？ 忍ちゃんが誘ってくれたんだが、お前は知らなかったのか？ フォロウは知っていただろう？」

「はい、存じ上げております。しかし、私はユウヤ様をご存知かと思っておりますので、報告しませんでした」

「……父さん、フォロウ？ 僕は何も知らなかったんだが。あと、起きたら車の中ってどう言うことだよ」

「ふふふ。昨日の睡眠薬は良く効いてたみたいね」

元凶はまさかの、……母さんか！？

子どもに睡眠薬とは本当に両親か、この二人。その前にフォロウ。お前も僕の敵か。いや、買収されたなコイツ！？

フォロウを見ると、メイド服に装備されたポケットから数枚の写真が見え隠れした。逃げ道がない……。

「ちっ。母さんが居る時点で詰んだな。今回は諦めるよ」

僕はそっぽを向き、窓ガラス越しに空を見上げた。ああ、どうしてこうなった。

とりあえず、寝よう。まだ先は長い。

車で運転すること数時間、海鳴市にある温泉街、海鳴温泉に辿り着いた。

僕は夢心地の中、目を覚ます。

あれ、もう着いたのか？ 車のドアに手を掛ける。直前、扉が開いた。

同時に金色の髪がうつすら……！？ 次の瞬間、バニングスに首根っこを掴まれ、車内から引きずり出された。

「さあ、逃げる前に行くわよ、神城！」

「いつ、つ！！ 首がしまっ……バニングス、引つ張るな！ 流石にこれは」

僕は白眼を向く手前、紫の髪がうつすら映り込んだ。

刹那、苦しさがなくなった。どうやら手を離してくれたようだ。

「げほ、げほつ。はあー。死ぬかと思った。バニングス、これは何だよ」

僕は息を整え、呆れ顔にバニングスを見やった。

バニングスはフンツとふんぞり返るが、その横に苦笑を漏らすすずかとほんのり顔を紅く染める高町がいた。

そして、僕の質問にはすずかが答えてくれた。

「何時も旅行に行く時、私とお姉ちゃんから逃げるってアリサちゃんに話したら、アリサちゃんがね」

「フンツ。あんたは私の目が黒い内には逃がさないわよ」

「……そう言われると逃げたくなるな。けど、今回は逃げないよ。母さんのスキンシップはヤバいから。それに……もう首を痛めるのは嫌だからね」

僕は首を捻りながらバニングスとすずかに言った。二人はキョトンとして、偽物じゃないだろうかと僕を見る。

僕が逃げないと言っただけでこれは酷いよ。ってか、こんなこと前もあつたような？ まあ、良いか。

そういえば、高町の顔が紅い。それに何か悩んでるな。まだ気にしてるのか、アレを……。

僕は高町に近づきそつと声を掛けた。

(高町。あの日のことは誰にも言っていないから心配するな。まあ、見つけた時は驚いたけどな。何たってユーノを探してたお前が倒れてたんだから)

そう耳元で囁くと高町は更に頬を紅く染める。んー。刺激も何もなかったと思うんだが、気にしてはダメだな。

後ろからは鋭い視線が二つ。いや、人間の瞳は二つだから合計四つだね。

まあ、他二つは殺気に似たものを感じるけど……。

「逃げるが勝ちだね！ さらば！」

ノリと勢いで僕は森の中に逃げる。

後ろからは訴えと怒声が混ざった二つの声が聞こえたが知るか。

あの場に居れば二人は直ぐに陥落出来るが、残り二つは面倒事に発展するに違いない。

あんなのを相手にするのは今でなくて良いはずだ。ああそうだと

僕は自分のキャラをねじ曲げてでも、この場を去りたくて、大人顔負けの速さで森の奥へと足を踏み入れた。

逃げることに十分。

忍さんの彼氏、高町恭也さんが追いかけて来たが、今の僕は風、もしくは雷だ。

世界一のトップランナーであろうと今の僕に追いつけるのは難しいだろう。

それほどの速さで恭也さんを巻いた。

「しかし、どれだけ速いんだよあの人。全力で走った僕と同等。もしくは僕の本気に勝るほどだなんて。確かにあの時も……いや、止そう。あれは仕方ない。記憶もあやふやだったし、思い返しても

」

ん？ これは……。

「フォロウ。お前も付いて来たのか？」

「美空様の命で後を付けさせて頂きました。とりあえず、ほとぼりが冷めるまで此処に留まるのがよろしいかと」

「ああ、そうする。で、フォロウ。お前はとうするつもりだ？」

「そうですね。私はユウヤ様に仕えるメイドです。ユウヤ様の傍に仕えようと思いますが、如何でしょう？」

「……なら、少しの間控えてくれないか？」

「……なるほど。了承いたしました」

フォロウはそう言うのと僕の前から消えた。さて、気が利くのは良  
いが、利き過ぎなのはどうかと思うな。

僕は一本の木の傍に近付いた。

「おーい。その金髪の少女。そこで寝てると風邪を引くぞ」  
「へ。ふえー!？」

何だこの生物は？

可愛らしい声で目を覚ます黒のワンピースを着た少女。綺麗な金  
髪が良く映えるがどうも……。

「で、何をしてるんだ、君は？」

「えっ。えーと……」

「喋りたくないなら構わない。ただ、そんなところで寝てたら  
体を壊すぞ」

僕はそう言うと木を背もたれに昼寝の体勢を取る。やはり、昼寝  
は野外に限る。

教室なんて無粋な場所で寝るのは格が違う。……最近は出会い  
が多すぎて、新しい自分が構成されすぎて、変化に戸惑ってたけど  
これはこれで、良いのかもしれない。やはり、夏樹との出会い  
が何かしら自分を変えているんだろうな。

……。この退屈はどうにも……。

「あの？」

「ん？ 降りて来たのか？」

眠りに就こうとした時、目の前に金色の少女が現れた。

「はい」

「……そう。用事があるなら手短によろしく。僕は今から寝るつもりだからさ」

「そうですか。では率直に訊きます。貴方は何者ですか？」

……何者。そう来たか。

確かに、此処に来れる人は極僅かだろうな。……違和感もあるし。

「何者ね。僕はただの小学生と言ったら信じて貰えるかな？」

「信じられません」

「一刀両断。断言されたか。とは言っても、どうしても何者と君に訊かれなくちゃいけないのかな？」

「そ、それは……」

言える訳もないか。

なかなか判断能力が高いね、この子。少しでもボロを出せば即座にこつちが有利だったんだけどね。仕方ない。

「ひとつ情報をあげるから見逃してくれないかな？」

「……」

いやいや。

何ですかその目は。僕は早く寝たいんだからジト目で見ないで欲しいんだけど。

「……君が欲している宝石は河辺にある。まあ、信じるも信じないも君の自由だ」

「えっ？ どうして貴方がそれを……」

「もしかして当たり？ 良かったね。じゃあ、僕は消えますね、名

無しの少女君」

僕は出来るだけ優しい口調で少女に言葉を残した。少女が声を掛ける前に僕はフォロウを呼び、その場から消えた。

「あ、あれ？ どこに……」

少女は僕が消えたのに目を見開き、周りを見渡す。だけど僕はそんなところに居ない。灯台下暗し。君は最初どこに居たかな？

「フォロウ。そろそろ帰るよ。さすがが拗ねてるかもしれないからね」

「はい。では行きますよ」  
「ああ」

僕はフォロウの宣言に手を掴み、少女が最初に居た木の枝から消えた。

フォロウはメイドでありながら、アサシンでもあると思っていたけど、これはもう、凄いな。流石、世界一のメイド。

## 第11話「海鳴温泉と金色の少女」（後書き）

はい。今回は暴走話です。

フォロウの実力の一端もお見せしましたがまだまだ序の口です。

彼女の能力は108あります。たぶん。

世界一の冥土曰くメイドはどんなこともできなければならないそうです。

さて、読者の方に今回質問があります。

最近の二次創作ではプレシアやアリシア、リニスの救済処置が目立ちますが皆さんはどうですか？

救済処置派は「1」を

救済せずに原作通り派は「2」を感想と共にお願いできないでしょうか？

感想は面白い、面白くないでも結構なのでアンケートに関してはお願いします。

アンケートは11月7日から11月14日まで受け付けます。しかし、執筆の状態によつては早めに切り上げるかも知れませんのでお早めにお問い合わせいたします。

では、次回予告を。

次回も引き続き海鳴温泉のお話しをお送りします。

予定はサービス回と戦闘です。メイドさんが遂に脱ぎます！

## 第12話「温泉と賞品」（前書き）

温泉。

それは癒しのひと時。

しかしそこには世にも美しい天女がいるとされる男の楽園。

賞品。

時に賞品となる景品は欲するものではないときがある。

しかし、賞品となるものが同一のものでひとつしかないとなればどうするか。

また、その賞品を賭けることで相手に伝えたい思いをぶつけるとすれば

さて、始めてください

## 第12話「温泉と賞品」

「ぷはー。極楽極楽」

ユウヤは金色の少女と別れた後、すずかたちに見つからないように、両親が1日予約している家族風呂に入っている。

さて、ここでひとつ疑問に思うことがあるだろう。何故、大浴場じゃないのか？

それは、高町夫婦、恭也さん、忍さん、ノエルさん、ファリンさんに見つからないためである。あの人たちに見つかれば、すぐさま高町たちに知られてしまう恐れがあるため、極秘裏に家族風呂を借りた訳である。

「家族風呂だからただのお風呂かと思ってたけど、純粋な温泉で良かった。それに大浴場に比べれば小さいけど、大人10人以上は軽く入れるな」

「そうですね。はあ。生き返ります」

……あれ？

僕は目を擦る。幻聴に幻覚だよな？

今、聞き覚えがある声と姿が映った気がするけど。もう一度見る。

「どうかしましたか、ユウヤ様？」

頬を抓るが幻聴でも幻覚でもない。

正真正銘、メイド長フォロウが浴槽に浸かっている。……一応、バスタオルは巻いているが、年相応？の凶悪な胸は、バスタオルの締め付けから逃れようと緩まる。

湯気のせいかな、普段の倍の色気を出してる上、髪をタオルで纏め

ているため、正直エロい。

「……………どうしてフォロウが此処にいる？」

僕は頭を抱えながらフォロウに言い捨てた。

「私は何時如何なる時でもユウヤ様のお側に仕えております。従って、今此処にいるのは不思議ではありませんよ？」

「いやいや、有り得ないからな。それに疑問符上げてるからね、フォロウ」

「……………では、私は一緒に入浴してはならないと？」

「うん。普通、男湯と女湯は別なんだから……………」

「しかし此処は家族風呂です！」

一番指摘されてはならないところを指摘したよ。流石、メイド長。だからしつこく家族風呂に僕を誘導したか。なかなかの策士だな、フォロウ。

「そう言われると反論出来ないんだけど……………。はあー。今日は負けだ構わないよ」

「有り難き幸せで御座います。それではユウヤ様、此方へ」

そうフォロウは言うつと僕を後ろから抱き締め、背に胸を押し付けてくる。

……………かなり成長してるな、フォロウ。

「……………どうして抱っこされなければいけないんだ、フォロウ？」

「私が寂しいからです」

「寂しい？ どうして？」

「……………今のユウヤ様では到底わからないことです。それはそうとユ

ウヤ様。私の胸は気持ち良いですか？」

フォロウは更に僕を強く抱き締める。凶悪な胸は更に形を歪ませ、巻いたバスタオルからはみ出ようとすする。

「何が言いたいの？」

「そのままの意味ですが？」

後ろを振り返るとフォロウの綺麗な顔が目の前に映る。

フォロウは真剣な眼差しを僕に向けていた。普通の男なら、今頃、フォロウの美貌に当てられて狼になつてることだろう。

しかし、僕にはどうもない。子どもと言う意味もあるが、そのままだ。別にフォロウに魅力を感じない訳でもなく、反応はある。だが、どうしてだろうか。異性であるうと僕に緊張は見られない。

忍さんやノエルさん、ファリンさんの時も。異性から抱き締められようと裸を見せられようと。

フォロウは拗ねたような口調で呟いた。

「はあ。ユウヤ様。もう少し異性を感じるべきですよ。これでは先が思いやられます」

「そう言われてもな。別に異性に興味がない訳じゃないんだけど」

「なら少しは紅くなったりしてください。此処まで来ると女性に失礼ですよ」

紅くね。

確かにフォロウは人と言う、美人に当てはまる。それも超が付く美人だ。

しかし、僕にとってはただの異性でありメイドであつて親友に値する。男女間にある恋愛対象としては見ていない。それは、すずかであろうと、夏樹であろうと同じ。

僕に色欲が欠落してる訳でもない。ただ、本質がそれを抑えているに過ぎない。

それは渴望。それは退屈。それは空虚。……自分には何も無い。ただ、飢えている。渴望、退屈、空虚、飢え

それが全て、平凡な日々を非平凡を求めざわめく。そこには愛はなく。争いしかない。その理由はわからないが自分の前世が関係あるのかもしれない。

夢に現れる少女と少年。

血まみれで戦う少年と笑い続ける少年。あれは一体……。

「ユウヤ様。お風呂で寝てしまわれては湯冷めしてしまいます。風邪を引いては……いえ。ここは」

「……変なことを考えるな、フォロウ」

「……起きて居られていましたか」

「ああ。僕の名を呼んだ時にね。まあ、色欲については時間が解決してくれるよ。今は恋愛に当てる時間はないし、早いよ。……とりあえずは」

「了解しました。では早く上がりましょう。体は擦られてたのでしよう?」

「入る前にね。……えーと。一緒に上がるの?」

「何か問題でも?」

「いいや、ないさ。……その前にフォロウ。君の方が色欲がないんじゃない」

「それはどうでしょうか?」

フォロウは人差し指を自身の唇に当て、笑みを浮かべる。

やはり、メイドの中のメイド。底が知れないな。僕は苦笑を漏らし、浴室を後にした。

風呂から出て旅館を探検していると仲良し三人組に捕まり、卓球勝負を挑まれた。

結果は……何故かバニングスに顔面ばかり狙われた。全て防いだが死角を狙う鋭い玉だったため、返すのが大変だった。

すずかと高町は苦笑していたが、やられた僕はそれどころじゃなかったよ。

その後はトランプやパーティーゲームを満喫した。

しかし、バニングスと高町がゲームを満喫した後、苗字で呼ばないで名前で呼んでと言われた時は焦った。

……とりあえず、二人の名前について保留にして貰ったけど、僕のことはいくらも前から名前で呼ぶそうだし、面倒事に巻き込まれそうで怖いな。

夜。

みんなが寝静まった頃、私は目を覚ました。ジュエルシードの反応を感じて急いで旅館を飛び出した。

「ユーノ君！ 今の反応って」

「うん。きつとこの前の子がジュエルシードを……うわっ!？」

「ユーノ君！」

急に銀色の魔力弾スフィアがユーノ君の前に直撃し、ユーノ君がその場から消えた。私は恐怖を覚え、同時に驚きの声でユーノ君の名前を叫

んだ。

「ユーノ、君。……今の魔法の色……」

私は夜空を見上げると、二射目の銀色の魔力弾スフィアが迫っていたようで、防御も張れずその直撃を受けた。

その時、白面ベルンナを被る少年を見た気がした。

私は目を瞑っていた。

だけど痛みはない。その前に先程の恐怖を感じない。私はゆっくりと瞳を開けると、目の前には驚いた顔をした、この前の女の子と昼間の女の人がいた。

「あ、あれ？」

「なのは」

「あ、あ。ゆ、ユーノ君！？ 無事だったんだね！！ 心配してたんだよ！？」

「うん。僕もあれには驚いたよ。けどあの魔法は転移魔法の一種だったみたい。それも射撃系のね」

ユーノ君はさっきの魔法についてそう解説してくれた。だけど、急に撃つてきたらびっくりだよな。

私は内心冷や汗を掻いていると、夜空が銀の世界に変貌した。

これは一体。金髪の子と女の人私たちを見た時以上にその光景

に驚いていた。

「少し強引だったかな？」

突如、空に亀裂が入りそこから白面ベルソナとそれに合わせた白の衣を着た、私のお兄ちゃんぐらいの男の人が現れる。

「『銀灰』これはどう言うことだい！」

女の人が男の人をそう呼ぶ。

銀灰と呼ばれた男の人は肩を竦めて言った。

「フェイトが早めにジュエルシールドを手に入れなかったから、少し余興をと思ってるね。ちなみにフェイトが封印しようとしたジュエルシールドはここです」

銀灰さんは左手を上げ、ジュエルシールドを見せる。フェイトちゃんと言う、私が名前を知りたかった女の子は驚き、ジュエルシールドの存在を確認するも、彼女の視線の先にはなかったようだ。

「そうそう。今回の余興は二人に戦って貰います。その勝者にこのジュエルシールドをプレゼント。まあ、俺から奪うのもよしだけど、実力は知ってるよね、フェイト」

彼がそう言うのとフェイトちゃんは俯き、私に杖を向ける。これって

「その白い子も。彼女と友達になりたいなら向き合ってみれば良いよ。君が思うように……」

彼は私にそう優しく告げました。

あの男の人は私とフェイトちゃんを向き合わせる場を設けてくれたみたいですよ。

私もフェイトちゃんに杖を向ける。

「さて、始めてください」

その号令と同時にフェイトちゃんは目の前から消えた。次の瞬間、私の横に現れた。

俺は空で二人の激突を見守る。

ひとりは白の魔導師。

ひとりは黒の魔導師。

実力は黒の魔導師の方が上だが、白の魔導師もなかなか強い。

「乙女と乙女が戦う。なかなか素晴らしいものだね」

俺は二人の付き人にそう言った。

「貴男は一体何をしたいんですか！ それを賞品にして二人を戦わせるなんて大人がやることじゃない！！」

「そうだよ。初めて会った時は良い奴だと思ったのに。それにフェイトが先に見つけたそれをどうして賞品にするのさ！」

二人は俺に非難の言葉を吐く。  
別になんと言おうと構わないけどさ。……正直うるさいね、コレは。

「……なら、俺から奪い返す？ 俺は別に良いよ、退屈だから。見てるのも楽しいけど、俺は戦いたくて疼いてるんだ。今なら本気はださないよ？」

俺がそう言うと二人は黙る。

まあ、戦闘狂ではないんだけどさ。こうでもしないとうるさいだけだし。ただ……俺の意図に気づいてないならそれもまた良し。意図に気づいて貰いたかった子には気づいて貰ったからね。

「おつ。終わったか。勝者はフェイトだね」

予想通りだったけどまあ、仕方ないね。

「ではでは、今回の試合はこの辺で。次回をお楽しみに……。と言いたいけど二人とも体力がヤバいね。これは副賞だよ」

俺はフェイトにジュエルシードを渡すと左手で指を鳴らす。

それと同時に二人の体が淡い銀の光に包まれる。その光は二人の傷と疲れを払拭する。俺はそれを見届け、その場から消えた。

銀の世界は消え、世界はいつもの夜空を取り戻す。

## 第12話「温泉と賞品」（後書き）

今回も暴走。いえ、メイドさんに視点を当てつつ、ユウヤの中身を中心に書いて見ました。……男としては少しアレに見えますが、今の彼は無関心なんです。

因みに、メイドさんのスリーサイズは設定資料集で公開中です  
また、白面ベルソナこと逆十字架はゲーム感覚で遊んでましたね。まあ、ロストロギアといっても彼にとってはただの石ころ同然なんですが……。

あと、前話の後書きに載せた、最近の二次創作ではプレシアやアリスア、リニスの救済処置が目立ちますが皆さんはどうですか？のアンケートを皆さんよろしくお願いします。

救済処置派は「1」を

救済せずに原作通り派は「2」を感想と共にお願いします。

感想は面白い、面白くないでも結構です。

アンケートは11月7日から11月14日まで受け付けます。しかし、執筆の状態によっては早めに切り上げるかも知れませんのでお早めにお問い合わせします。

このアンケート結果によりこの小説の第一章の結末が変わります。皆さんよろしくお願いします。

今回は遂にあの子が登場します！

### 第13話「再会」(前書き)

あの日から自分は変わり始めた。

あの少女といれば自分は新たな自分を見つげることができる。

僕は久しぶりにあの桜の前に訪れた。

……ああ。その約束、結ぶよ

### 第13話「再会」

海鳴温泉から帰って来て数日が経ったある日。久しぶりにあの桜がある公園を訪れたユウヤ。

「ふう。今日は流石に居ないかな？」

「誰が居ないのかな？」

優しさに満ちた声と共に僕の目の前が真っ暗になる。ひんやりした手の感触を感じた。

「今日は居たんだけ？」

「昨日は来たんだけどな、私」

目を塞ぐ柔肌の手を退け、後ろを振り返る僕。振り返った先には、始業式以来から僕を変えていく少女、夏樹果凜の姿があった。

「昨日は行かなかつたな？」

「ならすれ違いだったみたいだね？」

「そうみたいだ。たぶん殆どすれ違ってたんだろっね」

「そうかも。だけど、久しぶり」

「うん。久しぶり」

久しぶり。その言葉がよく会うと言うのに、二人の間では毎日会ってるような暖かさがあった。

二人は最近の近況報告をしあい、楽しい談話を楽しむ。

「へえ。それじゃあ昨日は温泉に行ったんだ。私も行きかけたなあ」

「まあ、無理やりだったけどね。両親なんか睡眠薬まで使って僕を連れていくし。薬剤知識がなければ僕は眠り続けてたかもしれないのに。犯罪だよ」

「あはは。確かに犯罪の臭いブンブンだ。だけど、二人はユウヤ君と旅行に行きたかったんじゃない？ ずっと、フォロウさん、だったけ？ そのメイドさんと一緒に家族で過ごす時間が少ないから…」

「…」  
「そうかな？」

僕は首を傾げて、青空を見上げた。

振り返ればそうだったのかもしれない。父さん、母さんとは疎遠に近い状態で、いつも家には第二の家族、フォロウやメイドたちしかいない。

そんな二人が久しぶりに帰って来て、旅行に行った。まあ、高町一家に便乗したり、睡眠薬を飲ませてまで引き連れしたのは間違いだけど。

しかし、二人は僕との絆を、思い出を欲したのだろう。遠くに居ても絆があると。いつも僕の傍に居ると。

……やってくれるよ、あの両親は。よく僕の性格、内心を知っている。

「ああ、そうかも知れない」

「そうでしょ？」

「うん。わかっていただけとね。近過ぎてわかっていなかったみたいだ」

振り返れば振り返るほど、両親は僕を心配していた。

父さんは親馬鹿だけど、何時も僕を見守っていた。母さんはいつも微笑んで、僕に優しさを教えてくれた。

なんだ……。僕にも普通の感情はあるじゃないか。ただ、負とも

言える根源がそれらの感情を封じていただけ。

やはり、君は僕を変えていくみたいだ。

ユウヤは果凜を見据え、小さな笑みを作った。果凜はそれに気づくことなく、ただ、笑っていた。

そして空は青空から夕焼けに変わっていた。

「さて、僕は帰るよ」

「もう帰るの？」

「うん。今日はいろいろと厄日だからね」

「厄日って、私と出会ったことかな？」

「違うよ。とりあえず大事な日だから、今日は」

「ふーん。なら次は何時会えるかな？」

「そうだね。……全てが終わる日かな？」

「それって、どう言うこと？」

果凜は疑問符を漏らし、首を傾げた。対してユウヤは苦笑する。

「うーん。桜が散る前にはかな？」

「わかったわ。なら次はそれが終わったら。約束だよ？」

「……ああ。その約束、結ぶよ」

夏樹は僕に薬指を出した。

それは約束の契り。指切り。……約束の絆を結ぶ、誓いの約束。僕はそれを結んだ。

その夜、ユウヤはビル街を歩いていた。彼は何かを探す。

「予想通り。いや、予想以上か」

彼は内心冷や汗を掻きながら呟く。

嫌な予感の中したな

彼は苦い顔をすると人の波に消えた。

彼の姿は荒波に消えたのではなく、元からそこにはいなかった。

その後、ユウヤが漏らしたことが現実となるとは誰も予想だにできなかっただろう。

### 第13話「再会」（後書き）

はい。

今回は出番が最初しかなかった夏樹果凛でした。

ちなみに今回のキーワードは『絆』です。どこかで見たことがある  
と思いますよ。

そして今回は遂にあの名場面？です。ユウヤの出番はあるのか。…

…ないかも。

とりあえず、白面ベルリナに期待です。仮面の騎士は魔法使いを見守ってま  
す。

では、次回をお楽しみに！

あとアンケートの応募お待ちしております

## 第14話「暴走」(前書き)

ジュエルシードを賭けた闘いは遂に中盤へ。

なのはとフェイトは夜闇の空を翔る。

そんな中、ジュエルシードを封印すべく彼女たちは激突する。

そして、彼女たちをあざ笑うかのようにジュエルシードは暴走を始めた。

レーヴァテイン  
穢れなき陽光の杖

## 第14話「暴走」

夜。

街は人でごった返している時間。しかし、人どころか物音ひとつない廃虚を思わす街へと変わっていた。

封時結界。

人避けの結界であり、今この場には魔導師、魔導師に関わりがあるものしか存在しない。

夜闇<sup>よやみ</sup>を翔る、桜色と金色の軌跡。魔法と魔法の激突。杖と戦斧の激突。

それは戦乙女を沸騰させるほどの烈しい激突である。

交錯の中、言葉を交わすもそれも意味を持たず、戦闘はさらに激しさを増す。

「デイバインバスター！」

「サンダースマッシュャー！！」

白き魔導師、高町なのはからは桜色の砲撃が。黒き魔導師、フェイト・テスタロッサからは金色の砲撃が放たれ、両者の砲撃は激突し、相殺する。

そこから更に、フェイトはバルディッシュをサイズホームに変更させ、金色の魔力刃を生み出す。彼女の姿は現在、死神。

刹那、フェイトはなのはの懐に飛び込む。鋭い光刃の斬撃、鎌の一撃がなのはを襲うも、なのはも負けじとフェイトの一撃をレイジングハートで防ぐ。

均衡する二人の攻防。彼女たちに付け入る余地はない。

「フェイト。今はジュエルシードを！」  
「なのはも、行くんだ！」

両者の遣いも激突しあう中、叫ぶ。

フェイトとなのはは距離をとると同時にジュエルシードへ翔た。

そして、二人のデバイスはジュエルシードへ同時に激突する。

その刹那、二人のデバイスに罅が入り、ジュエルシードは魔力を放出した。

「きゃあああつ！？」

「うつつうつつ！？」

二人はジュエルシードの魔力余波に巻き込まれ、二方に吹き飛ばされた。

魔力爆発は市街地を覆い、そして、巨大な碧の柱は天を貫いた。

結界の上空、夜空に浮かぶひとつの影。

ベルソナ 白面を携え、白の衣で姿を隠す、魔法使い「銀灰」。

彼は結界の外で中で起こった、魔力爆発に怒りの表情を仮面の中で作る。

「……もう少し早く気づくべきだった。あのジュエルシードはあの子たちにとって害悪にしかない。膨大な魔力を内封した塊」

彼は仮面の内で悔し気に、そして、自分の馬鹿さに舌打ちする。魔法使いとして、基準を見誤った自分の愚かさ。尚且つ、気づいていながら彼女たちを危険に合わせたことを。彼は一本の杖を左手に顕し、結界内へと侵入する。一本の杖は禍々しくもあり、燦然ともしていた。

かの杖は九つの世界を滅ぼした厄災の杖なり

爆発の余波が弱まる。

凄まじい魔力爆発は世界を一瞬、碧の世界に変貌させたが、直ぐに柱もガラスのように砕けた。

「……」

なのはとフェイトは魔力の余波で吹き飛ばされるが何とか踏みとどまる。

その刹那、いち早くフェイトはジュエルシードに向かって、翔た。暴走するジュエルシードを両手で掴み、封印を開始する。しかし、暴走する魔力を素手で掴むのは、自殺行為である。

「止まれ、止まれ。……止まれ。止まれ」

フェイトの手は傷つき、血を流す。だが彼女は自身の魔力を使つて必死に暴走する魔力を封じる。足下には魔法陣まで浮かび上がり、

祈るように目を瞑った。

「フェイト。邪魔だ！」

「えっ!？」

その刹那、空から怒声が上がる。

フェイトは驚き目を開く。空を見上げると杖を持った白面ベルソナが凄まじい速さで向かってきた。

「早くジュエルシードから手を離せ!! お前の魔力では暴走は止められない!」

「で、でも」

「良いから、離れてくれ」

白面ベルソナは悲痛な叫びを上げた。

今までそんな感情を露わにしたことがなかった彼を見て、フェイトは、なのはたちすら目を見開いた。

しかし、それも一瞬。白面ベルソナはそれを好機と見て、フェイトをジュエルシードから引き離す。

再びジュエルシードの魔力が暴走を開始し、白面ベルソナを襲う。

「危ない、離れるんだ!」

その時、ユーノが声を荒げた。

ジュエルシードの魔力が再び空を貫く。フェイトはアルフに肩を抱かれ、なのははユーノが居る位置まで離れた。

再三に渡る、魔力爆発が起きた。

「銀灰ッ!」

「銀灰さん!!」

フェイトとなのは同時に叫ぶ。

魔力爆発に白面は巻き込まれ、悲痛な表情を見せる二人。

『レイヴァティン  
穢れなき陽光の杖』

しかし、その時、優しさ満ち足りた一声が結界を包む。

碧の魔力が『銀灰』に包まれた。

そして、ボロボロながらも『銀灰』の魔力粒子が流す、白面を被った少年が光の中から現れた。

くっ。

魔力が……。

フェイトをジュエルシードから引き離したのは良いが、俺が思っていたジュエルシードの魔力暴走は、普通の魔法使いが起こす魔力暴走とは違った。

そのため、本来なら封印ではなく、破壊すべきなのだが、破壊すれば同時に結界外まで魔力の余波が広がり、世界に悪影響を及ぼしかねない。

そのため封印作業を行うが、魔力暴走の二波目が起きた。

その一撃が防御魔法の一層目を破壊し、二層目に罅を入れる。そして、ユーノの叫び、フェイトとなのはの叫びと共に第三波が起こり、二層目、三層目を破壊し、暴走した魔力が肉体に直撃した。

同時に体を縛る枷が外れた。  
自身が知らない力が身体を満たす。同時に脳内に浮かんだ杖の名を叫んだ。

『レーヴァテイン  
穢れなき陽光の杖』

俺はかの杖、九つの世界を破壊した厄災の杖の真名を叫び、自身  
が持つ最高の封印式をジュエルシードに打ち込んだ。

同時に、完全にジュエルシードは封印される。

自身の世界は『銀灰』に包まれ、再び放出された力に、鎖、枷が  
巻き付く音が聞こえた。

一体何が起きたかはわからない。

私がジュエルシードを直接封印しようとしたら、銀灰がジュエル  
シードから私を引き離した。

そして、ジュエルシードは再び魔力爆発を起こし、銀灰はそれに  
巻き込まれた。

さらにジュエルシードは再三に渡り、もう一度、巨大な魔力爆発  
を起こした。

私のもし、あのまま封印を行っていたら……。私はその光景に吐  
き気を催した。

銀灰が引き離してくれなければ、助けられなかったら。

私は爆発に巻き込まれた銀灰の名を呼んだ。だけど、彼は……。

そう思った時、『銀灰』の魔力粒子が舞った。私は体に鞭を打ち、それが発生する先を見据えた。

彼は、銀灰は、ボロボロになりながらも、杖を左手に、ジュエルシールドを右手に持って姿を現した。

私の心は嬉しさと涙に満たされた。

……生きていてくれた

銀灰はボロボロながらも杖を用途に合わせて使う。杖を支えにジュエルシールドをフェイトに投げつけた。

「……フェイト、白き魔導師。白いのは高町なのはと、言ったな。二度とジュエルシールドに衝撃を与えるな。……次にこうしたことがあれば 死ぬぞ」

ベルソナ 白面に罅が入り、割れた。

その顔は銀髪で隠れて見えなかったが、なのはどこかで見たような錯覚した。

フェイトはその言葉に胸を撃たれながらも、小さく頷く。

銀灰は白面ベルソナを拾い、姿を消した。フェイトとアルフもそれを見届

け、姿を消す。

残ったのはなのはとユーノ。  
そして、虚しさアキトと暴走の痕だけだった。

銀灰はとあるビルの屋上で体を休める。ズタボロの身体の傷はほとんど回復魔法で治すが、左腕には包帯を巻く。

「ちっ。やっぱり、魔法を使った跡はどうにも治らないか。……しかし、白面ベルンナが割れるなんて」

真っ二つに割れた白面ベルンナを見て、ため息を漏らす。

「しかし、見られてないよな」

長い銀髪の前髪から夜空を覗いた。

見え隠れする銀の瞳は満月を見据える。夜闇よせみは星たちに満たされていた。

## 第14話「暴走」（後書き）

原作とかなり話が変わってしまいました。

しかし、私が思うに暴走と言うのは一度に限らないと思うのです。小規模ながら次元震を起こせるほどの魔力を内封しているというので、やはり一回だけでの爆発ではないと思うんですね。だから今回、何度か爆発させてもらいました。まあ、ロストロギアというのはこれほどやばいものであると言いたかったのですがね。

さて、次回は遂に皆さんお待ちかね？の彼が現れるかと

ではでは、皆さんの感想とアンケートの答えをお待ちしています。

第15話「第三の魔導師」（前書き）

ジュエルシードが暴走して数日。

再び新たなジュエルシードが目覚め、その場に集いしなのはとフェイト。

そして、彼女たちの前に姿を現す新たな魔導師。更に、忘却の魔法使いも現れる

相手が悪すぎる

## 第15話「第三の魔導師」

次元の海を漂う一隻の巡洋艦。

時空管理局所属・アースラは、第97管理外世界にて起こった、小規模次元震の調査のため『地球』を目指す。

「さて、今回の旅もまた厄介ね」  
「どういことです、艦長？」

緑の色素の髪を持つ女性は『地球』へと船を進めながら呟く。その目は真剣そのもので、一枚の資料を見据える。

そんな彼女にお茶を運ぶ、茶色の髪を持った少女は疑問を漏らした。

「エイミー、ありがとう。……それがね、今回ロストロギアを観測した地球に彼の存在が確認されてるのよ」

「彼、ですか？ それは一体……」

「彼の名前は『忘却の魔法使い』と呼ばれる白面ヘルムナを被る青年だよ」  
「クロノ君」

ブリッジの入り口から黒装束を身に纏う少年、クロノがエイミーの疑問に答える。

クロノは数枚の資料を艦長に渡すと、モニターにとある大会で撮られた、仮面に白装束を身に纏った青年を映し出し、更に話を続けた。

「『忘却の魔法使い』……彼が現れたのはかれこれ二年前。DSA  
A。Dimension Sports Activity Association  
と呼ばれる公式魔法戦競技会に参加し、彼はそ

の年と翌年で、二冠を達成した魔導師とされている」

「公式魔法戦競技会を二冠……凄いね。だけど、されているって？」

「それはね、彼の情報が一切不明だからなの。デバイス不明、出身世界不明。何ひとつ不明なのに対し、唯一わかっているのは推薦者。その推薦には評議会代表の名で出場しているのよ」

艦長、リンディ・ハラOWNはエイミィの疑問を更に詳しく継ぐ。

「それも、全ての試合……決勝以外は魔法らしい魔法を使った形跡が見られないの。そして、決勝でもたった一撃で試合は終了。圧倒的な魔法と格闘技で相手選手を寄せ付けず、ノーダメージで倒したとされているわ」

「ふへへ。それは何とかというか凄いですね。……だけど管理局にとってそれは」

「ああ。管理局にとって消し去りたい過去で、屈辱であつて脅威だろうね。身元不明の魔導師が圧倒的な実力を見せ付けて優勝を、それも二冠を達成したんだ。だけど、評議会はあるか、上層部は彼の情報を公開しなかった。それも提督や執務官たちには彼について一切関わるな、と言いやった」

「じゃあ」

「ああ、彼には何かある。それも、誰にも知られてはならない何か……。次元犯罪者ではないとしても、脅威には変わらないよ」

モニターに映る仮面の男と今回得られた情報を見比べ、クロノは腕を組み、真剣な表情で地球への到着を待ち望む。

その頃地球では、ジュエルシードの暴走から数日足らず、新たなジュエルシードが姿を現す。

なのは、フェイトはその気配を感じ、ジュエルシードが現れたとされる場所へと向かい、何度目かとなる出会いを果たすが、二人は言葉を交えることなくジュエルシードの封印へ。

そして、ジュエルシードの思念体を倒すと、なのはとフェイトは夕焼けを前に向かい合う。二人は自らのデバイスをデバイスモードへと変更する。

フェイトは戦意を持ったまま、なのはを見据えた。それに対しなのはは告げる。

「私が、勝つたら。ただの甘ったれた子じゃないとわかってくれたら。お話し、聞いてくれる?」

フェイトに向かって言葉を交わす。しかし、終始無言のまま、同時に二人は空を蹴り、激突する。

「ストップだッ!!」

だが、彼女たちの激突を防ぐように突如、同い年くらいの少年が戦闘行為に割り込む。

「ここでの戦闘行為は危険すぎる。……時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。まずは二人とも武器を引くんだ」

そう二人に言い聞かせ、地上へと三人で降りる。その時、空から数発のオレンジ色をした魔力弾が三人へと降り注ぐ。

「フェイト、撤退するよ」

魔力弾が放たれた先にはフェイトの使い魔、アルフが更なる魔力弾を形成し、フェイトの撤退の援護を行う。

フェイトが飛ぶと同時になのは、クロノに向け、アルフは魔力弾を放つ。しかし、それらは全て軽々と避けられた。

その時、フェイトは上空に漂うジュエルシードを掴もうと手を伸ばす。だが、それは数発の青の魔法弾に遮られ、フェイトは地上に落下する。

「フェイト！」

アルフは落下するフェイトを追うが踏み込みが足らず間に合わない。

このままでは堅い地上に落下し、大怪我をしてしまう。刹那、銀の魔力が舞った。

「酷いことをするな執務官君」

地上に突如として現れた、ヘルソナ白面を被る、白の衣を纏った少年がフェイトを抱え、クロノとなのはを見据える。

「……忘却の魔法使い」

「あれ？ 俺は君とは初対面の筈だが……。なるほど、俺のデータを見たか」

「ああ。過去二回の君のデータは見せてもらったよ」

「ほう。それで？ 俺をどうするつもりかな？ 捕らえてみるかい？」

銀灰は仮面で表情を読めないが、声は笑っていた。クロノは銀灰

の道化のような振る舞いに、少し怒りを湧いたが冷静に言葉を選ぶ。

「君には関わるなと上層部から言われている」

「そうか。上層部もなかなかわかってるね。俺を……いや、止めておこうこれは。で、他に言いたいことは？」

「その少女を渡して貰いたい。彼女は今回の件に関わる重要な参考人だ」

「……ふーん」

銀灰はクロノの言葉を気にせず、気絶したフェイトの頭をひと撫でする。

「……」

「君にヤダと言えはとうするかな？」

銀灰はフェイトに優し気な笑みを送りながら、アルフが横に来るのを待った。

銀灰はアルフにフェイトを預け、クロノに遠回しに『いや』と擬音が付くように、首を傾げて微笑んだ。

「……それは時空管理局への宣戦布告ととっていいのかな？」

「構わないよ。彼女を捕らえたいなら俺に向かって来れば良い」

「あ、あんた何を！？」

「ははは。アルフ、大丈夫だよ。すぐ終わるから。それに今回は少し、管理局の質を再確認したいからね」

「……くっ！ では武力によって彼女を捕らえて」

「見せるかな、管理局員君？」

「っつ！？」

突然、銀灰から頭を抑えられ、言葉を濁す。どこから。……いや、

何時動いた？

クロノは自身の相棒、S2Uを横凧に払い、銀灰から離れた。銀灰は地を蹴り、なのはのいる地点まで後退する。

「怖いね。だけど、執務官と言っても弱い。管理局で言うAAA+ぐらいかな。……確かに戦闘経験は豊富そうだが、体の基礎が出来上がっていない。鍛えることを進めるよ、俺は」

「っ！！ ば、馬鹿にするなあぁぁっ！」

《Stinger Ray》

八つの魔力弾を瞬時に形成。

直射型魔法であるため誘導はできないが、その速さは高速で銀灰を襲う。

しかし、それもまた去なされる。攻撃魔法であるため、触れるとダメージを受けるというのに、銀灰は躊躇なく魔力弾を去なしていき、なのはに告げる。

「君はこれからどうする？」

「ふへ！？」

「そう慌てないで良いよ。俺はただこれから君が為すことに介入はしない。君は君の道を進むといいさ。……君に俺はこれでも期待しているんだからね」

銀灰は意味深げな言葉をなのはに残し、全て魔力弾を握り潰した。その光景はまさに圧倒的。そして、規格外。

クロノはおろか、なのは、アルフまでもが目を見開く。

銀灰はその好機を見逃さず、誰に言うでもなく高らかに告げた。

「俺を見ている誰かさん。俺の力と魔力を調べるならば調べて見ろがいい。ただし、彼には絶望を味わってもらおうけどね」

銀灰は夕焼けをバックに気絶したフェイトと自身を見据えるアルフ、なのはとユーノに結界を張った。

気絶したフェイトと結界を瞬時に張った、銀灰を除き、この場にいたものは混乱する。クロノは内心冷や汗を掻いた。

相手が悪すぎる

ここに来て脳裏に浮かぶ、自身の言葉。僕は……関わってはならない存在と関わってしまった。クロノは後悔の念に潰される。

「一度、その身を持って本当の敗北を知ると良い。この魔法は君ら魔導師にとって、とても良いものとなるさ」

完全に戦意を失ったクロノを見据え、呟く。

刹那、一人を隠すほどの複雑な魔法陣と、それを囲うように手のひらより大きい魔法陣が六つ浮かび上がった。

計七つの魔法陣には瞬時に魔力が収束され、六つの陣にはバスケットボール程度の魔力が。中央の陣には六つバスケットボールを更に重ねたような、規格外な魔力が収束された。

その魔力総計は規格外。その一言に尽きる。そして、もともと彼の魔力量はおるか、計測は不可能であり、計測を始めたところで全てが識別不明でエラーを出す。

しかし、今回は見ただけでその凶悪さは目に見えている。あれは危険だと訴える。

だが、クロノは逃げることは出来なかった。結界は夕焼けから銀へと変わり、アースラからのサポートは通信のみしか出来ない。…残されたのは絶望のみ

「これが君が見る……」

「やめ」

「最後の光だ。……第七式」

静止の通信と焦る艦長の映像が映し出されるが、彼は止まらない。今、この場は彼の独壇場であつて誰の言葉も耳には入らない。なのはたちも何かを結界の中で訴えるが、銀灰は厄災の杖『穢れなき<sup>アテイン</sup>陽光の杖』を左手に携えた。

「セランス・エンジェル  
七鍵守護神」

銀灰は魔法の真名を告げる。

小さな……残して彼は告げた。

同時に魔法陣は呼応するかのように銀の魔力光を放出する。そして、銀灰は厄災の杖を魔法陣に叩きつけた。

刹那、七つの極大な極光が枷を破り、地へと放たれる。その圧倒的な物量の脅威は計り知れないが、神々しくもあつた。

膨大な銀の濁流は世界を満たし、クロノ・ハラウンを飲み込んだ

## 第15話「第三の魔導師」（後書き）

さて、今回の後書きなのですが実際何を書いていいかわかりません。とりあえず今回のお話でも振り返りましょう。

さて、忘却の魔法使いこと銀灰は何やら管理局に姿を現しているようです。彼は何をしているのでしょうか？

そして、今回は今回で何やってるんでしょうね。クロノ君蒸発！

……原作崩壊しすぎな気がします。次回に続きます。

ネタが尽きた！ いえ、後書きと前書きのネタなのですが。

前書きはたまに書き直してるかもしれませんが、前話を振り返るのも良いかもしれません。

では、今日はこの辺で。

因みにアンケートはまだ募集しています。お早い返答をお願いします。

第16話「嘘と悪夢」（前書き）

銀灰は無慈悲にも極大の極光を管理局の執務官に放った。

その威力は本来の魔導師が放つには規格外。

なおかつ上位の魔導師であっても放つことができない収束魔法の一種。非殺傷設定でも骨ひとつ残さないと考えるほどの銀の極光を放った。

現地はおろかそれを見ていたものは絶望の光景を目の当たりにした。

うん。ナイスツツコミだ。では

## 第16話「嘘と悪夢」

世界は銀に包まれ、地は抉り採られた。海水が地を満たし、崩壊した大地。

天には銀の粒子を零す、白き仮面を被る少年が地を見据えている。

「さて、管理局員の皆さん。どうしますか？ まだ、俺とやりませんか？」

彼はまだ映像繋ぎ留めている先を見据えて、画面越しに訊ねる。未だに地は魔法の衝撃により砂煙を上げ、直撃を受けたクロノ・ハラオウンの姿を確認することは出来ない。

しかし、アースラの管制室から見ても、目に映る光景は地獄。あの莫大な極光を受けて、クロノ執務官は生きていないと結論する。アースラの最高責任者、リンディ・ハラオウンは息子のクロノの死に一滴の涙を零す。だが、ここは泣いている場合ではない。リンディは虚ろな瞳に活力が戻し、画面越しに銀灰を見据えた。

「貴男は自分が犯したこの現状に何も思わないのかしら。……いいえ。貴男は何をしたかわかっているのかしら？」  
「わかっていますよ。しかし、それがどうしました？」

銀灰は冷淡に言葉を紡いだ。

画面越しに彼の言葉を聞いたリンディは背筋が凍りつく。銀灰の言葉はどこまでも冷たく、関係ないという拒絶だった。

銀灰の側にいたなのはたちもその言葉には顔を青くした。

「俺にとって人がひとり消えようとどうでも良いことです。しかし、俺の妨げになるならば……全力を持って……終わらせませす」

彼は優し気ながらも残酷な一言を言い放つ。なのはとユーノは絶句し、アルフは開いた顎を閉じれず、リンディ他、管理局員は啞然とし、また強張る。

しかし、彼は一変。クスリツと笑い零した。

「……はあ。とりあえずまあ、……冗談は止めて、後ろを振り返ってみてはどうです、リンディ・ハラオウン提督？」

銀灰は仮面越しに笑いをこらえ、シリアスな展開を打ち壊す。

銀灰の急な壊れように周りは啞然とする。それに応えるように彼は道化の如く、マジックを見せるよう、背後を指すと指を鳴らした。リンディは自分の名前を言われたことにも、銀灰の言動や行動に動揺を見せなかったが、彼の言う通り、後ろを振り返る。

「なっ!?!」

「えっ!?!」

振り返った先には気を失った無傷のクロノ・ハラオウンが横たわっていた。

アーススタッフの管理局員はおるか、クロノの親友、エイミイ、母であり艦長であるリンディですら声を漏らした。

現地の銀灰はそんな彼らの啞然とした顔を余所に、なのはたち結

界を解く。

「さて、アルフ。君はフェイトを連れて早くここから撤退した方が  
良い」

「わ、わかったよ」

アルフは頷き、気絶したフェイトを背に乗せ、転移する。ただ、  
消える際に「あんた、何をしたのさ？」と疑問を投げかけた。しか  
し、銀灰は笑いを抑えるのみで「さあ？」の一言を返すのみだった。

「あの一……」

「どうかしたかい？」

「いえ。あれだけの砲撃を受けて、どうしてあの子は無傷なんです  
か？」

ユーノは銀灰に言葉をオブラートに包み、訊ねた。だが、銀灰は  
やはり答ええない。ただ……。

「君には予想が付いてるんじゃないかな？ 俺が何をしたのか？  
何を隠しているか？」

「……」

「正解、のようだ。よく分析しているね。……それじゃあ、俺は消  
えるよ」

銀灰は片手を振って、なのはとユーノに背を向けた。だが、白の  
衣の裾を握られ、動くことが出来ない。振り返れば、なのはが銀灰  
の裾を握り引き留めていた。

「どうして裾を握ってるのかな？」

「私はまだ銀灰さんが何をしたか知らないの！」

何でしょうか、この不思議生物は？

なのは頬を膨らませ、上目遣いという反則技を繰り返す。しかし、その効果は……。

「うーん。俺は説明する気はないよ。とりあえず、裾を離してくれない？」

上目遣いは銀灰に効果はなかった。

そうして、いつものように彼は淡々と言葉を紡いでいく。だが、なのはとて一筋縄ではない。銀灰に食らいつき、話すまで裾を離すことはしない。

しかし、なのはと銀灰は何度も話を繰り返し続けた結果は言わずもがな。

「ですから……あ、あれ？」

「じゃあ、ユーノ君。あとは任せだよ」

「は、はい。……ええええッ!？」

「うん。ナイスツツコミだ。では」

「ぎ、銀灰さん。まだお話は……!？」

なのはの一瞬の隙を付き、銀灰はそれに活路を見だし離れた。なのはは驚き声を上げるが、銀灰はユーノにあとを任せ、転移する。

転移の際、ユーノが声を荒げたが銀灰はそれに親指を立て、褒め

ていた。

銀灰がその場を離れた後、なのははまだ拗ねており、ユーノはそれを慰めていた。

ユーノの話によれば、なのはは今度銀灰にあつたら、問答無用でお話すると意気込んでいたらしい。

そして、二人から離れた次元の海に漂うアースラでは、未だにクロノの意識回復にアースラの医師たちは努めていた。

しかし、クロノは悪夢を見ているようで、譫言のように必死に声を上げる。

や、止めてくれ！？ 何だ！ なに……びぎやああッ！！！！

そんな悲痛な叫びがアースラ内部を数時間、浸透していたとか、してなかったとか。クロノは一体何に苦しんでいるのか、それは彼にしかわからない。

ただ、クロノが喚いている頃、医師による診断結果は精神に安定が見られないだけで、外傷は全くなかったと結論がでた。

その言葉に、アースラスタッフ全員は安堵の溜め息を吐いた。

また、クロノに外傷による被害はないとわかった管制室にいるス  
タッフとリンディも、同じ様に安堵の溜め息を吐く。

そして、モニター越しになのはとユーノの姿が残されていたので、  
これまでの事情を訊くため、リンディが二人をアースラに呼んだの  
はまた別の話である。

## 第16話「嘘と悪夢」(後書き)

はい。今回はクロノ生還？のお話でした。

しかし、あの極光を目の当たりにすれば死んだと思った人は多数いたかと思いますが、彼が人を葬ることはありません。……たぶん。

そして、なのはは何やら雲行きが怪しくなってきましたね。覚醒の前兆か、はたまた、違う何かか。

そして、本編はゆっくりと原作を進みます。

アンケートの返信受付は残り2日となりました。しかし、返信は僅かの一通。

もしかして気づいていないのかな？と思っています。

では、次回をお楽しみに

## 第17話「決断」(前書き)

なのはとユーノはあの魔法を前にして、その後アースラに呼ばれた。そして、アースラの中で待ち受けていたものはあの魔法を受けた少年。

その後、彼に案内された先で遂に艦長と出会う

私はこの艦ふねの艦長をしているリンディ・ハラオウンよ

## 第17話「決断」

アースラに呼ばれたのはとユーノ。二人は機内に入り目を丸くする。

「凄いねユーノ君。機械がいつぱいだよ！」

「うん。そうだね、なのは」

巡洋艦と言ってもこれは次元の海を渡る艦だ。凄いを越えて、有り得ないが当てはまる言葉だろう。やはり、管理局の技術は凄い。ユーノは艦内を見てそう思っていた。

なのはが艦内を珍しそうに見ていると、前方から人影が見えた。

「……ああ、二人共。艦長が呼んでいるよ」

「あ、は……い？ さ、さっきの執務官さん！？ ……もう動いて平気なんですか？」

なのはとユーノの案内役として現れたのは、さつき銀灰の魔法によつて意識不明の重症？により、医務室に寝ていたクロノ・ハラオウンその人だった。

「ああ。……精神以外は何かね。怪我とかは一切なかったんだが

」

彼はそう遠い目をして呟いた。

なのはとユーノは聞いてはいけないことを聞いてしまったと後悔した。

クロノはぶつぶつと「あれは夢だ。あれは夢だ。あれは……」と高速詠唱の如く呟き続けている。何やらトラウマを植え付けている

ようだ。

だが、二人の憐れみとご愁傷様ですと言う視線に気づき、クロノは咳払いをして、簡単な自己紹介を互いに行くと、なのはにバリアジャケットを解くように願った。

その後、クロノがユーノに言った言葉で、なのはが絶叫を上げたのは、また別の話である。艦内のスタッフはその絶叫に敵襲かと焦ったそう。

なのははユーノの変わり果てた姿に驚きながらも、クロノの先導により艦長室まで案内された。

「まさかユーノ君が人間だったなんて……」

「な、なのは。ごめんね。もっと早くに僕も気付いておくべきだった。あの日、僕は君に人間の姿じゃなくて、動物の姿だったんだって……」

「うんうん。私こそ」

艦長室に着くまで二人は互いにあの日の食い違いについて整理していた。

ユーノは動物ではなく、人間で、あのなのが魔導師になった日から彼は、動物の姿のまま過ごしていたということ。

「こほん。そろそろ良いかな？」

「あ、はい！」

「すみません」

なのは、ユーノの順番でクロノに返事を返した。クロノは艦長に声を掛け、艦長室に二人を通した。

艦長室に入った瞬間、なのはとユーノは目を疑った。目の前に映る光景は艦と、かけ離れた様式を持つ室内だった。

艦長室は一面、和を意識しており、日本の伝統的な和をモチーフとした、茶室のような光景である。

「ほえー」

「うわー」

なのはとユーノはこの部屋の状態には流石に驚けず、鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をしていた。

「いらっしゃーい。私はこの艦の艦長ふねをしているリンディ・ハラオウンよ。よろしくね、なのはさん、ユーノ君」

「あ、はい。よろしくお願いします」

「こちらこそ」

突如として目の前に、アースラの艦長リンディの登場し、肩が跳ねる二人。

しかし、二人はすぐに挨拶を返す。

そして、リンディは二人の返事を聞くと「早速だけど……」と話題を切り替え、これまで関わって来た、ジュエルシードの話を訊ねる。

なのはたちは今まで行って来たジュエルシードの話語り終える。

リンディはその話を聞き、神妙な顔つきになるが、一変、笑顔でユーノに言った。

「立派なことだわ」

「だけど、同時に無謀でもある」

クロノが壁を背に二人に事実を述べた。なのはとユーノも、今までのことを振り返れば、無謀だったと言うことはよく理解している。二人は少し俯く。

更にクロノの言葉をリンディが引き継ぐ。

「確かに無謀だわ。まだ子どもがあんな危険なものに関わ……」

「ああ。あなた方は正しいよ。しかし、地球にあれは邪魔だ。貴女たちが今此処に着いたから良いものの、その前にあんなものが活発に動き始めたらどうなっていたかな？」

「っ！！ 貴方は」

「お前、どこから!？」

艦内、艦長室に突然姿を現した銀灰。

転移反応も、存在の知覚もできなかった二人は彼の登場に驚き声を上げた。

なのはとユーノは特段、驚きはしなかったが顔が引きつっていた。

「うーん。どこからと言っても空間転移によって、進入したとしか答えられないかな。まあ、この仮面がある限り、魔力はおろか、存在は肉眼で捉えるしか知覚できないけどね」

銀灰はおちゃらけた声で答えを返した。クロノはその答えに息を呑む。リンディはその答えを理解し、銀灰に新たな疑問を訊ねるため銀灰に呼びかける。

「銀灰さんと言いましたね」

「ええ。銀灰ですよ。あなた方が呼ぶ忘却の魔法使いでもあります  
が」

「では、これからは銀灰と私たちも呼ばせてもらいます」

「自由」

「では、銀灰さん。貴方がクロノ執務官を無傷で此処に移した方  
法は？ また、その際、彼に何をしたのか？ そして、此処に現れ  
た理由を答えて頂けませんか？」

リンディは意を決して告げた。

彼は一体何をしたいか、その真意は謎のまま……。

なのはさんから聞いた銀灰の話しも、ジュエルシードを賭けて闘  
ったり、時には手伝ったり、ゲームと称してジュエルシードを賭け  
て闘わせたり……彼の行動は不明瞭なものばかりである。

彼が答えてくれるかは博打に近い。

彼は一拍、考える素振りを見せて答える。

「そうですね。お話しするのは良いですが、まずは、高町なのはと  
ユーノ・スクライアと協力関係を結ばれることを条件として、お話  
しましょう。まあ、貴女たちが彼らと協力関係を結ぼうと結ばな  
いであろうと、一切私からは手を出だしたりしませんかね。まだ  
彼らは幼いのですから」

銀灰は不適な笑みを浮かべたように条件を出した。

リンディはその言葉に願ったり叶ったりの条件であったため頷く。  
一応、彼も二人に条件を話し了承を得ての発言だったようで、条件  
の不備は何も心配ないようだ。

「ではお話ししましょう。まずはその執務官への圧倒的な暴力です

が  
」

彼はこの場で圧倒的な暴力と告げた。此処にいるものは目を見開く。

管理局は全次元世界の法を司っていると云っても良い、ひとつの機関だ。そんな機関の前に彼は『暴力』の名を加えていた。

これは自分の罪状を認めたと

「そうそう。俺を捕まえようと無駄ですよ。先に喧嘩を売ったのは彼ですからね」

銀灰はそう言ってリンディの考えを否定した。リンディは内心冷や汗を掻いていた。だが、そんなことはどうでも良い銀灰は、そのまま話を続ける。

「まあ、それは捨て置いて、話を続けますが、彼に見せたのは俺が持つ七番目の魔導、広範囲殲滅魔導に名を連ねる魔法です。しかし、威力は通常よりワンランクアップしてますけどね。そして、直撃直前に幻術と転移魔法を並列処理により展開。アースラに転移させた訳です」

彼は難なくそう答えるがその答えにはリンディ、クロノ、ユーノは脅威を覚え、なのは首を傾げた。まだ、魔導師になって日が浅いなのはには、これがどれだけ凄いことかわかっていなかった。

しかし、リンディとクロノは納得が出来ずとも彼の力は本物であり、自分を『忘却の魔法使い』と呼ぶほどである。

彼にとって、三つの魔法を同時に制御するのは簡単なものだろうと考えている。

管理局にとっては脅威だが、今は情報を整理することが先である。

「……では、貴方の言う幻術とは？」

「第十一式『忘却の檻』オブリオ・ガクヒアと言う本来は捕獲に適した魔法ですが、相手の精神に悪夢を見せる魔法でもあります」

「悪夢？」

「ええ。クロノ執務官はよくご存知かと」

銀灰はそう言ってクロノに視線を向ける。対してクロノは消し去りたい過去のひとつとなった、あの悪夢を思い出し、げっそりした顔になる。

そして銀灰は向き直り、最後の返答を答える。

「そして最後の返答ですが、この説明をするために現れたに過ぎません。どうせあなた方はこの子等に訊くのだからと思ってきましたからね。では、俺はそろそろ帰りますよ」

彼はそう言って席を立つ。

だが、それを止めるようにリンディは声を掛ける。

「貴方は一体何ものですか？ 管理局とは違う魔法に、敵か味方かすらわからない。……貴方は一体」

「俺はただのしがない『魔法使い』です。それと、今はまだ貴方たちの敵でもありません。ただ、まだ幼き魔法使いを見守るために動いているに過ぎません。……最後にあなた方の魔法と俺たち『魔法使い』が使う魔法は確かに違いますよ。では」

銀灰はそう言葉を残し、艦長室から姿を消した。彼の転移の痕跡を追ったが、やはり消息は掴めなかった。

銀灰が転移した後、リンディはジュエルシードの全権を全てアースラが持つことを表明し、なのはとユーノには1日考える時間を与え、これからどうするかを考えさせた。

やはりまだ幼い彼らを危険なことに協力させるのはと思い、彼らの気持ちを整理させる時間を与えた結果である。

そして次の日、なのはとユーノはアースラに協力関係を結ぶ答えを二人は出したのだった。

## 第17話「決断」（後書き）

ふう、何とか今話を執筆し終えました。

とりあえずクロノの復帰とリンディとの出会い、そして、銀灰を登場させましたが如何でしたでしょうか。もう少し詳しく書きたかったのですが語彙力の前にあっさり敗退しました。自分の文才のなさに泣きます。

今回は決断を主題にしていますが、これは最後のなのはとユーノのこれからを表したものです。あとは、アースラのこれからの対応です。ね。

いろいろと伏線が増えていますが、どうしたものか……。

そして、謎は謎のまま残し、次回に続きます。

では、次回の更新をお楽しみに

第18話「時の庭園」(前書き)

銀灰はある答えを示すべく、次元の海に浮かぶ城を目指す。  
そこで見たものは

これってSMプレイかな？

## 第18話「時の庭園」

翌日、朝陽が昇る時間、銀灰はとあるビルの屋上に佇んでいた。その姿は普通の人間から見れば不可思議。存在は異質とも言える。

「さて、アクセスコードは大体把握してたけど、まさか次元の海とはね。……面倒だ。だけど、今は」

『レーヴァテイン穢れなき陽光の杖』を召喚し、地を一突きする。それは波紋のように広がり、銀の粒子が零れ出る。雪景色を思わすその光景と共に、銀灰の姿は消失した。

次元の海に漂う、巨大な城。

それは城と言う名のおとぎ話に現れる、魔女の城をモチーフにしたと言っても良い、歪な城。

そんな城の一室で鞭を叩く音が響く。

その音は城を覆うかのように、悲痛な音を思わせる。

「フェイト、六個のジュエルシードでは足りないわ。私を失望させる……」

「これってSMプレイかな？」

「っ！？ 銀灰！！」

「……貴方どこから 銀灰？」

二者の前には白面<sup>ヘルソチ</sup>で表情を隠した、銀灰が降り立つ。

銀灰は二人の姿を見て、何かのプレイかと呟く。銀灰の唐突な登場にフェイトは驚き、そして、そのフェイトの母親と思われる悪役の魔女のような女性は、銀灰の名に何か心当たりがあるようだ。

「鞭に縄。まさにSMプレイの醍醐味だね。だけど、児童虐待だよ、それは……」

銀灰は魔女にそう言ってフェイトを縛る縄を解く。同時にフェイトの体に刻まれた鞭の跡は消える。

それを見た魔女は驚きの声と共に、胸の中で軋みを上げていた歯車が噛み合った。

「……フェイト、貴女はもう地球に戻りなさい。母さんのためにジュエルシールドを手に入れて来るのよ」

「母さん、でも……」

「ねえ、フェイト。俺は少しプレシア女史とお話しがあるんだ。だからね」

魔女、プレシアは突き放すようにフェイトに言い放ち、銀灰は優しく頭を撫で、フェイトに理由を話し送り出す。

フェイトは頭に疑問符を浮かべながら頷き、部屋を去った。

此処にはもうプレシアと銀灰しか存在しない。一拍空けて先にプレシアが口を開く。

「貴方はどうして私の名前を知っていたのかしら？」

「そう言う貴女こそ、俺を知っていたような口振りだけど？」

互いに心理を読み合つが平行線を辿る。疑問を疑問で返し、腹の

探り合いと言ったところだろう。しかし、プレシアはその程度わかっていた。

「貴方がどうやって此処に来たかは聞かないわ。聞いたところで意味はないのよね。『魔法使い』は私たちが考えている常識では計れない、非常識の存在なのだから」

「……良くご存知で。そんな貴女も俺のことを良く調べているようですね」

プレシアの言葉に表面上では焦りすら見せない銀灰だが、内心では少々の焦りを見せていた。

「……だけどその程度はどうだって良い。貴方の名をフェイトから聞いた時から、貴方のことは引つかかっていたのよ。『魔法使い』

『忘却の魔法使い』『銀灰』……」

「なるほど、確かに大魔導師と呼ばれる貴女なら俺の情報を何となく掴んでいたのはわかる」

「貴方もそうでしょ。だから此処に来た。違うかしら？」

「……お手上げですね。そこまでわかつていたとは。ですが」

「有無は言わせない。貴方がどれだけ強くても、私も大魔導師と呼ばれた魔導師よ!!」

銀灰を囲むようにプレシアの術式が瞬時に編まれ、複数の魔力弾が展開される。

しかし、その程度に銀灰は動じない。『穢レーヴァテインれなき陽光の杖』を一突きし、銀の魔力余波を広げ、全ての術式を破壊する。レジスト

プレシアはその光景に驚きと歓喜を浮かべた。

「まさか、私の魔法を全て……。だけど、これで貴方が魔法使いミミックンクナンバー・サードイン0・13『忘却の魔法使い』だと確信できたわ」

「なるほど、そこまで調べてるとは参りましたね。……ええ、俺は次元世界に13人しか存在しない最高位の魔法使いの一人です」

彼は仮面を外し、答えた。

その姿に、プレシアは今まで以上に驚愕した。銀灰の姿は青年に等しい体つきから一変、フェイト程度の身長まで縮んだのだ。……まだ、子ども。それが最高位の魔法使い『忘却の魔法使い』の正体だった。

「貴方、その姿は……！」

「まあ、真実の姿を見せたのは魔法使い以外で貴方が初めてですから、信じられないのはわかりますが、これでも六歳で高位の魔導師に登りつめたんですよ」

「なるほど。その話は私も聞いたことがあるわ。三人の神童が僅か六歳で魔導師まで登りつめた。その後、行方不明になったと言うのもね」

「行方不明ね。まあ良いですが。で、俺に訊きたいことはそんなことじゃないでしょ？」

プレシアと今の銀灰には身長差があるも、しかし銀灰の威圧感は大にも勝るほど。

姿は子どもだが、その顔はやはり白の衣のフードで判別出来ない。だが、男の子であることは確かだ。そして、髪は銀だとも見え隠れするフード越しからわかる。

「そうね。私が知りたいことはそんなものではないわ。私が貴方に訊きたいことはひとつよ。貴方が死者蘇生の魔法を知っているかどうか」

「死者蘇生……ですか。その先に隠された何かに関係があることですね？」

「……………」  
「無言は肯定ととらせていただきますよ。まあ、正直に言えば死者蘇生の魔法なんて存在しません。幻想の産物ですね」

銀灰はプレシアが求めし魔法をそう簡単に下した。そして、更に続く。

「まあ、貴女が死者蘇生を求め、アルハザードの地を探しているようですが、確かにアルハザードは存在しますよ。ですが、その地に辿り着いたところで、それは助かりはしない」

玉座の先を見据え、彼の言葉はどこまでも機械的で淡々と述べていく。対して、プレシアはその言葉に激怒した。

「そんな、そんな筈は　！！」  
「それが世界かみのシステムです。人は一度死ねば、二度と同じ生を受けて屍から蘇ったりはしない。この意味を理解してください。……例外はありますけどね」

銀灰はそう言って、プレシアを横切る。その中にはひとつの謎を残して。

プレシアは泣き崩れた。自分がやって来たことが無駄だと。魔法を司る、最高位の魔法使いにすら……希望を打ち砕かれた。

「しかし、貴女にはまだ選択肢がある。ひとつはかの少女と第二の生を謳歌すること。ひとつはこの事件を続行するか。その先にある結果は彼女、貴女の二人目の娘の行く末を左右するものとなるでしょう」

「だけど私は……私はある子あの子を娘なんて思ったことはないわ。あの日以来、あの子は人形よ」

銀灰は未来を見据えるよう言葉を掛けるが、プレシアは自分を慕う娘をそうはき捨てた。銀灰は溜め息を吐く。

「はあ。貴女も頑固ですね。まあ、一度娘を失えばそうなるのは当たり前前か」

「まだ、年端も行かない子どもが経験したようなことを言わないで」

「……失礼。ですが俺も一応この年で、貴女同様の苦痛は味わってるつもりです。目の前で実の妹を俺は亡くしてますからね」

「っ……」

プレシアの目は、驚愕した。その年でひとつの死を経験している彼を。

「驚きました？ 当時はまだ魔導師の位にいましたが実力はあったんですよ。だけど、あっさり妹は殺されましたよ」

「……貴方は悲しくなかったのかしら？」

「悲しかったですよ。……ですけど俺は貴女のように成れなかった。どうしてかわかりますか？」

「人は一度死ねば、二度と同じ生を受けて屍から蘇ったりはしない……だったかしら？」

「はい、そうです。プレシア女史。貴女もわかってるじゃありませんか」

「……ええ、そうね。わかってたわ、わかってたのよ。だけど認められなかった……ですね」

銀灰の言葉にプレシアは小さく頷く。銀灰は仮面を被り、再び少年から青年の姿へと変えた。

「あとは貴女の答えを教えてください。答えによっては俺が貴女に奇跡を見せてあげますよ」

銀灰はそう言い残し、庭園から姿を消した。プレシアは崩れ落ち、眩いた。

「……アリシア。私はどうしたら良いのかしら」

咳き込むと唇から一滴の赤い血が流れた。

## 第18話「時の庭園」(後書き)

はい今回はプレシアと銀灰の邂逅をメインに執筆しましたが如何でしたでしょうか？

そして、銀灰に新たな謎が多数現れましたね。

さらに、魔法使いとしての本領発揮。これから第一章も佳境に入ります。

どんなエンディングを迎えるかはまだ決まっていませんが。結局アンケートは一通しか来ませんでしたからね。さて、どうしよう？

伏線はたくさんあるのでどのルートを進んでも当たり障りはないと思いますが。

では、今回はこの辺で。次回に続きます

第19話「会話と傍観……しかし、介入を」（前書き）

プレシアとの邂逅を果たしてすぐ、ジュエルシードの反応を感知した銀灰。

反応を追うと、そこには二人の魔導師が封印を開始していた。

最初は敵同士だった。

けれど今は共に戦う仲間。それは介入を許さない、とても綺麗な共同作業だった。

そして銀灰は、二人の作業を傍観しながらある人物と会話を始める。

始祖竜・エーデルワイス

## 第19話「会話と傍観……しかし、介入を」

プレシアとの邂逅を果たして間もなく、俺はジュエルシードの反応を感知しその場へ訪れた。

それは海上。

フェイト・テストロッサが儀式魔法で大きな一撃をジュエルシードに与えたようで、巨大な竜巻が発生していた。

そこには白の魔導服に身を包んだ、高町なのはとユーノ・スクライア、アルフもいる。フェイトの魔力は風前の灯火と言っても良いほど、葛藤していたようだ。

しかし、なのはがささず魔力を分け、二人でジュエルシードの封印に取り掛かっている

「流石に俺の出番はないかな？」

(……エーデルワイス。聞こえるか?)

なのはとフェイトの活躍を傍観しつつ、とある者に念話でコンタクトをとる。

(どうかしましたか、旦那様?)

(ツツコミ所が色々あるけど、今回は目を瞑ろう。お前に訊きたいことがある)

(連れないうすね、貴方は。レディの前で目を瞑る。即ちキ……申し訳ございません!? 棄てないで……!!)

(次はないと思え)

(はい。……それでその件ですが、余裕ですね。私を誰とお思いですか?)

(ふっ。確かに、そうだったな。エーデルワイスに出来ないことは死者の蘇生ぐらいだったと言うことを忘れていたよ)

(酷いですね、それは。我が主ながら。……ですが、死者の蘇生など死者への冒瀆です。まあ、死を迎えていなければどんな状態であろうと治せてしまいますがね、私は )  
(確かに。俺もそのためにこの力を手に入れたんだかな……)

銀灰は左手を握り締め、なのはたちがジュエルシードの暴走を止めた瞬間を見据えた。

(主が私たちを見つける前に起きた、あの事件……ですよね)

(ああ。俺が力に過信し過ぎていた時期だ。あまつさえ、どこまでも退屈な人生を謳歌していた時期だったね)

(退屈、ですか？ 渴きの間違いでは )

(どうかな？ まあ、過去は過去。過ぎ去ったことを振り返ってみれば苦痛しか残らないさ)

(……そうですね。では、私はもう少し寝かせてもらいますよ。次は、その日が来ればまたお会いしましょう)

(そうだな。おやすみ、エーデルワイス。……始祖竜の姫君)

始祖竜。

それは神に並び立つたとされる最強種であり、幻想に現れる竜種。その中でも白の名を継承する竜種は王族の他にはいない。ただし、白竜は全て、古代に絶滅したと伝承では語られている……。

エーデルワイスとの会話を終えた銀灰は、手持ち無沙汰にうんざりしつつ、なのはとフェイトの会話を見据えていた。

しかし、その際にひとつの魔力反応をキャッチしていた。

「まだ、判断出来ないけど来ますか……プレシア・テストロッサ」

その魔力は遂さつき見知った、プレシアの魔力反応だった。

私はフェイトちゃんと共に、海上に現れたジュエルシードの封印を終えた。

フェイトちゃんは一刻も早く、ジュエルシードを持ち帰りたいかもしれないけど、私の話を聞いて欲しかった。

だから、私は私の思いをフェイトちゃんに伝えた。今この場に居ないけど、銀灰さんは私を後押ししてくれた。

私はその後押しのおかげでようやく、フェイトちゃんと対等の意味で、向き合えたような気がする。

フェイトちゃんが私の言葉を聞いてくれて返答を待つ、その刹那、空から巨大な紫の雷が降り注いだの。

高町なのは、と言ったかな？

いつも私を心配そうに見る、私の他にいる魔導師。最初は新米魔導師だったけど、今ではもう立派な魔導師に成長している。

私もうかうかしてられなくなった。母さんが求めている、ジュエルシードを封印する中で……。

だけど、彼女は私と何度も相対して来る中、いつも私の名前を呼

んで、何かを訴えかけて来た。

そして今日、彼女は私と『友だちになりたい』と言ってくれた。友だち……。どういふことかはわからないけど、とても心が満たされる。

どうしてだろう。体がポカポカして温かい。私は。

その時、私がよく知る母さんの魔力反応とともに雷が空から降り注いだ。

「空気を読まないね。いや、わからなかったってとこかな。第四式  
アブソルティ・ガーデン  
『絶対庭園』」

無意識下に息を吸うかのように、一呼吸でジュエルシードの前方に向けて、俺の中で最強と自負しても良い、絶対的な防御魔法、守護結界を張る。そして、同時に懸念していたことが脳裏を走る。

無詠唱・詠唱破棄ばかりに頼る毎日だったからな。そろそろ腕が逝かれるかもしれない……。

そう思った時、両腕から血が噴出する。肉体に負荷をかけ過ぎたツケが、今になって現れたようだ。

なのはとフェイトは突然介入して来た俺の姿に、驚いたのもあるだろうが、両腕から噴出した赤い血が、袖を真っ赤に染め上げたのには血の気が引いたようで、真っ青になっていた。

「なのは、フェイト。君らには悪いがこのジュエルシードは預かっておく。フェイト。……じゃあね」

紫の雷が消失すると同時に、結界を解きジュエルシードに向かう。途中、クロノ執務官が立ち塞がったが、手に持つジュエルシードを瞬時に奪い、残りのジュエルシードもかつさらった。

その際、フェイトとアルフもいち早く追いかけて来るが、それも計算の内だ。

二人が此処で捕まってもらっては色々面倒だからね。フェイトの名を呼んだ時、プレシアの名を出したんだけどさ。

「さて、此処まで来たら良いかな？」

「何が良いんですか？」

「あら、追いついかれちゃった？」

「スピードを抑えてたのはバレバレだよ」

手厳しいですね、アルフさん。

それにフェイトさん。俺の血まみれの手からジュエルシードを奪うか、奪うまいか考えるのは止めないかな？

「まあ、そんなことより腕は大丈夫なのかい？」

「これは血糊って言ったら、信じてくれるかな、アルフさん、フェイトさん？」

れ  
はい。そんなジト目で見ないでください。冷や汗ものですよ、そ

「嘘はダメだよ」

「フェイトに言われるとは世も末だね」

「どづいうことですか！？ 遠い目をしないでください！！」

フェイト。

最近、感情豊かになって父さん嬉しいよ。……父さんでも何でもないけどね、俺は。俺もキャラ変わってるな、あれ？

「で、何時の間に俺の左腕に引っ付いたのかな？ 血が付いちゃうから離れて」

「いや、です。ジュエルシードを」

「うーん。俺は渡す気ないよ。ひとつ、試したいことがあるからね」「試したいこと？」

「まあね」

「でも つ!?!」

俺は一瞬の隙を突き、フェイトの束縛を瞬時に解いて距離を取った。

「まだまだ甘いな、フェイト君。さらば」

血まみれだった衣服を洗浄し、腕の簡単な処置を一瞬で終えた俺は、仮面越しからフェイトに笑いかけた。

そして、悪役の如く、フェイトとアルフの前から姿を消失した。

第19話「会話と傍観……しかし、介入を」（後書き）

「さて、今回も始まります、後書きラジオ！」

「いや、初めてでしょ!？」

「ふふ、今日の私はテンションが高いのだよ、ユウヤ」

「はあ。そうですか。どうでも良いけど僕の出番が最近ないのは何故だ!？」

「ぶつちゃけ、寝てばかりの昼寝王子は動きがないから降格？」

「何でだよ!!」

「銀灰の方が最近カツコイいし、主人公オーラの桁が違うだろ？」

「ぐっ……」

「だけど、次回は久しぶりにユウヤ、君の登場シーンだ」

「嬉しいけど、嬉しくない」

「……手紙？ ユウヤ様を泣かした愚かな翔様には天誅を      メイ  
ド一同。ヤバくない？」

「皆様。今日こそ、あの作者に制裁を」

「「制裁を!!」」

「悪寒、だと？ では次回に続きます」

今回のみラジオをお送りしました。

因みにこれは全てフィクションですうー。

本当の後書き

今回も銀灰の活躍がメインですが、不思議な会話がありましたね。  
彼女は始祖竜と呼ばれるそうですが、一体

そして、クライマックスに近づくに連れ、新キャラ増えて来ましたね。

はて？ どうしてこうなった!？

今回は日常の1コマをどうぞ!!

第20話「束の間の休息と疑惑と」(前書き)

久しぶりに学校に復学する高町なのは。

今まで非日常を払拭する最後を前にした日常だという今日、ひとりの男の子に疑惑を抱く。

その両腕の包帯はどうしたの？

## 第20話「束の間の休息と疑惑と」

久しぶりに学校に復学する私こと高町なのは、夕暮れ時に神城ユウヤ君を拉致もとい捕獲しています。

「で、何？ 僕の昼寝を邪魔したんだ。面倒だけど一応は話を聞こう」

どうやらユウヤ君は、まだ寝たりないようです。不機嫌ではないけど目が据わってます。

すずかちゃんの話では、この時のユウヤ君は半覚醒状態だとか。だけど私はそんなことには恐れはしません。

「ユウヤ君。その両腕の包帯はどうしたの？」

私は昨日起こった、銀灰さんが怪我したと同じ場所に包帯を巻く、ユウヤ君に訊ねました。

朝。

久しぶりに学校に来るとアリサちゃんとすずかちゃんに驚かれました。

どうやら、今日私に来ると思っていなかったようです。

「なのはちゃん、久しぶり」

「うん。久しぶりすずかちゃん」

「もう用事は終わったの？」

「まだ、ね。今日はどうにか来れたんだ」

アリサちゃんは私の言葉を聞いて、残念そうに「そう……」とか細く漏らしました。何だかんだ言って、アリサちゃんもとっても優しい女の子なんです。

すると、ある席に私は目が行きました。

「あれ？ ヌウヤ君はお休みのなの？」

「うん。昨日は無断で休んでたみたいなんだ。今日は……あっ！  
ヌウヤ君……！」

すずかちゃんが休んでたと教えてくれている時に、鞆を持ったユウヤ君が教室に入ってきました。

だけど、その両腕には……包帯が巻かれています。

「よっ。すずかは相変わらずだな。バニングスは敵意剥き出し。そんなに僕が珍しいのか？ ……高町も来たのか。久しぶりだね」

どうも、表情や声に柔らかさを持ったユウヤ君。私が休む前のユウヤ君とは思えないほどの変貌ぶりです。

……私はそれより、両腕に巻かれた包帯が気になりました。昨日、銀灰さんが突如血を流した場所と同じ場所。

私は即座にエイミイさんに通信を送りました。

(エイミイさん。魔法を使える人は姿を変えたり出来ますか？)

(うーん。そうだね。高ランクの魔法罪者にはよく見られる手だよ。あとは潜入捜査の時なんか、変身魔法を使う魔導師は居るからね、

可能だよ)

(どうかしたのかしら、なのはさん?)

私とエイミイさんが会話していると、リンディさんが訊ねてきました。

(えーと。予想みたいなものなのですが、うちのクラスの友だちに、両腕に包帯を巻いた男の子がいるんです)

(それって……)

(はい。私はもしかしたら彼が銀灰さんなんじゃないかな、何て思ってるんです)

(なるほど。確かに銀灰は昨日両腕に大怪我をしているわ。けれど、あの銀灰がそんなあからさまに、自分が銀灰だと目立つ証拠を残すかしら。それにあれだけの魔法を行使するのが、なのはさんと同じ小学生とは到底思えないわ)

(にははは。そう、ですよね。……ですけど、少しでも可能性があるなら当たってみようと思うんです)

(……わかりました。ですけど、慎重にですよ、なのはさん)  
(わかりました)

私はそう言って、アースラとの通信を切った。ユウヤ君は……もう寝てる。

やっぱり放課後しか無理かな? すぐかちゃんならすぐに起こしちゃうけど、うーん。何だろう。あの寝顔を見てたら起こすのは……

……だけど、授業は

……にゃああー!!

その日の午前中は、ずっとユウヤのことを考えていたのはだった。

そして、予定通りなのは放課後、ユウヤと二人きりになることに成功した。

「ユウヤ君。その両腕の包帯はどうしたの？」

「この包帯？ 何だよ藪から棒に。高町が気にすることじゃないんだけど？」

「違うよ。私は確かに気になってるけど、ユウヤ君が気にしてるよ。うなことじゃないよ。……それじゃあ質問を変えようか。ユウヤ君はどうして昨日休んだの？」

「昨日？ ああ、すずかに聞いたのか。昨日は仮病だ。学校で授業を受けるより、家でゴロゴロ昼寝してた方が楽だからね」

私の質問にすぐさま答えを出して来るユウヤ君。どれも信憑性は高いけど、まだ、信じられるほどの確証もない。

「ならその両腕の怪我は？ 一昨日まではなかったって聞いたよ」

「これは……」

「包丁事件ですね」

「えっ……」

突然、疾風が吹き抜けたと思うとユウヤ君の前に、何時もユウヤ君というメイドさん、フオロウさんが現れた。

「なのは様。心拍数が高いですが、如何なされましたか？」

「い、いえ。それで包丁事件って……」

「そうでしたね。話が逸れるところでした。包丁事件とは昨日の晩、私の妹……妹と言っても従が付きませんが。その妹があるうことか、ユウヤ様の前で包丁を数本落としてしまい、両腕に二本も ですが、跡が残るような傷ではありませんでしたので、包帯を現在巻いている訳です」

フォロウさんが簡潔丁寧にユウヤ君の包帯について話してくれました。

「だけど、そんな偶然

「なのは様」

「は、はい！」

「偶然などあの子にとっては必然も同じ。あの子は天性のドジっ子です。そして、天然属性、災害属性まで持ち合えます。如何なる場所であろうと、厄災を招きますよ、ファイは」

フォロウさん、勢いよくそうまくし立てました。何時もはそんなにないのに口調だけは本気です。

相変わらず、表情の変化には乏しいですけど……。フォロウさんが笑えば 墮ちるよ。

「あら、もう下校時間ですね。なのは様、お早く戻られては如何ですか？」

「あっ!？」

時刻を見ると17時を指していた。

「もうこんな時間！ ユウヤ君。早く包帯外れると良いね」

「ああ。高町こそ、早く復学しろよ。すずかたちが困ってるからね」

「にやはは。ユウヤ君はすずかちゃんのことを良く思ってるんだね」

「そう見えるなら早く復学しろ。……その時には」  
「ん？ それじゃあね、ユウヤ君」  
「じゃあね」

ユウヤ君が小さく言葉を漏らしたようだけど、聞き取れなかった。もう一度聞きたかったけど時間がなかったから、私は聞き返さずユウヤ君に一言行って家への帰路についた。

「行つたな？」

「はい。なのは様の気配は離れて行きます」

僕は高町が去ったことにひと息吐いた。あー、疲れた。

「フォロウ。良いタイミングで登場したが、狙ってたか？」

「いいえ、まさか」

「怪しい奴だ」

「こほん。ですが良いのですか？」

「何がだ？」

「疑いは晴れましたが、どこかの誰かは疑念を残した筈です」

「その程度は捨て置け。僕は気にしてないからね。どちらにせよ、隠蔽はフォロウの得意分野でしょ？」

フォロウにそう訊ねるとフォロウは頷いた。僕はそれを見て、微笑む。

「どこまでも優秀だよね、フォロウの能力って」  
「これもメイドの能力のひとつですから」

フォロウはそう呟き、人差し指を唇で指した。メイドさんの能力って言うけど、普通有り得ないよね。まあ、気にしてみれば負けなんだろう。

フォロウと出会った時からそうだし。  
ほんの少し過去に浸っていると、フォロウから肩を叩かれる。

「どうしたの?」

「ユウヤ様。現在は退屈ひまですか?」

「……退屈じゃないよ。今はとても充実してる。けど、この件をそう表すのは悪いね」

「ですが、それはそれです。内心では別のことを思っているのですよ?」

フォロウは僕の目を見て言い切った。

よく見てるよ、フォロウ。僕の内面を……。けど。

「それは秘密だよ。さあ、帰ろうフォロウ」

僕はそう言って、フォロウの手を取り、帰路についた。

フォロウ、君は僕を良く見てるよ。流石だね、フォロウ。そして以前、僕の一部を見た忍さんも。……。けどね。僕にはそれが

眩しすぎる

## 第20話「束の間の休息と疑惑と」（後書き）

後書きです！

はい。今回は束の間の休息をお送りしました。ですが、執筆していて原作とかなり話数が離れてるなど、今更ながら思った今日この頃です。

久しぶりのユウヤ君ですが、やはりと言うか謎が多い主人公ですね。いつになくシリアスな最後だと思いますが、如何でしたでしょうか？

また、なのはの機敏の鋭さには感服あるのみです。なかなか推理でしたが、メイドさんの前には完敗でした。

そして、メイドさんがどこから現れたか、それは秘密です

更に『忘却の日記』なるメイドさんが執筆する小説を書くかどうかと思ってます。如何でしょうか？

では、次回に続きます。

次回は遂に戦乙女たちの決戦です

第21話「星は天に、雷は地に」(前書き)

最終決戦。

遂になのはとフェイトの闘いに終止符が打たれる。勝利の女神はどちらに微笑むのか……。銀灰は蒼空を見上げ、二人の闘いを見守る。

これが私の全力全開！

## 第21話「星は天に、雷は地に」

さあさあ始まりました、戦乙女の決戦。遂にジュエルシードを賭けた決戦は終わりを迎えようとしています。

「実況／解説は『忘却の魔法使い』こと銀灰がお送りしていきます！」

「あんだ、何馬鹿なことしてるのよ！」

「アルフ。俺は今猛烈にフィーバーしている。はっはは！」

「えーと、完全に壊れてますね……」

銀灰のトチ狂った叫びにアルフと人間の姿をしたユーノは遠い目をしていた。

彼らがいる場所は海鳴公園上空から海上上空。広いフィールドだった。

天空には白と黒の魔導師が相対する。

「戦闘狂としての力が……左腕が疼く」

「何時の設定だ！」

「一応俺の立ち位置は中立だから何もしないけどね。……モタモタしてたら勢いで」

「はた迷惑な中立だね、あんたは！」

「……はあ。場を和ませようと一生懸命キャラまで変えたのに、この体たらく。二人ともツツコミはいらないからボケてよ？」

「ボケてるあんだが言うなッ！！」

「玉稿頂きました！ さて、冗談はこの辺で」

「冗談が過ぎる(よ)!!」

「なかなか息が合ってるね、お二人は。……そう言えばアルフ？  
どうして君はなのはの側に居たんだ？」

アルフは銀灰の言葉に押し黙る。

だが銀灰は敢えてそれ以上深追いをせず、蒼空を見上げた。

「うーん。まあ、いいや。……アルフ、予想はついてるから無理には聞かないけどさ。何かあれば助けを求めれば良い。俺でもなのはやユーノにでも」

「あんた……」

「しかし、俺だって魔法使いを除けばただの人間だ。完全な人間ではないからな。その辺りは心の片隅に置いておけ。……だが、俺の周りぐらいは察してるつもりだ。地球の裏側や次元世界の端であるうとすぐに駆けつけようじゃないか」

「……あははっ。次元世界の端って、笑えない冗談だよ。それこそ桁外れつてもんだよ。どんな魔法使いだって……だけど、ありがとうね、銀灰」

「ああ」

アルフは、ずっと痼りのようなものに悩まされていた。フェイトの件、ジュエルシードの件、プレシアの件……そして、なのはとの件。いろいろと頭を悩まされていた。しかし、銀灰の発言にアルフは吹っ切れたように、笑顔を取り戻す。

肩の荷が少し軽くなったのか、この戦いが終わったら、銀灰に今までのことを相談しようと思った。

銀灰はそれらを含め、自分に頷いてくれたように思えた。

アルフから視線を変え、銀灰は仮面越しにある一点を覗く。

まだ蒼天だと言うのに暴れてるな。……やり過ぎもほどほどに、  
ってね。

遙か昔に起こした光景と照らし合わせ、内心で銀灰は呟いた。

「さあ、今日はこの事件に終止符を打つ、最初で最後の戦乙女たちの戦場。……どこまで育ったか観戦させて頂こう」

ひとり蒼空を見上げて宣告した。

天上では空前絶後の魔法合戦が行われ、星と雷が交錯しあう。

フェイトが攻めれば、なのはが防御しつつ攻めていく。どちらか  
と言うと今まで有利に戦闘を運んでいたフェイトが攻め急いでいる。  
観察を終えた銀灰は二人の戦闘を互角と見た。ユーノとアルフも  
そう見ているだろう。だが、先にフェイトは大きな一撃を仕掛けた。

「はあああッ！！」

フェイトはバルディッシュをサイスフォーム鎌に変え、魔力刃による一撃を与えるが、堅い桜色の防御魔法に阻まれた。

刃と盾が均衡しあう中、白い子は背後から残っていた桜色の魔力弾を放ってきた。だけど、私もその程度じゃ墜ちはしない。

背後から襲いくる魔力弾を防御魔法を張って防ぐ。

刹那、白い子に視線を戻したけど彼女は消えていた。周囲を見渡すが見つからない。

(いない? 一体どこに……)

《Flash Move》

少し遅れて頭上からデバイスの声が響く。見上げた先には突進してくる、あの子が迫っていた。

「せえええいッ!」

避けることは、防御魔法を張るのも間に合わない。その時の私はとっさに、白い子の打撃を防ぐためバルディッシュを盾にする。

衝突により魔力爆発が起こる。

それを好機と爆煙の中を一直線に進み、再びバルディッシュを鎌サイスのまま、一閃。しかし、その一撃もリボンを掠る程度。だけど、これで良い。

あの子が逃げた先には予め設置していた砲台フォトン・スライアがある。

《Fire》

バルディッシュの宣告とともにフォトンランサーの雨が少女を襲う。

しかし、あの子はそれを桜色の盾で懸命に防ぐ。私はそれに下を巻く。

(初めて会ったときは、魔力が強いだけの素人だった。なのに、今はもう違う。速くて強い。迷っていたら、やられる!)

私は彼女の魔法の素質を過小評価していた。銀灰ならあの程度で

は足りないけど、彼女なら墜ちると。  
改めて、彼女は私のライバルだと認識し直した。彼女は強い。  
だけど、私は負けられない。母さんのためにも、絶対に  
だからこそ、私が持つ全力。私が使える最強の魔法を使用するこ  
とを決意する。

「ん？ あれは」

「ライトニングバインド！？ まずい、フェイトは本気だ！！」

フェイトの周囲に雷を纏った砲台が38フォトン・スフィア基生成されている。

同時にレイジングハートを構えるなのは。

しかし、その刹那、四肢を環状のリングに捕まり身動きが封じら  
れた。

アルフはその光景に吠える。あれは危険だと。それにユーノはな  
のはのサポートに移ろうとした。

だが、銀灰はそれに首を横に振る。

「止めておけ。なのはのことだ。どうせ……『だめええっ！！』」

（アルフさんもユーノ君も、銀灰さんも手を出さないで！ これは  
私とフェイトちゃんの全力全開の一騎打ちなんだから！！）

「……ほらな。だから止めておけ。手出しは無用だ。俺も傍観に徹  
するからな」

なのはの叫びと念話の言葉に当然と傍観に徹する銀灰。屋外で胡座を掻く。

（でもフェイトのそれは本当にまずいんだよ！）

「大丈夫、平気ー！」

アルフはそれでもなのはに訴えるが、なのはの目に恐れはなく、邪魔をしないで欲しいと一喝する。

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかかれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル」

フェイトは長い詠唱を終え、バルディッシュをなのはに向けた。  
雷を纏った砲台に魔力が収束する。  
フォトン・スファイア

「フォトンランサー・ファンランクスシフト。撃ち碎け、ファイアー！！」

腕を振り振り下ろすとともに指を向けた。その号令を合図に38基の雷の矢が連続して無数に放たれた。爆煙がなのはを覆う。

雷の矢を放ち終え、新たにひとつ砲台を生成する。フォトン・スファイアしかし、今の一撃の制御にかなりの体力を使い肩で息を吸う。

爆煙が晴れた先にはダメージを抑えきれたほぼ無傷といったなのはが浮いていた。

（嘘！？ あれだけの射撃を受けてダメージが……）

フェイトは目を見開く。

しかし、驚いている隙はない。

「痛ったあ。……撃ち終わるとバインドも解けるんだね」

そう言っつて、レイジングハートを砲撃モードに変更し向ける。

「今度はこっちの」《Divine》

「番だよ！」《Buster》

桜色の魔力が杖の先端に収束され、なのはの十八番、収束された砲撃が放たれる。フェイトは収束したばかりの新しいフォトンランサーを投げ放つが、圧倒的な魔力に難なく飲み込まれた。

私は咄嗟に障壁を張り、防御に全力を注ぐ。

「（直撃！ でも耐え切る。あの子だつて耐えたんだ）……っ、うぐっ！」

身体を守るバリアジャケットが魔力の風圧で切り裂かれる。

「ああ！！！」

砲撃がようやく終わり、肩で息を整える。フェイトはもう限界を越えていた。

……威力がハンパじゃない。

銀灰が持つ収束魔法に劣るかもしれないけど、殆ど溜めもしないでこの威力。

けれど、私はあの砲撃を耐えきった。あの子も私もボロボロだ。もう何も

私はそう思っつて上空に浮かぶ彼女を見上げた。しかし、その思い

は打ち碎かれる。

「受けてみて、ディバインバスターのバリエーション」

その言葉と共に、桜色の魔法陣が展開。魔法陣には今まで使われてきた、空中に残る魔力残滓が内側に集まっていく。

それは星。桜色の星の光が収束していく。私はその光景に目を見張った。

残る力で何とかしようとしたが、今度は彼女のバインドが私の四肢を捕らえた。

「バインド!？」

外れない、外せない。 堅い。

これはまずい。あんなのを受けたら……確実に墜ちる!!

「これが私の全力全開!」

膨らみ続けた桜色の魔力は銀灰が収束した魔法と同程度、それよりさらに収束した魔力の球体を作り上げている。

「スターライト・ブレイカーー!!」

「う、うわあああっ!!!」

なのはから巨大な収束した桜色の閃光が放たれる。

私は叫びと共に複数の障壁を天上に生成していく。だけど、桜色の閃光はそれすら紙切れ程度と思えてしまう程の威力で打ち破っていく。

最後の一枚。そこで桜色の閃光は均衡し合うが罅が入っていく。

“パリーン”

甲高い音とともに最後の障壁は粉々に割れ、桜色の閃光は私を飲み込んだ。私はその一撃に墜ちる。

「フェイトの負けか……」

蒼天を見上げ呟く銀灰。その呟きと共に空間に溶け込んだ。刹那、フェイトの落下地点に現れ、銀の魔法陣を落下地点に展開し、フェイトを落下の衝撃から和らげキヤツチする。

一方、スターライトブレイカーを撃つたのはを見据えると、息が絶え絶えながらフェイトの安否が気になり急いで駆けつけてきた。その姿を見た俺は……やったのは君だけだね、と内心苦笑した。

「フェイトちゃん！」

「気絶してるだけだから心配はないよ。とりあえず……」

「え？ うわっ！？」

俺はフェイトをなのはに預け天空を翔ける。なのはとフェイトの頭上で蒼空を見上げた。

「っ、ん」

小さな呻きと共にフェイトはゆっくりと瞼を開く。どうやら気が付いたようだ。

「あ、気付いたフェイトちゃん？ ごめんね、大丈夫？」

「…うん」

なのはが心配して声をかけると、フェイトは頷いた。……意識はあるな。

俺は蒼空を見上げつつ、大事はなく安堵した。過保護になったな、俺も

「私の勝ち、だよな」

「うん、みたいだね」

なのはの小さな微笑みと確認を取ると、フェイトは少し辛そうに負けを認める。

《Put Out》

フェイトが負けを認めると、バルディッシュは同時にジュエルシードを出した。

「フェイトちゃん飛べる？」

そう言つと静かになのはから離れ、俺を見上げた。どうした？、と言おうとした時、空が荒れ始める。

「きたか」

銀灰は暗闇に変わる空を見上げ呟いた。空は暗雲に変わり、紫電が踊る。

その光景を見据えながら銀灰は詠う。

「全ての式を解くもの。それは神々が残した奇跡すら解く。全ての能力は我が前に回帰し、其は十にして全を識<sup>し</sup>る者なり。」 第十式

『オウル・ロスト・マジック  
全能回帰』」

銀灰の魔力が広がり天上を覆う。空から降り注ぐ、紫の雷は銀灰の魔力に瞬時に払拭され消失した。再び蒼天は広がる。

なのは、フェイト、ユーノ、アルフは声を出せず。……アースラからその映像を見た、クロノ、エイミィ、リンディですらその光景に見入り、目を見開いた。

「さて、貴女の答えを聞かせて頂こうか。……プレシア・テストアツサ」

銀灰は何事もなかったように空間転移を発動し、空から消えた

## 第21話「星は天に、雷は地に」(後書き)

さて、後書きです！

その前に遅れてすみません。12月の終わり頃に企画されている短編の構想を練ってましてこちらが手付かずになってました。

あとはネタの整理とか今回の話の区切りをどこまでにするかと悩み、ようやくです。

そして今回、遂に雷光が……。また、無印と劇場版(ほんの一部)をミックスさせてみました。変になってたらすみません。

さらに、銀灰の新魔法登場！

ここは庭園だろうと思われた方がいたら拳手を願います。

実際、この魔法を使った理由は特にないのですがある理由から登場させました。

次回その謎がわかるかと思えます。と言っても次回は短いと私は思ってますが。

また、少し原作から離れますしね。では次回をお楽しみに

第22話「光と闇の狭間で……」（前書き）

銀灰はプレシアに答えを聞くために時の庭園に向かった。

そして、プレシアの答えは。その答えを聞いた銀灰は。遂に最終決戦の幕が上がる

私の答えは……

## 第22話「光と闇の狭間で……」

時の庭園に訪れた銀灰。

彼はプレシア・テストロツサがいる玉座へ向かう。……その時。

「……っ！？ 早速来たか管理局さん。俺より早いってのは気になるけど仕方ない」

その途中、複数の魔力反応を察知する。溜め息を吐き、銀灰は魔力を脚に流して身体能力を底上げした。

刹那、彼は回廊から姿を消した。

時の庭園の最深部。プレシアの眼前には小隊ほどの武装局員が広がる。

何か言っているようだけど、私の意識はつい先ほどの魔法で鮮明ではない。

だけど、どうしてかしら……。何時もより体が楽だわ。あの銀灰の魔法によって私が持つ最大魔法すら打ち消されたと言うのにその反動がない。一体……。

私が身体の状態に不思議を思っていると、武装局員は玉座の裏に近付いた。私は焦りを覚えた。そこには

「貴様等は邪魔だよ。幻想の海。もしくは檻で少し眠っててね」

聞き覚えがある声が部屋を埋め尽くす。武装局員がその先に振り返る直前。

「第十一式『忘却の檻』」  
オブリオ・ガクッピア

銀の檻が武装局員を困うと弾け、銀の粒子が雪景色のように舞う。同時に全ての局員が地に倒れ伏した。全ての局員は吐息を立てて眠っている。

「さて。邪魔者は居なくなりましたし。アースラからは此方は見えません。……転移も出来ませんよ。これから此处は俺と貴女の独壇場です」

「……その、ようね。何時の間にか世界から隔離されてるわ」  
「……流石大魔導師。わかりますか。……では以前の返答をお聞かせ願いますか？」

銀灰はそう言って仮面を取ると、子ども特有の笑顔を見せた。

「……流石大魔導師。わかりますか。……では以前の返答をお聞かせ願いますか？」

俺はプレシア女史に笑顔で対応する。勿論、白面は外してだ。因みに容姿は青年の姿である。

子どもの姿でも良いが、今回はプレシア女史のこれからを見定めるための場だ。やはり、真の姿では……。

一拍空けてプレシア女史は口を開く。

「返答、ね……」

「はい。返答です」

プレシア女史の瞳を捉える。

まだ迷いは見えるが、彼女は二択の答えからひとつを選んでいる。だが、彼女にはまだ迷いがある。フェイト、そして、もうひとりの少女。彼女にとって両者は……。

その時、彼女の口が再び開いた。

私の答えは……

彼女は選んだ。

俺の考えていた予想通りの答えを。

「……そうですか。貴女はそれを選びましたか。貴女らしいですね」「ええ。私にはそれしかないの。その答えしか。後悔はないわ」「後悔はない、ですか。……わかりました。なら俺はそれに沿った行動に移ります。ただし、俺もその案に少し手を加えさせて頂きますがね」

俺はプレシア女史に笑顔でそう言った。

ベルソナ白面を被り、プレシアに背を向ける。プレシアは俺の言葉に何か言おうとしたが、遮る。

「俺は俺の動きたいように動きますよ」

俺はそう言って最深部から姿を消した。さて、準備を始めよう

……彼女たちの明日のために

第22話「光と闇の狭間で……」（後書き）

後書きです。

宣言通り今回は短いお話になりました。

次回の更新はこれよりかなり長くなると思います。

では、敢えて今回は何も残しません。

次回を楽しみにしてして下さい

第23話「希望を胸に……」（前書き）

銀灰とプレシアが邂逅している頃、なのはたちはアースラに呼ばれていた。

そして、アースラに突如通信が流れた。それは

……私は何時も気付くのが遅いのね。だけど、私は

### 第23話「希望を胸に……」

私はフェイトちゃんとの闘いに勝った。

だけど、勝敗が決したのも束の間、空から紫電がフェイトちゃん目掛けて落ちました。その時、銀灰さんが不思議な魔法を使ってその紫電を打ち消しました。

あれは一体……。

そう思った時には私たちの前から銀灰さんは消えていました。唐突に消えるのはいつものことだけど、どこに

フェイトちゃんに視線を移すと、やっぱり私と同じように不思議に思っていました。だけど、それ以上に闘いの疲れとあの紫電……確かアレはフェイトちゃんのお母さんの魔法。その魔法にショックを受けて、俯いています。

私は　　どうしたら良いのかな？

そう考えているとリンディさんたちからフェイトちゃんを連れてアースラに来てと言われました。

私はその言葉に従ってアースラからの転移魔法を待ち、フェイトちゃんと共に海上からアースラへ

その頃アースラでは。

「エイミィ。目標は捉えたかい？」

「うん。バツチリ……と言いたいんだけど、銀灰の魔法で攪乱を受けちゃって、危なく座標が特定出来なくなりそうだったけど、どうにか捉えたよ。……艦長の指示通り武装局員のみんなも、プレシア・テストロツサのいる庭園内部に侵入成功」

エイミィはそうクロノに言っつて、指を立てる。そしてすぐさま大型モニターにプレシア・テストロツサと武装局員の対立姿が映った。しかし、武装局員が玉座の背後にある壁に行くとモニターにノイズが入る。

その刹那、モニターには何も映らなくなった。エイミィは驚き、復旧作業に移るが何をしてもモニターは映らない。

モニターは沈黙したままである。

「エイミィ！」

「は、はい！ だけどクロノ君。幾ら調べてもモニターには異常がないんだよ！？」

「異常がない？ どういう……なら武装局員の回収は！」

「それもダメなの。座標先がロツクされてるみたいで  
「なっ！？」

「モニターに異常はない。そして転移も不可。……もしかしたら」

エイミィの慌てふためく。クロノは返ってきた言葉に驚き、リンディは落ち着いて状況を整理する。

そして、あるひとりの姿が鮮明に浮かび上がった。

「銀灰が関わってる？」

「っ！ 艦長……」

「クロノも同じ結論に至ったようね。ですけど、この状況で一体」

リンディが再びこの状況を見極め、銀灰が何をしようとしているのか考えに浸ろうとした時、ブリッジの扉が開く。

扉からなのはユーノが入って来ると、同じくして簡素な服装に手錠をされたフェイトと、それを心配そうに見るラフなスタイルをしているアルフが入ってきた。

なのはも最初はユーノといたが、すぐさまフェイトに駆け寄る。しかし、声を掛け辛く、心配な顔でフェイトの横に並んだ。

「お疲れ様。そして始めましてフェイトさん」

フェイトの姿を見かねたリンディは挨拶をするがフェイトは黙したままである。

その時、モニターが鮮明な色を醸し出した。人影が映る。

エイミイの「復旧しました！」と同時に、モニターには倒れ伏した武装局員たちと、水槽のようなものの横に立つプレシアの姿が映った。

「管理局には繋がってるようね」

プレシアは此方を射抜くかの如く鋭い視線を向けた。

「ふふふ。やっぱりフェイトは捕まってしまったわね。だけど出来損ないしてはよくやってくれたわ。私と私の可愛い娘アリシアのために……」

「アリ……シア？」

プレシアは横にある水槽に眠る少女を愛おしそうに眺める。フェイトはその少女を見て、それがその少女の名だとすぐに気付いた。プレシアは水槽を優しく撫でる。その姿は我が子を撫でるように鮮明に映りだした映像の先には、フェイトそっくりの少女が体を抱いて眠りに就いていた。

「だけど駄目ね。もう時間がない。たったの10個程度のジュエルシードでは失われた都には辿り着けるかどうか……」

彼女は不可思議な言葉とジュエルシードを10個確保していると言った。

「だけど、フェイトさんは確か……。その時、点と点が繋がった。そのジュエルシードは銀灰が奪ったもの。と、なると銀灰がやられた？」

「いや、有り得ない。あの最強にも等しい銀灰が大魔導師に……。もしくは銀灰が彼女に加担している……。」

リンディは思考を巡らせる。しかし、彼女にはもうひとつ懸念した事柄があった。

それは失われた都

「私はアリシアと共に失われた都、アルハザードに旅立つ。そして管理局は疎か、フェイト……貴女は邪魔なのよ」

同時に庭園に複数の魔力反応が発生する。その数は50。更に増えていく。

どの魔力もAランクは軽い。エイミィは更にタイピングを速め、

状況を確認する。

「艦長！ ジュエルシードの魔力が庭園を」

「何ですって!?!」

エイミイの言葉に思考を巡らせていたリンディは驚きの声を上げる。

ジュエルシードが発動し、内封された魔力が庭園に溢れる。このままでは最悪、次元震が地球まで到着すると結果が出た。

刹那、モニターに再びプレシアが映る。彼女は告げる。金色の少女の終わりを。

「フェイト聞いてるかしら?」

「母……さん?」

「……貴女は私にとって操り人形でしかなかったわ。アリシアの代わりとして生んだのに出来損ないだった」

なのははフェイトに向けて告げられるプレシアの言葉に、悲痛な叫びを上げるが尚も彼女は言葉を継ぐ。

「そして、もう貴女はいらぬ。どこになりとも消えなさい! うふふ……そうね、これは。良いことを聞かしてあげるわ、フェイト。私はね……」

艦内に悪寒が走る。これは少女に聞かしてはならないと。だが、通信は切れない。誰かが邪魔をしている。

それはこれから残酷な一言を発する彼女。リンディはなのはに急いでフェイトを此処から連れ出すよう促す。

フェイトは耳を塞ぐ。これ以上聞きたくなかった。これ以上、母さんに

しかし、  
そんな儂い願いすら世界は……。

「私はね。貴女のことが大ッキライだったの」

彼女はフェイトに絶望を与え、通信を切った。それは事切れたテレビのように。そして、フェイトの瞳に生気が失われ、その場に倒れた。

庭園の最深部では続々と武装局員がアースラへと消えていく。そんな中、プレシアは玉座で頬杖をついていた。銀灰はそれを見計らって姿を現す。

「浮かない顔だね？ 君は選んだろう。アリシアを。このまま続行すると……」

「ええ。私はそれを選んだ。あの子はアリシアの代わりとして作った人形。情なんてないわ」

そう言っつて銀灰を睨むプレシア。

銀灰はそんなプレシアを見て、どこから出したのか、椅子とテーブルを召喚し優雅に紅茶を飲む。

「じゃあどうして　　る」

「私が　　る、ですって？」

「……ああ。だが後悔は悪くないことだよ。しかし、此処まで来たんだ。プレシア・テスタロツサとして最後までやり遂げるんだね。俺はやりたいたいように動くけど」

いい加減に手を振って、再び消えようとする銀灰。しかし、プレシアの「待ちなさい！」の言葉で歩みを止める。

「何かな？」

「貴方は何がしたいのかしら？」

「そうですね。俺は……」

銀灰は顎に手を当てひと息吐くと。

奇跡を起こすだけです。希望と言う名の奇跡を……

転移魔法を発動しながら彼は呟くように告げる。プレシアの前に残ったのは銀の粒子と紅茶の匂いだけだった。

「……私は何時も気付くのが遅いのね。だけど、私は　　」

銀灰が残した紅茶をひと口飲み、天蓋を見据えた。

願わくば

銀灰は次元の海で庭園に現れた傀儡を見据える。その光景は圧巻の一言に尽きる。

すると、銀灰の横に二人の女性が現る。ひとりにはドレス姿の銀の髪を伸ばした女性。ひとりは同じ白面ベルソナを被ったくすんだ銀の髪を纏めたメイド服の女性。

このような場所では不釣り合いな女性が現れた。そして、ドレス姿の女性が口を開く。

「私を呼んだと言うことは実行に移すのね？」

「ああ。お前の力を借りたい」

「そう。なら私は貴方に力を貸しましょう。我が力は主と共に」

そう言うくとドレス姿の女性は銀灰の前に一礼し、片膝について銀灰へ宣誓した。

「では私はどうして呼ばれたのでしょうか？ 今回の件はエーデルワイス様のみでも事足りるではありませんか？」

ドレス姿の女性をエーデルワイスと呼ぶ白面ベルソナの女性は、不思議そうに首を傾げる。

「予想はついているのだろうか？」

「ええ。ですからわからないのです。だからこそ、その理由を旦那様のお口からお聞かせ願いたいです」

「なる程。ならそうしよう。お前の力が必要だと」

「……了解致しました、旦那様。私の力と心は貴方のものです。如何様にもお使いくださいませ」

エーデルワイスの横で片膝を着く。

銀灰は二人を見据えて杖を召喚する。その杖は今まで見せていた『レウァティン穢れなき陽光の杖』ではなく、銀灰の色を貴重とした白金の宝珠を先端に持った杖だった。

「さあ、始めよう。彼女たち明日のために。忘却の魔法使いは道化を演じよう」

銀灰は謳う。

一度、杖で空間を突くと二人の女性は消え、二度、杖で空間を突くと銀灰の姿が消失した。残ったのは銀の魔力と城門から見える二種類の魔力光の輝きだけだった。

### 第23話「希望を胸に……」（後書き）

後書きです。

原作と話がまた逸れましたが次回こそ原作に沿います。

いえ、沿わないと。今回までが決戦の禅話と言ったところでしょうか。

そして、第一章完結まで残り話数三話を予定。因みに今回の話は含まずですが。

では次回もお楽しみに

## 第24話「最終楽章」(前書き)

世界は本当に現実的で全てがこぼれ落ちてしまう。……何度だって。  
幾らだって。

世界は人に絶望を送る

## 第24話「最終楽章」

世界は本当に現実的で全てがこぼれ落ちてしまふ。……何度だつて。幾らだつて。

世界は人に絶望を送る

クロノはプレシアがジュエルシード発動と共にブリッジを駆け出した。

それは管理局の義務であり、次元震を止めるためであり、また、ひとりの少女のためにある感情を押し殺して……。

「エイミィ転送を！」

「クロノ君！」

クロノが転送装置に入るとともに、なのはとユーノの二人も現れる。

その瞳には確固たる決意が灯っていた。クロノは何も言わず、エイミィに転送準備を急がせ、時の庭園に四人は転移した。

私はクロノ君たちとフェイトさんのお母さんが居る、時の庭園に転移した。

私は眼下に広がるその光景に驚きを覚えた。城はまるで悪い魔女

さんが住むお城で、空？オーロラ？……クロノ君が言うには次元の海に浮かぶお城、と言った方が正しいらしい。

因みに此処から落ちたら次元の濁流に流されてしまって、違う次元世界か次元の海に一生流され続けるとか。

私はその真実にレイジングハートを握る手が汗ばみました。

「そうそう。その地上に空いた穴は虚数空間と言って魔法は結合しないし、一度落ちたら二度と這い上がってこれないから気を付けてね」

足を着けようとした時にクロノ君が私たちに向けて更なる真実を告げました。

危なく片足が中に入ってしまったところでした。……むう。クロノ君もつと早く教えてくれても良かったのに

私がクロノ君に拗ねていると、刹那、前方から大きな魔力反応が近づいて来るのを感じた。クロノ君も、ユーノ君も警戒する。

その時、巨大な光の柱が天蓋を貫いた。その色彩は黒。そして銀。私たちはその光景に魅入ると光の柱が現れた先に向かった。

「旦那様の言う通りこれはあの子たちの邪魔になりますね。竜種の中でもまさか中位に近い翼竜が転移するとは……旦那様の魔力に惹きつけられました、か」

そこには銀灰さんと同じ白面ベルツナを被った、くすんだ銀の髪を持つメイドさんが舞っていた。

手には黒色の魔力を凝縮した剣のような刀を二刀持ち、翼が生えた二足の竜を尻ぎ払っていた。

左から襲い掛かろうと、右から襲い掛かろうと、背後から襲い掛かろうと……舞はどこまでもリズムを壊すことなく、テンポ良く竜たちを切り裂いていく。

「鬱陶しいですね。永久とこしえに消えなさい」

メイドさんは右手に持った刀を竜の群れに投擲する。それは一匹の翼竜に直撃すると、その翼竜を中心に巨大な銀の柱が広がり天蓋を貫く。周りの竜たちを巻き込んで全てを一掃する。

「私のウォーミングアップには少々足りませんが、有意義な時間は過ごせました。ただ、私に見つかったのは運がありませんでしたね、竜の皆様方」

そう告げると彼女から銀の炎が広がり、四足歩行の竜たちが焼失……触れると共に粒子に還りました。

私はこの時知りませんでした。

この魔法は銀灰さんが使った銀の炎と同じものだった。と

竜たちを一掃したメイドさんは軽くメイド服を叩きます。

しかし、メイド服には埃ひとつ皺すらなく、新調したばかりと言っても良いぐらい綺麗な状態を保っていました。

「君は一体……銀灰の仲間か？」

クロノ君は慎重に言葉を選びメイドさんに声を掛けます。

クロノ君の声を聞いたメイドさんは此方を振り返りました。

顎に右手を当て少し考える素振りを見せ、そして軽く頷くと。

「そうですね。貴方様たちから見ればそうは見えるかも知れませんが、この白面ベルンナは私が作成したものですし」

彼女はそう言ってもう一枚白面ベルンナを取り出す。どこから出したかはわからなかったけど、まさしく白面ベルンナが左手に握られている。

「ですが、私は旦那様に仕えるしがないメイドのひとりです。また、この程度やってやれないことはありませんよ。……そう。メイドの嗜みと言ったところですね」

彼女は仮面の内側で笑みを浮かべる。けれどそれは外側では笑っていない。表情は能面に近い無表情。私はそう思った。

同時にひとりのメイドさんが脳裏に映る。彼女は……。

「では、後は貴方様たちにお任せ致しますね。残りは傀儡たちのみ。木偶の棒ばかりですので……」

「待って！ 貴女は」

「ストップです。貴女はどこかの誰かに私を重ねたようですが私はその誰かとは違いますよ。ですが、私の言葉を鵜呑みにしないその目。良いものをお持ちですね。……貴女は貴女の道を進んでください。それが真実に近づく一歩です」

メイドさんは私にそう告げて、私たちの背後に立ちました。何時も横切ったかはわからない。何も感じなかった。

「私の名は、そうですね。偽名で『灼耀』を名乗らせて頂きましょう。では、貴方様たちに幸福があらんことを……」

メイドさんは私たちにそう言い残し、姿を消した。その去り際はまるでその場に最初から存在しなかった、そんな狸に化かされたような変な感触が肌を掠めた。

クロノ君は偽名を名乗ったメイドさんに憤怒の顔を見せてたけど、直ぐにその感情振り払う。眼前に現れたたくさん傀儡たちに思考を切り替える。

私もその姿に目の前の傀儡に思考を変える。レイジングハートを持ち直す。

だけど、クロノ君が私たちの前に出て「こんな敵に無駄弾は必要ないよ」と言った。その意味が一瞬分からなかったけど、次の行動にその意味が知った。

「スティングガースナイプ！」

デバイスから放出される水色の魔力が鳥のような軌跡を描き、複数の傀儡を破壊していく。

「なのはたちは先に行くんだ。此处は僕が食い止める」

クロノ君はそう言って更に傀儡を破壊していく。私たちはそれに頷き城への道を急いだ。

私は一体、どうすれば良いのかな？

アースラ？と言う艦船の一室で私は呟いた。アルフはあの娘たちを手伝うと言って部屋には私しかない。

「フェイト・テストロッサ。……アリシア・テストロッサ」

アリシア・テストロッサのクローン。

それが私、フェイト・テストロッサの真実。なら私は一体何？

……わからないよ。母さんは私を人形と言った。私の本当の母親じゃない。だけど……。

「ならお前は人形だ」

「っ！！ ……銀灰？」

私が私に問い掛けていると急に銀灰が姿を現した。何時も思うけど……彼は一体。私が悲しい時や迷った時に何時も現れている。

だけど、今彼は私を人形と言った。やっぱり銀灰も母さんと同じなんだ。

「何を泣いてる？」

「……銀灰も私を人形だって言ったからかな」

「そうか。確かに語弊があった。しかし、今のままじゃフェイトは人形だよ」

「えっ？」

彼の姿が急に近くなった。

違う。銀灰が私と同じぐらいの歳の体型に変わった。どうして？

「ふふ。これが俺の。いや、僕の真実の姿だから驚いたかな？ だ

けど、今は僕の話しを聞いて欲しい」

「……うん」

私はまだ信じられないけど頷く。

銀灰は私の頭を撫でながら話しを始めた。

「君はまだ自分から歩き始めていない。未だに母親を頼っている。このままじゃ、ずっと君はプレシアさんの人形のままだよ」  
「歩いていない？」

「うん。君はまだ自分をスタートすらしていない。だから、君の気持ちや考え、思いに従って進んでいけないとね」

彼はそう言っで私の頭を撫でるのを止めた。そしてもう一言、私に言葉を残した。

「君はアリシアの写し身なのか、それともフェイトなのか。彼女に教えないとね」

銀灰は私にそう言い残し、室内から姿を消した。何時もながら言うことを言い終わったら消えるって……。

「そうなのかな、バルディッシュ。銀灰の言う通り、私はまだ、始まってもいなかったのかな？」

《get set》

私の呼応に伝えてくれるようにバルディッシュが戦斧の形状をとる。私の曇っていた表情が明るくなり、重かった心が軽くなった。私は笑った。同時に目の前が霞む。涙が溢れる。

「そうだよ、バルディッシュもずっと私の側にいてくれたんだも

んね。お前も、このまま終わるのなんて嫌だよね」

《yes sir》

私はバルディッシュを抱き締める。

銀灰が教えてくれた。私は人形じゃない……私はフェイト・テスタロッサなんだ。

「うまくできるか分からないけど、一緒にがんばろう」

《recovery》

ボロボロになっていたフレームが私の魔力を使ってバルディッシュは完全復活を遂げる。私はバルディッシュを握る。

「さあ行こう。私たちを始めるために」

私の服装がバリアジャケットに変わる。私はバルディッシュと共に母さんが居る、時の庭園に転移した。

フェイトが時の庭園に転移した頃、アースラのブリッジには彼が現れていた。

「リンディ艦長。後はお任せします」

「……わかったわ」

「では……」

軽く手を振ると銀灰は姿を消した。

彼はフェイトが決心するまでリンディたちアースラの面々にあることを告げた。

『自分がこれから行うことに介入は疎か、口を挟むな。それらを破れば壊す』と。

その意味は理解し難いものだったが、彼が何かをしようとしていることは確かである。本来管理局が介入しようとは何も言わない彼が改めて言うのだから……。だが、それが何かはわからない。

わかっていることは……。何も無い。

そして、今庭園で戦闘を行っている彼女たちの姿を見据える。

映像にはクロノが傀儡を全て破壊し、城の中枢に進出した姿。なのはと何時の間にかアースラから抜け出したフェイトが、巨大な傀儡に立ち向かう姿が映っていた。

ホールに近付くと傀儡の数は更に増してきた。  
その時。

「なのは！」

ユーノ君のバインドが傀儡から破られ、私に向かってきた。防御を張る余裕がない。私は傀儡の直撃を覚悟した。

「サンダーレジーイー……!!!」

私が傀儡さんの直撃を受ける直前、天蓋から金色の閃光が放たれ傀儡を破壊した。私はあの娘の名前を……フェイトちゃんの名を呼ぶ。

「フェイトちゃん!」

だけどそれを遮るように更なる傀儡が現れた。その大きさは今までの中で一番大きい傀儡。

刹那、銀の極光が傀儡の地足場を貫き、そのまま傀儡を飲み込んだ。同時に巨大な爆発が起きる。

そして、その中から現れる白面の少年。

「ん? 感動の再会に水を射したかな?」

「銀灰さん!」

「銀灰!」

私とフェイトちゃんは地中から現れた銀灰さんに駆け寄った。そして、すぐさま私は銀灰さんに訊ねる。

「何で地下から?」

「駆動炉を止めて来た。もう彼女も解放してあげないといけないから」

「えっ?」

「フェイトが気にすることじゃないよ。なのはもね。だから、迷わず君らは先を進むんだ。残りは俺が始末をつける」

銀灰さんはそう言って周りの傀儡を破壊していく。私とフェイト

ちゃんは銀灰さんの言葉に従って、プレシアさんの下へ向かった。

銀灰は二人の姿を見送り仮面を外して一言呟く。

「あとはこの馬鹿げた世界を壊すだけ。その結果の先に何が待ち受けようとなのは、フェイトには酷だろうな。だから俺を怨むだけ怨め。それが俺に出来る償いだ。だから、今だけは……」

銀灰の魔力が更に膨れ上がり、莫大な銀色の魔力光が部屋一体を飲み込んだ。

光が収まると全ての傀儡は欠片程度の残骸のみ。他は全て灰燼に帰す。

「俺は……」

銀灰は傀儡たちの成れの果てを見据え、なのはたちの後を追った。

## 第24話「最終楽章」(後書き)

後書き。

今回は長かったため何を書いたかさっぱりです。

かなり端折った箇所があるので辻褄が合わないところがあると思いますが、最後のシーンは銀灰とフェイトの実力差です。銀灰が転移が遅れたのに他を全て片付けているのは……。

また、最後の銀灰の言葉はひとつひとつ次回の話に繋がる伏線です。

更に、端折った部分は時間が出来次第再構築を予定しています。ただ、感想に書かれる内容によつてですが。辻褄が合うならたぶん軽い付け足しだけはするかと。

ただし、予定ですの大きな期待はしないでくださいね(汗)

では、次回をお楽しみに

第25話「魔女の終わり／魔法使いは謳う」(前書き)

魔女は旅立ち、魔法使いは謳う。

それはこの事件の終わりへ導く、魔法の歌。

心配はいらない、殺しはしないさ

## 第25話「魔女の終わり／魔法使いは謳う」

なのはとフェイトはプレシアが居る最深部に辿り着く。

「母さん!」

「っ!? 来たのね、フェイト」

プレシアはフェイトの叫びに感慨なく見やる。どこまで深く、見下した瞳で。

「ただ、フェイトはその瞳をもともせず、ゆっくりとプレシアに近づく。」

「母さん。私はアリシアのクローンかもしれませんが」

「……そうね。貴女はアリシアのために存在するただの人形よ」

「だけど、私はただのフェイトでもある」

「……」

「私はフェイトであってアリシアじゃない。けれど、母さん。貴女が私を必要としてくれるなら」

「……貴女は」

「アリシアのためにも、私も」

「ぐっ!?!」

私が最後の言葉を言い切ろうとすると、私は目を疑った。

母さんの胸から黄金の剣が生えた。刃は鮮血に染まり、先端から血が滴る。

その剣を持っているのは白面を被りし、銀灰の姿だった。

「迷いは全てを濁す」

「……どうして、貴男が」

「どうして？ 貴女は決めた筈だ。俺はそれを後押しした。なのに最後の最後でその決心を揺るがそうとしたから（……）」  
「私が、揺れる。……そう。そう言うことだったのね、これは。貴男は」

銀灰の言葉から過去の記憶が蘇る。

その中にアリシアと過ごした日々私へと約束した言葉が過よぎる。

私、妹が欲しい

ああ。私は……。

いつもそう。いつも私は、気付くのが遅すぎる……。

私は目を疑った。  
母さんの胸から黄金の剣が生えていた。刃には血が流れ、先端から血が滴る。

「迷いは全てを濁す」

「……どうして、貴男が」

「どうして？ 貴女は決めた筈だ。俺はそれを後押しした。なのに最後の最後でその決心を揺るがそうとしたから（……）」

「私が、揺れる。……そう。そう言うことだったのね。ふふふ。やはり私は、気付くのが遅すぎる」

剣が引き抜かれ、プレシアの胸から血飛沫が噴出する。そのまま、後退り背後にあるアリシアの水槽に近付く。

瞳はもう焦点が定まっていらないが執念とも言える、強い意志でアリシアに呟く。

「アリシア、もう離さないわ。一緒に行きましょう、アルハザードへ……」

プレシアは血反吐を吐きながら、水槽越しにアリシアを愛おしそうに撫でた。

すると、呼応するかのよう二人の足場が崩れ落ち、虚数空間の海に為すすべなく落下する。

フェイトは電光石火の如く駆け出したが、その手は間に合うことなくこぼれ落ちた。プレシアは虚数空間の海に落下しながら自分を見て泣くフェイトを見て小さく呟く。

（なるほど。銀灰……アナタは）  
「……本当に私は気付くのが遅すぎた」

プレシアは深い深い海の底に、アリシアと共に消えた。

俺はプレシアを貫いた剣を横風ぎに払う。それによりプレシアの赤い血飛沫が地に半円を描いた。

「『アブソル神創剣』」

名を紡ぐと共に神創剣は銀灰の輝きを放ち、粒子に還った。そして、新たに銀杖を取り出し、クロノたちを見据える。

「き、君は何をしたかわかってるのか!? プレシア・テストロツサは」

「俺はただ彼女の筋道を正しただけだ。そして、そのために……」  
「母さんを殺したんだね、銀灰が」

フェイトの目は怒りに燃えていた。銀灰に対する憎しみが、プレシアに対する哀愁が俺へと向けられる。

「ああ、俺が殺した。彼女とはひとつの契約をしたからね。俺は俺のやりたいように動く、と」

「もう貴男の話は聞きたくない。貴方は私を救ってくれた。だけど今回は……」

「絶望を与えた」

「そつだ!」

刹那、フェイトが俺に飛びかかって来た。だがこれも俺の予定通りの結果だ。

このまま、このまま行けば全てが完遂する。憎めフェイト。俺を……。

「その程度で俺を殺せるか!」

「ぐっ!」

バルディッシュを銀杖で尻ぎ、返し際に打撃を入れた。

フェイトは旋回してバルディッシュに刃を展開するも、俺の打撃をカウンター越しに受けて壁に吹き飛ばされた。

「高町なのは。君は俺に向かってこないのか？ ……いや、違うか。フェイトのように敵意を抱く理由がない。だけど、もし俺がクロノとユーノを ……っ！」

ちよつと脅しただけでなのはから誘導弾が複数放たれる。

今の俺ならやりかねないと思うたのだろう。 ……はは。それで良いよ、なのは。

「では、邪魔な三人は退場させて頂こうか。この場に君らは相応しくない」

「クロノ君、ユーノ君、アルフさん！！」

「心配はいらない、殺しはしないさ」

俺は転移魔法の術式を展開し、クロノとユーノ、アルフをアースラへ転移させる。

そして、同時に庭園内にある虚数空間を封じ込め、絶対庭園を外に張る。

時の庭園は銀の闇に包まれた。

どうして銀灰が母さんを

母さんがようやく私に ……なのに！

私の心は闇に染まった。もう何も信じられない。銀灰は……。

「この体じゃ戦いにならないか」

銀灰がそう呟くと私を深い絶望の闇から救ってくれた姿に変わった。

仮面はそのまま顔を隠しているけど、体格は私たちと同じか、少し高いぐらい。

あの娘はその姿に驚いていたけど、私は銀灰がどんな姿だろうと知ったことではない。今は銀灰を倒す。それだけだ！

私はどうしてこうなったのか疑問を感じていた。銀灰さんは確かにプレシアさんを刺した。だけど、それには何か別の思惑があるように思えてならない。

フェイトちゃんは怒りに我を忘れているけど、今の銀灰さんにプレシアさんを刺した時に垣間見せた明確な殺意はない……。と思う。それにクロノ君とユーノ君を指して私を闘わせる意味がわからない。あの時は殺意はあつたかも知れないけど二人には何もしなかったけど、私はとっさにこの闘いに参加した。銀灰さんの予定通りに

銀灰さんは私たちに何かを　この闘いで伝えようとしているよ  
うな、そんな気がする。

「だから私は、銀灰さんにお話しを聞くんだ！」

私は全力全開で銀灰さんに立ち向かう。

二人の魔力が迸る。

空気を震撼して俺に伝わる魔力の鼓動。同じ魔法使いとしての誉である。しかし、今はそのような感情は捨てよう。

今この時、全てが揃った。残りは

「さあ来い。二人の魔導師。君らの力を魔法使いに見せてみる！！」

俺は吼えた。

同時に複数の術式を展開する。第五式を起点に、自身の背後に射撃型の魔法弾を24配置する。並列演算処理は簡単だ。

しかし、肉体が保たない。スペック的には青年の体型が一番なのだが、今回は敢えて真実の姿で迎え撃つ。

それが彼女たちに見せる俺の本気

「我が手に集うは万条の光」

前面に銀の光が収束を始める。銀の魔法陣が複雑な式を編み出した。

「幾重にも集いし光は陽光を司り」

莫大な光が形作る。

それはある概念を封じ込めた魔力の球体。その光景はまさしく太陽。  
陽。

「其は究極にして世を照らす陽光なり」

収束を終えた陽光はその場に止まり、主を命を待つ。

「陽光よ、我が眼下に広がる世界を侵せ」

二本の環状の輪が太陽を囲い回転を始める。膨大な魔力が輝きを増す。それを見据え、銀灰は銀杖を構え直す。

「闇を切り裂き、天を貫く、其は世界に齎す光滅なり」

銀灰は神速を超え、銀杖を振り抜いた。

「第五式『天破光滅』デストリユクスイオン。全弾、投射！」

莫大な熱を帯びた太陽が爆発し、大いなる銀の極光が放たれる。それに続き、24の魔力弾も射出された。その光景はまさに圧巻に尽きる。

流星群が如く、なのはとフェイト、世界を地上さえ貫いた。だが、手応えがない。いや。あるにはある。だけどこれは……。

「デイバインナーバスタツツツ……！！！」

桜色の砲撃が銀の極光と均衡する。

高町なのはの十八番、収束魔法。唯一俺の極光と均衡する魔法だ。しかし、第五式の前には莫大な魔力を込めた収束魔法であろうと敵ではない。

「えっ？ 私の砲撃が押されてる！？」

「『破壊』を概念とした魔法にただの魔力をこり押ししたところで意味はない」

「キヤアアアツツー！？」

銀の極光は勢いを取り戻し、デイバインバスターを飲み込みながら砲手のなのはを吹き飛ばした。だが、肝心のフェイトがそこにはいない。

《Lightning Bind》

「後ろ……ツツツ！？」

俺の四肢は金色のバインドで拘束される。思考をフル回転させるが、フェイトが眼下に迫る。

「ハアアアアツツ！！」

「……ふっ。これで完遂だ」

「っ！？」

銀灰は自嘲し、バインドを破る力を霧散させてフェイトの一撃を受けた。

仮面は粉々に砕け、四散した塵と化す。銀の粒子が舞い一刀の元、翼は墜ちた。

フェイトは渾身の一刀が銀灰に直撃したことに驚く。尚且つ、一撃を受けた銀灰の口元は笑っていた。

「どうして……」

私は墜ちていく銀灰を見据え、自問する。……何で笑ってるの。

その笑みはどこまでも満ち足りた彼が見せる初めての笑み。銀の瞳に銀灰の髪。初めて彼の顔を見たけど、どこまで整った美しい顔だった。

仮面を付けず共に闘ってきたらもしかしたら惚れていたかも知れない。

私はそんな夢現ゆめうつつに浸り頬を染めた。だけどそれもすぐ振り払われる。……彼は最後には私を私として見てくれた母さんを殺した。

「……赦せないよ。だけど、どうしてかな？」

か細い声でフェイトは呟く。私の頬に滴る水。

「あれ？ どうして涙なんか」

私は何時の間にか泣いていた。

どうしてだろう。私は銀灰に怒りを覚えたのに、怨んでいるというのに

「母さん。どうしてなんだろう？ 涙が止まらないよ」

私はこれを母さんのために流した、もしくは、銀灰を倒した感情から来た高ぶりの涙から来たものだと思った。

だけど、銀灰を倒して、私を満たしたのは悲しみだった。

「やはりこうなりましたか。本当に馬鹿な旦那様ですよ、貴方は誰？」

あの子じゃない誰かの声が回廊に響いた。振り返った先には場違いな格好をした白面ベルソネを付けたメイドさん。

私はその姿に警戒こそすれども、メイドさんは何時の間にか銀灰の下にいた。

「私はそうですね。この主、旦那様に仕えるしがないメイドです」「メイド、さん？」

「そつで御座いますよ、テストロッサの御息女。フェイト・テストロッサ様」

私の背筋が跳ねる。

どうして私の名前を知ってるの？

「メイドに知らないことはありません。因みに私の名は偽名で『灼燿』と申し上げます。以後、旦那様と共に御見知り置きを……」

そついうと灼燿と言うメイドさんは銀灰を抱えた。

すると、メイドさんに抱えられる直前、銀灰が意識を取り戻す。

そして、一枚の封筒を取り出し私に投げて来た。

「わっ!?!」

「……それはお前となのはが真に仲を繋いだ時に開けることができ  
る」

「えっ?! それってどう……」

「秘密だ。お前は俺の口から直接プレシアを殺した理由を聞きたい  
と思ってるかもしれないが、時間がもうない」

「ええ。お時間です。お一人で立てますか？」

「ああ、大事はない。ただ仮面の反動がな。この姿だとリスクが高い」

銀灰はメイドから離れてゆっくりと立ち上がる。一撃を与えただけでどうして気を失ったのか、内心驚いていたけど、そんなカラクリがあったんだ。

どこことなく私は安堵した。……まただ。敵かたきなのに何で

「ふっ。憎しみが消えてるな。それと、その感情がどうしてと思ってるなら、それはお前が優し過ぎるからだよ」

「優し、過ぎる……」

「ああ。優し過ぎる。眩しいほどにね。……手紙は捨てるなよ。真相はそれに書き綴っているからね」

「では。……そうそう。高町様は伸びきってると思いますので後を頼みます。それと旦那様の素顔は誰にも」

銀灰が消えるとメイドさんは私にそう告げる。特に最後は言えば何かを……たとえば 私はおぞましい未来こっけいしか脳裏に映らなかつた。何だろっ、寒気がする。

私はメイドさんの異様な圧力に絶句し、何度も頷いた。

「了承して頂きありがとうございます。……あと、転移魔法は高町様の付近に掛けております。少量の魔力を流せば貴女方の戻るべき場所に転移しますので」

メイドさんはそう私に言って姿を消した。私は慌ててあの子の下に駆け寄った。

最初はあるの収束魔法で銀灰を退かして、二人で挟み撃ちを行うつもりだった。けど、まさかそれを簡単に覆されるなんて思いもしなかつた。

すぐにバインドを思いついたから良かったけど、失敗すれば私が墜とされていた。

だけど、極光とも呼べる収束魔法を受けて大丈夫かな？

私は彼女が吹き飛ばされた場所まで行く。だけどあの子は気を失ってるだけで、特に目立った怪我はなかった。

良かった。怪我はないみたいだけど……あのメイドさんが何かしたのかな？

ん？ そう言えば、何時の間にか元の空間に戻ってる。銀灰が消えたからなのかな……。

そんなことを思いながら地上に描かれた魔法陣を見つけ、魔力を流す。

魔法陣から光が溢れる最中、手紙を見て銀灰の顔を思い出す。また、手紙の内容について思いを馳せる。

「……母さん。私はどうすれば良いのかな？」

銀灰が渡された真相が書いてある手紙を見据え、もつけないプレシアを思いながら呟いた。

## 第25話「魔女の終わり／魔法使いは謳う」（後書き）

遅くなってすみません。

ネタが纏まらなくてグダグダな閉めを迎えていましたので何度も試行錯誤を繰り返しているうちにこんなことに。それにグダグダ感は完全に拭えず

鬱だ。泣きたい。

あと、ブログ開設しました。

マイページにアドレス載せていますのでもしよければ見てやってください。短編なんかも執筆しています。番外編を

ぐすつ。次回は無印最終回です。見捨てないで頂ければ幸いです。

エピソード「名前を呼んで…… / 奇跡の魔法」(前書き)

春は終わりを告げ、季節は変わり目に差し掛かる。

奇跡の魔法と忘却の魔法使いにはひと時の休息を。

絆の魔法は紡がれ、二人の魔法使いはまた会える日を信じて。

……物語は紡がれる。

新たな舞台、新たな友と共に。世界はいつも新しい世界を求める

桜咲く季節。白の少女と黒の少女が出会いました。

エピローグ「名前を呼んで…… / 奇跡の魔法」

銀灰さんとの激闘の末、私とフェイトちゃんははたらくも勝利した。けれど、フェイトちゃんはお母さんを失い、更には銀灰さんに裏切られた。

「ねえ、ユーノ君。あれは本当のことだったのかな？」

「事実、とは言い難いけど僕らの前で確かに銀灰はプレシアさをを刺した」

何度となくあの光景が脳裏に浮かんだが、気持ちが悪かった。

人の死を目の当たりにしたのだから仕方ないけど、どうしても信じられない。

銀灰さんが人をあかも簡単に殺すなんていうことを

私は就寝に就きながらフェイトちゃんから齎された手紙を思い出す。

「銀灰さんから私たちに向けた手紙か……」

事件解決の日、私が目を覚ましたのはアースラの医療室だった。

そこで、フェイトちゃんは泣いていた。お母さんが死んだことに銀灰さんへの怒りと悲しみが入り組んだ感情から

「フェイトちゃんは教えてくれなかったけど、憎しみに荒れ狂ったフェイトちゃんがあの時だけは違ってた」

私が起きたのに気づいたフェイトちゃんは私を心配な顔で見っていた。

そして、私が気を失っていた時の話を聞かせてくれる。

「……銀灰さんは一体何がしたかったのか。 あれ？」

そう言えば私がひとりになっていたあの時にも、私を支えてくれた人がいた。

あの人は確か……。

「……んーッ!？」

思い出せない。

霧が掛かったようにその場面ヒシヨンが見えない。その前に、どうして今になって、こんなことを思い出そうとしたのかがわからない。

「だけど、輪郭や声からして男の子だったな。それも、私と同じぐらいの年の子だった。……ただ、私や今のフェイトちゃん以上に悲しい瞳をしてた」

私は目蓋を閉じながらあの日に会った男の子の姿を思い出そうとした。

けれど、そのまま睡魔に襲われて深い眠りに就く。

……そう言えば、もう一週間だっけ。

フェイトちゃんは大丈夫かな？

翌朝。

なのはの部屋で携帯が鳴り響く。

未だに眠り惚けていたなのははなかなか電話の着信に煩そうに、寝返りをした。そして、ゆっくりと携帯を取る。

着信画面を覗くと……。

「うわっ!?!」

着信画面に映し出されていたのはアースラの名前。なのはは急いで電話を取った。

「はい、もしもし!」

『ああ、なのはさん。ごめんなさいね、朝早くに』

「いえ」

『フェイトさんの裁判の日程、来週から本局行きに決まったわ。でね、その前に少しだけなんだけど……』

電話を掛けて来たのはリンディさんだった。その後、リンディさんから嬉しい報告に私は心踊り、笑顔で電話を切った。

フェイトちゃんと少しだけ会うことができる。そうした報告だった。

それに、フェイトちゃんが私に会いたいと言ってくれた。私は急いで学生服に着替えて家を出た。

なのはが家を飛び出した頃、リンディは艦長室でため息を吐いた。フェイトとアルフ、クロノは地上に降りている。なのはを待っているのだ。

これで此処アースラには三人を除く局員しかいない。リンディは振り返る。何時の間にか現れたひとりの少年を見据える。

「これで良いのかしら、貴男は？」

「ええ」

「そう。それで、どうして貴男が此処に来たのかしら、銀灰さん？」

リンディは白面<sup>ベルソナ</sup>を被った、銀灰を睨む。

「いえ。事の成り行きを見守ろうと思いましたがね」

「フェイトさんやなのはさんを裏切った貴男が何を言ってるのかしら？」

「ふふふ。そうですね。確かにそうだ。ですが、あの日俺は貴女にも言った筈だ。何があるうと邪魔をしないで貰いたいと」

銀灰は鋭い視線でリンディの瞳を捉える。リンディは少し怯むも、何事もなかったように言葉を返す。

「そうね。だから私は局員には何も告げなかった。ですけど、どうしてプレシア・テストロッサを殺したのかしら。貴男があんなことを、それもフェイトさんの……」

「だからこそですよ。フェイトが居たから刺した。それだけの理由さ」

銀灰は笑った。

人を殺したことを当たり前のように、肯定するように。しかし、リンディの目には違うものが映った。

「やはり貴男は……」

「……あなた方にはプレシアの死を認識して欲しかったんですよ。データに残るように。ただそのために俺は彼女を刺した。こう言えればわかりますかね？」

「ええ。それはわかりやすいわね。ですけど、良いのかしら。私にそんなことを言うって？」

「構いませんよ。貴女なら上手くやるでしょうから。それに、フェイトは大事に手紙を持ってたでしょうから」

「……アレも貴男の鍵のひとつかしら？」

「はい。今日、開くか開かないかが決まる扉です。後は、貴女にお任せしますよ」

「わかったわ。フェイトさんのことは任せなさい。銀灰さん。いえ、こう呼んだ方が良いかしら、魔法使い……」

リンディは小さく彼の名を紡いだ。

銀灰はやれやれと両手を振り、リンディを見据えた。

「やはり貴女に本名を名乗るべきではなかったですね。まあ、誰にも言わないと思ったから貴女にだけは名乗ったんですが」

「あら？ 嬉しいわね。そこまで私を信用してくれてたなんて」

「現に誰にも教えてないようですね。では、俺は彼女たちの結果を見て来ます」

銀灰はそう言ってリンディの前から艦長室から姿を消した。

リンディは再び小さくため息を吐いた。だが、どこことなく笑っていた。コンソールを開くと、そこにはひとりの少年のデータが載っていた。

なのはとフェイトは海鳴臨海公園で再会した。クロノ、ユーノ、アルフは二人の再会に気を使い離れた場所に移動する。

二人は三人を見送り、再び顔を見合わすと互いに頬を染めた。

二人は海を眺める。

「あはは。いっぱい話したことがあったのに、変だね。フェイトちゃんの顔を見たら忘れちゃった」

苦笑いを浮かべ、久々の再会にうれしさで何から話せば良いかわからないというなのは。

「私は、そうだね。私も上手く言葉に出来ない。だけど、嬉しかった。真っ直ぐに向き合ってくれて」

「うん。友達になれたら良いなと思ったの。でも、今日。もう、これから出掛けちゃうんだよね」

「そうだね。少し長い旅になる」

フェイトは淋しげな表情で告げた。なのはも同じような表情で「また、会えるんだよね」と紡ぐ。

少しの空白を空け、フェイトは頷き返す。

「少し悲しいけど。やっとホントの自分を始められるから」

母さんを亡くす前に銀灰に言われた言葉が脳裏に映る。私は頭を振る。今はそんなこと……。

「来て貰ったのは返事をするため」

フェイトは頬を染め、なのははある言葉を思い出す。フェイトの言葉は更に続く。

「君が言ってくれた言葉、友達になりたいって」

「うん、うん」

フェイトはそのなのは頷きに一生懸命に答える。

「私に出きるなら。私で良いなら、って。……だけど私、どうしても良いかわからない。だから教えて欲しいんだ。どうしたら友達になれるのか」

戸惑う心に震えに自分にフェイトは初めて、素直な気持ちをなのはにぶつける。

なのはは笑顔でフェイトに教える。

「簡単だよ。友達なるの、凄く簡単」

フェイトはキョトンとした顔でなのはを見る。なのはは一度瞳を閉じ、フェイトに言った。

「名前を呼んで。初めはそれだけで良いの。君、とか、あなたとかそう言うのじゃなくて。ちゃんと相手の目を見て、はっきり相手の名前を呼ぶの」

なのはは息を吸い込んだ。

両手を胸の前に置き自分の名前を言う。

「私、高町なのは。なのはだよ」

「なのは」

「うん、そう」

なのはは乗り上げるように小さく喜び、フェイトが自分の名前を呼んだことに頷く。フェイトはもう一度名前を呼ぶ。

「なのは」

「うん」

「なのは！」

「うん」

二人は感動を包み隠さず、涙を流した。なのははフェイトの手を取った。

二人を祝福するように暖かな一陣の風が吹く。

フェイトはなのはに告げる。この嬉しさ。母さんを亡くした悲しみ以上に込み上げて来た暖かさを、嬉しさを、言葉で。

「ありがとう、なのは」

「うん」

「なのは」

「うん！」

なのはも嬉しさのあまり更に涙を流す。フェイトはそんななのはにこいつ告げる。

「君の手は暖かいね、なのは」

その言葉にたくさんの涙が溢れるなのは。フェイトはなのはの涙を拭う。

「少しわかったことがある。……友達が泣いていると、おなじように私も悲しいんだ」

「フェイトちゃん!!」

フェイトの言葉になのははようやく通じ合えた気持ちから、嬉しさから、ひと時の別れの辛さから、フェイトに飛び付く。

フェイトはなのはに優しく抱擁を交わす。

「ありがとう、なのは。今は離れてしまっけど、きっとまた会える。

……そしたらまた、君の名前を呼んでも良い？」

「うん、……うん」

「会いたくなったら、また名前を呼ぶ」

なのははフェイトの顔を見る。

互いに涙を流しながら、刻々と迫る別れを惜しむように。フェイトは更に告げた。

「だからなのはも、私を呼んで。……なのはに困ったことがあったら。今度はきつと、私がなのはを助けるから」

フェイトは涙を流し言い切る。なのはも嬉しさのあまり、フェイトの胸で涙を流し続けた。二人は抱擁を強め、笑いあった。

それを見て、クロノはすまなさそうに時間を告げた。フェイトはそれに頷く。

なのははフェイトの名を呼んだ。その際に髪を結っていたリボン

を解く。

そして、フェイトにリボンを差し出す。

「思い出に出来るもの、こんなものしかないんだけど」

「……じゃあ、私も」

互いに髪を結っていたリボンを差し出した。互いのリボンを友達の証として、必ず再会する約束の証として交換する。

「ありがとう、なのは」

「うん、フェイトちゃん」

「きつとまた」

「うん。きつとまた」

その時、二人の間に銀灰の光が現れる。なのはとフェイトは目を見張った。クロノ、ユーノ、アルフも同じように。

そして、フェイトはすかさず、ポケットを漁る。だが、それはなかった。

なのははフェイトの行動にあるものがを脳裏に浮かぶ。

銀灰の光の中に一枚の手紙があり、それは銀灰が渡されたあの手紙だとフェイトは、なのはは確信した。すると、手紙がひとりでに開き、なのはとフェイトの頭に声が響いた。

この手紙が起動したと言っことはなのは、フェイトは絆を結んだと言っことか。

さて、一言おめでとうと言っておこうか。

フェイトの母、プレシア・テストロッサを殺した銀灰の声が脳内に響いている。

フェイトは苦虫すり潰したような表情をするが真剣にその声を聞

く。ようやく、真相がわかる。それに、このモヤモヤした気持ちと決別できると

ふふ。では、そろそろあの日の真相を話そう。

俺は確かにプレシアを刺した。けれど

少し離れた場所になのは、フェイトと同じ年の少年と高校生、大学生ほどの美しいメイドがいた。少年はメイドが入れた紅茶を飲みながらなのはとフェイトを見据える。

「ようやく手紙の扉が開いたか」

「そのようですね。ですが、良いのですか。彼女たちに事の真相を知らせても？」

「良いも悪いも、どちらにしる何時かは話すことだからね。構わないさ。ただ、管理局にあまり知られたくないだけ。それに念は押しつけるから彼女たちから露見することはないさ」

「確かに。ですが、主も人が悪いですね。あのようなことをするなど。殺すふりなど」

「仕方ないさ、灼耀。管理局を欺くにはね」

少年は小さく微笑み、白面ヘルシナを出してメイドに告げた。  
メイドの名は灼耀。そして、少年の名は

「ふふふ。わかっておりますともわが主。……そして、信じており

ます。マイマスターにして生涯唯一、私たち十二姉妹が仕える主。忘却の魔法使い。銀灰。 神城ユウヤ様を」

そう告げるとどこからともなく少年、ユウヤ。灼耀の背後に十一人のメイドが現れる。

「ありがとう、みんな。それじゃあ俺は行って来るよ。彼女と待ち合わせているからね。灼耀。いや、フォロウ。プレシアさんが目を覚ましたら現状を教えておいてね」

仮面を消し、ユウヤは姿を消す。そして、メイドたちも姿を消した。

ユウヤは待ち合わせの桜の木の前に来た。だが、彼より先に待ち合わせをしていた彼女はいた。

「遅いよ、ユウヤ君！」

「ごめんごめん、果凜」

ユウヤはペコペコ頭を下げながら果凜に謝る。果凜は拗ねつつユウヤを怒る。

「もう、女の子より遅く来るなんて……不謹慎だぞ」  
「悪かったよ。それで、何か聞きたいの？」

「そうだね。なら　最初から最後まで」

「……マジ？」

「マジだよ」

「わかったよ。それじゃあ、始めるよ。桜咲く季節。白の少女と黒の少女が出会いました」

ユウヤは語る。彼女たちの物語を

春は終わりを告げ、季節は変わり目に差し掛かる。

奇跡の魔法と忘却の魔法使いにはひと時の休息を。

絆の魔法は紡がれ、二人の魔法使いはまた会える日を信じて。

……物語は紡がれる。新たな舞台、新たな友と共に。世界はいつも新しい世界を求める

【第一章・絆の魔法（完）】

## エピソード「名前を呼んで…… / 奇跡の魔法」（後書き）

忘却ラジオ プレ配信

翔「どもー。作者の天宮翔です。後書きラジオこと忘却ラジオ、プレ配信が始まります」

ユウ「第一章、エピソードでようやく忘却の魔法使いとして登場した神城ユウヤです。長かった長すぎた。というかプレシアさんを殺したことになってたんだよね、銀灰は」

翔「だね。まあ、伏線がかなりあったし気づいている人はかなりいたはずだよ」

ユウ「確かに伏線多いよね。ってか、僕ってユウヤとしてあんまり活躍してないよな」

翔「二章はかなり活躍するから大丈夫。だけど、奴に取られるかもな」

ユウ「奴って……。なるほど。奴か」

翔「まあ、一章と二章の間に空白期があるから大丈夫さ。日常編だから」

ユウ「そこで幾つかの伏線を消化するんだよね？」

翔「そう。では、今回はゲストを呼んでます」

ユウ「唐突だな」

翔「一章完結を祝いたいからね」

ユウ「だけどこれ、プレ配信だろ？」

翔「……ではでは、ゲストの発表です！」

ユウ「逃げた!？」

翔「マーボーさんの作品『どうしてこうなった?! 神による転生者の輪廻物語』の天道劉君とフィオネちゃん、アテネちゃんです」  
劉「どもー、天道劉です」

ファイ「劉ちゃんのお嫁さん一号のフィオネだよ。よろしく」  
アテ「劉ちゃんを男の娘にしたアテネよ。よろしくね」

ユウ「またすごい人たちを連れて来たな、作者」

翔「エピソードの際は必ず連れて来ようと考えてたからね。がんばったよ、俺」

劉「あはは。だけどボク等が出てよかったのかな？」

ユウ「僕は嬉しいけどね。ある意味歩くフラグを完遂させようとしてる劉君に一度会ってみたいと思ってたからね」

劉「あれ？　なんか普通だ。今までみんな狂ったように抱きついてきたのに」

ユウ「まあ劉君の男の娘という存在圧は他を圧倒してるけど僕には効かないから心配無用だよ」

ファイ「ぶー。主人公同士が話していると絵になるけど蚊帳の外はいやだな」

アテ「そうね。私なんか輪にすら入れなそうなんだけど」

翔「因みに二人の内好みは？」

ファイ「断然劉ちゃんです！」

アテ「その通りね！　だけどイケメン度では何故かしら。神城君の方が圧倒してるような……。その前に彼は人間で……。良いのよね？」  
翔「どういうことかな？」

アテ「彼の存在、神すら超えてるんじゃないかしら？　どちらかというと世界にかみ」

翔「大丈夫。まだ、ね」

ファイ「どういうことですか？」

翔「まだ秘密だよ。まあ、もうひとりの彼と被ったんじゃないかな？」

ユウ「それで……うん？ あれ劉君は？」  
翔「それじゃないのか？」

「うぐ。ユウヤ、お兄ちゃん？」

ユウ「えーっと。これって……」

フィ「紹介しましょう。これは劉ちゃんの真の姿、瑠璃ちゃんです！」

アテ「どう？ 可愛いでしょ」

ユウ「ああ。可愛いけど、何か可哀想だなあ……よしよし」

瑠璃「えっ？」

フィ「瑠璃ちゃんの魅力に狂わない？ どういうことなんですか！」

アテ「し、信じられないわ！？ 作者は陥落されたというのに」

作者死亡

ユウ「男の子なのに無理やりさせられたんじゃないの？」

瑠璃（あれ？ やっぱり普通の人と違う。それに暖かいなあ……）

フィ「あ、あれ？ 瑠璃ちゃんの頬が紅く……」

アテ「気のせい、よね？」

ユウ「よしよし」

瑠璃「ふにゃにゃ〜」

フィ「逆に陥落してる!？」

アテ「や、やばいわ！ 瑠璃ちゃん!！」

瑠璃「えっ、えっ！？ ユウヤお兄ちゃん！！」

ユウ「あれ？ 帰っちゃった」

翔「るりるり」

ユウ「特殊な電波を発してるよ作者。では今回はこの辺で。次回は何時放送するかわかりませんがとりあえず、またいつか会いましょう」

その1「魔女の目覚めと再会」(前書き)

始まりと終わりを告げる島。

人々から失われた『魔法』が存在する大地にして、十二人の魔法使いが住む都。

始終島。

遂にその島がベールが脱ぐ。そして、彼女が目覚める

此処は、何処……

## その1「魔女の目覚めと再会」

此処は第97管理外世界『地球』にある今は亡き、アヴァロ全て遠き理想郷と称しても間違いない、世界から隔離された隠蔽された島。

太平洋のどこかにある未確認の島である。

正式名称は『始終島』。

始まりと終わりを告げる島と呼ばれた世界の裏に位置する島。人々から失われた『魔法』が存在する大地にして、十三人の魔法使いが住む都とされている。

島の大きさはオーストラリアより二周り小さく、日本のような四季がある。

その島の中央に巨大な建造物があり、それは城とも呼べる、巨大な屋敷。

その屋敷の最上階のある一室で健やかに眠る女性がいる。あの日、次元断層に巻き込まれ、尚且つ、銀灰に貫かれた女性、プレシア・テストロツサ本人。

しかし、その容貌はあの日の彼女とは全く異なり、若々しく思える。

その時、彼女の表情が苦悶に満ち、ゆっくり閉じられていた瞳が開く。

「……此処は、何処……」

「此処は魔法使いが創設した組織、総魔法連合教会です、プレシア・テストロツサ様」

「貴女、どこから？ いえ。そんなことより……魔法使いの総本山？ どうして、そんなところに私がいるのかしら」

プレシアは突然姿を現した、くすんだ銀髪のメイドに驚くも、直

ぐに思考を切り替える。かなりの時間眠っていたと考えられるが、違和感はない。だが、自身の身体には違和感を感じる。

しかし、それらを考える暇はなく、メイドは説明に入る。

「その説明は後ほど。まずは自己紹介を。私の名は『灼耀』。現世での名をフォロウと申し上げております。お好きな方でお呼びください」

懇切丁寧にメイドは名を申し、お辞儀する。プレシアは頷き、「では、フォロウと呼ばせて貰うわ」とメイドに告げた。

フォロウは頷き「では」とプレシアが何故此处にいるか説明を始める。

プレシアはフォロウの説明に驚くばかりで、何度も有り得ないと呟く。

プレシアは確かに銀灰に致命傷とも言える傷を負った。尚且つ、次元断層に落ちて助かる筈もない。万が一、数多の偶然が重なり合えば、奇跡的に次元断層から抜け出せたとしても自分は息を引き取っている筈だった。

だが、フォロウの話では私はエーデルワイスと呼ばれる少女に助けられたらしい。魔法も何も使えない虚数空間でどうやって思うが、現にプレシアは生きている。

「フォロウさん。では、アリシアの入った水槽は」

「さんは入りませよ。それと、アリシア様の入った水槽も確保しております。主の名によりプレシア様、アリシア様を虚数空間から脱し、この島に連れ来ることを最優先とされておりましたからね」

「そう。……さっきから気になっていたのだけど、貴女が言う主と

「は誰なの？」

こんな私とアリシアを救い出した彼女に主と呼ばれる人にお礼を言いたい。その一心でプレシアは訊ねる。

だが、プレシアも予想はしていた。しかし、その口でその名を聞きたかった。

「忘却の魔法使い神城ユウヤ様です」

フォロウは誇るように名を告げた。

プレシアは合点がいった。彼は私を刺した際に私にもうひとつ告げた。

自身の名とこれからやる事。そして、私を殺すこと。しかし、それは全てブラフ。

彼女の話では私を管理局上にある戸籍から抹消と言う形にするため、あの場で刺したそうだ。そして、管理局にプレシア・テストアロツサが死んだことを認識させ、戸籍謄本には死亡が記載される。

そうして事件の罪は全てプレシアの死により終わりを迎える。

それが彼、銀灰の筋書きだった。

また、フェイトに関しては強制と虐待により、無罪判決はほぼ確定。

尚も忘却の魔法使いの名によって更に実際の罪は軽くなるそうだが、それを聞いた私は僅かながら肩の荷が降りた。

だが、彼は一体何者だと同時に思う。

魔法使いが管理局内部に圧力を掛けることが出来るなど……。

私はそこで思考を切り替える。

「だけど、神城ユウヤと言う名は、確かこの世界の財閥のひとつ神城家のひとり息子の筈よね」

「はい。そうでございますが」  
「どうして彼が魔法使いに名を連ねているのかしら？」

私はそこに疑問を抱いた。

私は簡単にだが地球について調べていた。その際、五大財閥については頭の隅に置いていた。神城、霸道、クロイツヴェルン、夏樹、河野からなる五つの財閥。

その中でも神城、霸道、クロイツヴェルンについてはかなりの情報が隠蔽されていたため、根強く記憶に刻まれていた。

クロイツヴェルンは四年前に突如内部崩壊し、霸道の次期当主は行方不明。

そして、神城家の次期当主の名は不明。ある筋からようやく名を知れたが、それでもこの三家の情報はあまりにも少なく、何ひとつわからなかった。

「何故でしょう。ただ、素質を持っていた。ただそれだけで御座います」

「話してはくれないようね」

「はい。申し訳ございません。ですが、それは私からは話せないのであって、何れ分かることすいです」

彼女はそう言って紅茶を出した。

プレシアはそれを有り難く頂く。その時、ようやく身体の違和感に気付く。

「ねえ。どうなっているの!？」

「プレシア様、如何致しましたか？」

「どうして私の身体が若くなってるの!？」

プレシアの身体はあの悲劇より前の身体へと変貌していた。ざっ

と、二十代後半か三十代前半。身体には張りがあり、みずみずしいと言える。尚且つ、身体の調子が良くなっている。

「ああ。器を変えさせて頂きました」

「器？ それって……」

「簡単に申し上げますと、以前の身体を別の身体へと代替え、新たな肉体にその魂を移した訳です」

「魂を新たな肉体に、って……そんなこと」

「いいえ、可能です。私とエーデルワイスの力を使えば不可能ではありません」

フォロウは断言する。彼女は言った。

人には器〓肉体。精神〓魂。その二つがあつて人は構成されると肉体が滅んでも魂が輪廻に還る、もしくは死を迎えない限り死とは言わない。それは仮死状態である、と。だから、死者とは言わない、と。

「と、言うことは……まさか!？」

「はい。貴女が求めて来たものは」

室内の扉が開く。

そこにはフェイトと瓜二つの少女が顔を覗かせていた。

「此方におります。アリシア様。お母さまに元気なお姿をお見せになつてください」

「ま、ママッ!」

「アリシア!」

此処に今、母と娘が再会した

## その1「魔女の目覚めと再会」(後書き)

さて、遂に幕間を開始しましたがどのぐらい続くかは不明です。とりあえず幕間で少し魔法使いについて少し語ってみようと思います。

伏線をばら蒔いたり、回収したりと忙しい回になるかと思いますがイベントも用意していますので楽しみに

新作を二本公開しています。良ければそちらも読んでみてください

では、次回をお楽しみに

その2「新たな生（みち）」（前書き）

えーっと。

今回から前書きはたまに書くことにしました。ネタがありませんから（汗）

## その2「新たな生（みち）」

プレシアとアリシアが感動の再会を果たしたたくさんのお話をした。

アリシアは告げる。

ずっとずっと、暗い世界にいたと。

体を動かしたくても動かないし、瞼も開かない。ただ、そんな世界でも声だけは聞こえた。

お母さんが泣いている声。

私のそっくりさんを作ったということ。ずっと。そのそっくりさんは、私の妹になるのかな？ その子に対して泣いて、私とその子に葛藤して、……その子に八つ当たりをしていたこと。

プレシアはその言葉を聞き、驚く。

アリシアは知っていた。私の感情を。誰に吐露することなく、ずっと抑えに抑えていた感情を

「少し失礼します。プレシア様。アリシア様は仮死状態だったと言え、魂は寝てはいますが、夢を見ます」

「夢？」

「はい。夢です。繋がりが深いものに引き寄せられると言っても良いでしょう。そのため、アリシア様はプレシア様の感情に直に触れ、ずっとそれを見ていたのです」

「ずっと、って……？」

プレシアはアリシアを見る。

アリシアは子ども特有の笑顔を浮かべていた。だけど、同時に少し哀しげな表情でプレシアを見上げる。

「お母さん。私ね、ずっと見てたんだ。お母さんがフェイトだっけ？ 私のそっくりさんを作ってからずっと泣いてた。……私とは違う。別の存在だって」

アリシアは必死にプレシアに告げる。今まで見てきた夢物語を。どれもがプレシアで、プレシアがして来たこと。

フェイトを大っ嫌いだったとともに微かだけど、フェイトを大事に思った。けれど、何度も自分に言い聞かせてきた。

フェイトはアリシアとは違う。

そうしてずっと、フェイトを慰めものとしてではなく、我が娘とではなく、出来損ないの人形として見てきた。

アリシアは涙を流す。

「私は悲しかった。お母さんが私を亡くしたことで、こんなに苦しんでいたなんて」「アリシア……」

「フェイトだっけ。私のそっくりさんを作って、私じゃない者だと行ってフェイトを苦しめて、自分まで苦しめて」

プレシアはその言葉に何と言って良いかわからなかった。

それにわかってた。自分は親として失格だと言うことが。フェイトを作って、慰めものとして生み出し、更には人形と罵り、棄てた。そして今、目の前にいる大切な娘ですら苦しめていたのだ。

「私は親失格ね」

わかっていた。

ずっとわかっていたのだ。現に、アリシアがまた私の前にいる。どうやって生き返ったのかは別として、求め続けてきた本物のア

リシア。

そして、この場にはいないフェイト。

あの日を境に人形として扱ってきた。けれど、フェイトにも命がある。アリシアのクローンであっても、フェイトにはフェイトの命が、自我がある。フェイトだって人には変わりない。私の、プレシア・テスタロッサが産んだもうひとりの娘だった。

なのに、たくさんフェイトを苦しめてきた。役立たずの人形なのだ、アリシアとは似ても似つかない……出来損ない。

アリシアじゃないから、と。

そうやって、フェイトを自分から突き離してきた。そして、ジュエルシードを通して知った。フェイトも私の娘だと。

ずっとわかっていた。だと言うのに銀灰に出会うまでわからなかった。

フェイトを思う気持ちを。アリシアが私に願ったことを。

母さん

妹が欲しい

魔法使いによって私は一度死んだ。

狂気の魔女・プレシア・テスタロッサの物語は終わりを迎えた。

そしてわかる。今なら

「私はアリシアと同じようにフェイトを大切にしていた」

私はフェイトの親失格だ。

フェイトを切り捨て、アリシアを求めた。だけど、どこかでフェイトを大切にしたいと、思っていたのだ。盲目的にアリシアを求め続けた私は……どこまでも愚かだった。だから、最後はフェイトを

救いたかった。私の死から新たな生を歩んで欲しい、と。

「私はなんて愚かな母親なのかしら」

「ううん。お母さんは愚かとかじゃないよ」

アリシアは母の頭を撫でる。赦せない自分を責めるプレシアに優しい告げる。

「お母さんはね。最後にはフェイトを救ったよ。鎖から解放したと言っても良いのかな？」

「どう言っことかしら？」

「ユウヤ君に刺される前にフェイトに少し揺れたよね。それだけでも、フェイトにとって救われたと私は思うの」

「だけど……そんなことで」

「大丈夫だよ。フェイトは強いよ。ずっと夢で見えてきたけど、最後までお母さんを心配してた」

苦しめてきたかもしれない。

「だけど、私にとってお母さんはお母さん。フェイトにとってもお母さんなんだ。」

だからね。どれだけ距離を置かれても、フェイトはお母さんがどれだけ酷いことをしても、フェイトにとってお母さんはお母さんなんだよ。

何もしてあげなかった。

けれど、私もお母さんも生きてる。だから、何度だってフェイトに会えるよ。

ユウヤ君やフォロウさんは言ってたよ。何時になるかはわからないけど、フェイトに必ず会わせてるって。そして、フェイトにお母さんの今の気持ちを伝えてあげて欲しい。

それが、フェイトにとってこれからの糧になるから、って

アリシアはそう付け加え、微笑む。  
そして、もじもじしながら続く。

「それと……さつきも言ったけど、私と一緒にフェイトに会おう。  
私もフェイトと話してみたい。お母さんの分も私が謝るから、ね」

アリシアは母の手を取り、微笑み浮かべる。慈愛に満ちたその笑  
みはどこまでも優しさに満ちていた。

プレシアはもう片方の手でアリシアの手を包む。瞳から涙が零れ  
落ちた。

アリシアの言葉にプレシアは何度も頷く。

また、フェイトに会いたい。プレシアはそう思った。

次は、次こそは。私の気持ちを伝えよう。プレシアは願った。

アリシアは疲れたのかプレシアの膝の上でお昼寝をしている。

穏やかな吐息を立てて寝ているアリシアを微笑ましく思いながら、  
プレシアは現状把握を務めるためにフォロウに訊ねる。

「フォロウ。アリシアを助けてくれてありがとう」

「いえ。お礼は我が主に願います。私たちは主の命を遂行しただけ  
ですの」

「それでも、助けてくれたのは貴女とエーデルワイスさんよ。あり  
がとう。彼には改めてお礼は言うわ」

「わかりました。では、そのお礼頂きます。……それと、お身体は大丈夫でしょうか？ 不便はありませんか？」

器を代えて、状態は悪くないか訊ねる。だが、プレシアは頭を振る。

「大丈夫よ。以前よりかなり楽になっているわ。アリシアの方は大丈夫なの？」

「ええ。肉体は完全にダメでしたが、魂の方は無事でしたからね。エーデルワイヌが持つ『創生』の方で器を。そして、私の力により魂の定着を行いましたから」

「私には貴女たちが起こす魔法が信頼に値するかはわからないけど、大丈夫と言うことね」

「はい。信用して下さって構いません。それと、アリシア様に簡単ながら教育をしておりましたが良かったでしょうか？」

「教育？」

「はい。長い時、俗世から離れておりましたので中学生ほどの学力を身に付けさせて頂きました」

プレシアはフォロウの言葉に納得する。アリシアが流暢に、尚且つ、難しい言葉遣いをしていたからどうしてだろうと思っていたけれども、教育をしてくれたのなら納得する。

「ただ、中学生レベルとはあまりに高い学力なのでとプレシアは苦笑した。」

「では、もう少しお眠りなさいませ。夏にはユウヤ様も一度此方に戻られます。それまでは安静になさってください。何かやりたいことがあれば私の妹たちにお頼み願います」

「フォロウは此処に居ないのかしら？」

「はい。私はユウヤ様付きのメイドですから……ぼっ」

擬音を発して顔を紅くするフォロウ。

プレシアは思う。この子は主であるユウヤ君に惚れているのだと。

「わかったわ。次は夏なのね？」

「はい。私は時たま参りますがユウヤ様は夏に。では、後のことは妹たちと私の双子の妹アイネにお任せしております。因みに髪の色は紅蓮ですすぐわかるかと」

フォロウは自分の髪を指差しそう告げる。そして、一礼すると姿を消した。

早くユウヤ君の下に降りたかったのだろう。とプレシアは思った。フォロウを見送るとアリシアに視線を移す。気持ちよさそうに寝ているアリシア。髪を優しく撫でると、くすぐったそうに体が反応する。プレシアはそんなアリシアを見ていて微笑えんだ。

小さな欠伸を噛み殺す。長い時間寝ていたと言っていたが、やはりまだ身体が完全に回復していないのだろう。

プレシアはそう思いアリシアを抱いて眠りに就いた。

プレシア side end . . .

## その2「新たな生（みち）」（後書き）

さて、今回でプレシアのお話はとりあえず終了です。  
自分でもいろいろツツコミしたいですけど（汗）

次回は魔法使いのお話を一話予定しています。

まだまだ秘密が多い魔法使いの伏線をどれだけ回収していくか。

では、次回の更新をお楽しみに

### その3「魔法使い」

プレシアが眠りに就いた時、更にひとつ上の階にて十二の席が円形に作られていた。それは円卓と称しても良い。

そこは魔法使いたちが会合を求める円卓。重要視することが起きた時に集まる会合の席である。

埋まった席は七席。？と書かれた席に初老の男が座り、向かい合うのは空席の？？と書かれた席。

？から半時計回りに？、？、？、？、？、？、？、？、？、？、？、？と還る。たがこれには少し違和感を覚える。席のバランスが悪すぎる等間隔に並んでいるように思えて、等間隔ではない。

何か隠蔽しているように思えてならない。まさかとは思うが、十四番目の席が合ったような……そんな不思議な感覚を

「今回はどうして呼ばれたんだ」

NO.？の男が言葉を発した。

それが木霊するかのようには波紋が広がりNO.？、NO.？を除いた魔法使いたちがざわめく。

「沈まれ！ 今回は定期報告とちよつとした諸事情じゃ」

黙っていたNO.？が閉ざしていた口を開く。その一喝で周囲のざわめきは止んだ。

この座を統べる魔法使いの頂点、最強の魔法使いと名高いNO.？の鶴の一声は言霊が籠もっていた。

しかし、流石は魔法使いたちが揃う場。どの魔法使いも初老の彼の言葉を確かに聞くが、虎視眈々とその座を狙うものもいる。だが、

？と？だけは違う。

この二人は彼に仕えている魔法使い。それも？に並ぶとも云われる伝説を持つ、白銀と黒金の魔法使いである。

「今回のこの場は自由参加だ。任務に出払い、この場を離れている魔法使いもいる」

「此処に座を置くものならわかる筈だ。まずは話を聞け。その後、話したいことを話せ。ただ愚痴を零すために来たならば帰っても構わん。後に此処での発言はこの島に住むものたちに掲示するからな」

白銀、黒金の順に口を挟む。

周りは完全にざわめきを止め、今回の会合に耳を傾ける。

魔法使いたちの会合が始まった頃、始終島の北の山に二人の魔法使いが居た。

ひとりは着物を着た妙齢の女性。

ひとりは子ども。銀灰の髪に赤紫の瞳を兼ね備えた子ども。魔法を行使するものの中で彼はこう呼ばれる……。

忘却の魔法使い。神城ユウヤと

「守東のお婆ちゃん」

「まだ私をそう呼ぶか小僧？」

「……お姉さん」

背後から鉄扇を首に当てられ、ユウヤは呼び方を変える。守東と呼ばれたお婆……お姉さんは満足げな顔で鉄扇を着物の裾に直す。

守東。魔法使いでは名高い家系の彼女は三代目当主の肩書きを持つ。当主の肩書きは現在では引退しているが魔法使いの座、十三人の魔法使いの席、N.O.？に席を置く。二つ名を『胡蝶の舞』と呼ばれている。

本名は守東桃華。N.O.？とは同期らしいが年齢不詳。彼はもう長い時を生きていると言うのに桃華はまだ20代前半を保つ美貌を保っている。

それに守東の歴史は長く、現代は十三代目、若干18歳、守東那波が当主を務めている。ということは彼女やN.O.？は軽く100年は生きていることになり……。

「ユウヤ。またいかがわしいことを考えてないかしら？」

「……とりあえず、早く任務を終わらせましょうよ。これでも僕はまだ義務教育期間を終わっていないんですから」

「逃げたわね」

ユウヤは空に昇り、今回の討伐依頼を探す。桃華の瞳は玩具を逃がしたと心底残念そうだが、目も口も笑っていないかった。

ユウヤは急ぎ、群れを探した。

(ユウヤ。聞こえるかしら?)

(あ、はい。聞こえてます。見つかりましたか?)

(見つかったには見つかったわ)

(えっ?)

(一頭の火竜と討伐依頼の馬鹿みたいな悪魔の群れにね)

(……では、火竜は桃華様に任せて問題ありませんか?)

(なる程。確かにユウヤの方が一対多数に分があるわね。私が両方相手するより遙かに早く終わるわね)

(……いつぺんに相手するつもりでしたか)

(日頃の鬱憤が溜まってるからかしら。それにこの程度赤子の手を捻るより簡単なことよ)

ユウヤは思う。

やはり逃げて正解であったと。

そして、各自役割分担を了承し、ユウヤは悪魔の群れに跳ぶ。桃華は目の前にいる火竜へと鉄扇『胡蝶』を向けた。

「火竜如きが私を食べれると思ってるのかしら？ 私を食うか殺すなら白竜や黒竜。伝説級じゃないとね、簡単に死ぬわよ」

宣言すると『胡蝶』を開く。

火竜は言葉が通じたのか火炎を吐く。その熱量はマグマに匹敵し、地上を溶かし尽くす。しかし、火竜は違和感を感じた。不適な笑みを浮かべた女が呆気なく火炎に飲み込まれたのだ。

だが、その違和感はこれから火竜に迫る、悲劇の予兆だとは誰も知らないだろう。

「花鳥風月 花の舞」

女性の澄んだ声が響く。その響きと共に火炎が渦巻く。

火炎は難なく掻き消され、風が逆巻いた。刹那、旋風が巻き起こり竜の堅き鱗を剥いでいく。風は竜を切りつけては鱗を剥ぎ、徐々に押していく。

「『百花繚乱』」

そして、名を叫ぶと共に難なく竜は48分割に切り裂かれた。血肉が飛び交う。

地上は雪化粧から紅き鮮血に姿を変えた。すると、鉄扇の閉じる音が響く。

“パンツ”

同時に雪化粧の上に着物を来た桃華が姿を現す。怪我也汚れもない新品同様の着物姿のまま、竜の成れの果てを見据えた。

「私の奥義を見る前に死を迎えるなんて、ダメダメね。やっぱり悪魔の方が……」

そう言おうとした時、莫大な魔力が空から感じた。行方不明の魔法使いが編み出した魔法のひとつ。

「七天煌魔・第一章『煉獄』」

本来は黒炎の業火が広がるがユウヤの魔力は銀。悪魔たちを飲み込んだのは銀炎の業火だった。全てを飲み干し、全てを駆逐した。その光景はまさに圧巻に尽きる。

逃げ回る悪魔たち。しかし、煉獄の業火に慈悲はなく、跡形もなく悪魔を根絶していく。

#### 七天煌魔

『黒耀の君』が編み出した、ユウヤが持つ十二の魔導に対抗する魔法寄りの魔導。カテゴリーでこそ現在は魔導に連ねるが、第七章は魔法にカテゴリーを置いている。

煉獄は全てを葬ると消え去る。

それを見た桃華はやはり血は争えないと思った。それどころか、あまりに成長速度が速い。今までたくさんの魔法使いを見て来たが、

ユウヤを含め残り二人は群を抜いていた。と。

「さあ、帰るわよ」

「わかりました」

桃華は軽く咳払いし、ユウヤに告げた。ユウヤは頷き、桃華に続いて姿を消す。

これは魔法使いのとある1日。

魔法使い side end . . .

### その3「魔法使い」(後書き)

と、言うわけでちょっとした魔法使いのお話でした。  
次回は話が飛んでイベントに入ろうかと思えます。

その4「そつだよ、旅行に行こう?」

季節は変わり、暑い夏へと季節を移す。

そんなある日の休日、月村すずかは満面の笑みで神城ユウヤに告げた。

「そつだよ、旅行に行こう!」

「はあ?」

「それはナイスアイデアで御座います。すずか様」

ユウヤは何を言ってるという呆れ顔ですずかを見れば、ユウヤの従者であるフォロウはグツジョブと人差し指を出し、微笑みを浮かべた。

「突然何を言い出すんだ、すずか?」

「だから。夏休みに旅行へ行くことに決まったんだよ。なのはちゃん、アリサちゃん、ユウヤ君たちで」

「なるほどね。僕たち……って、ちょっと待て! 僕も含まれてる!?!」

声を荒げるユウヤ。

すずかの言葉の中には聞き捨てならない言葉が含まれていた。

「高町、バニングスまでは良い。何時僕が参加を了承したんだ」

今日初めて聞き、見に覚えがない参加。たぶん、父さんや母さんあたりが許可したのだろうと見当付ける。しかし、それは斜め上を逝く人物だった。

「うん。フォロウさんからユウヤ君も参加するって聞いたんだ」  
「ふお、フォロウ!!」  
「てへ」

小さく舌を出し頭を軽く小突く。世の男性にとって可愛らし過ぎる仕草だが、ユウヤにとっては悪夢でしかない。  
主を見限り、陥れるメイド。そんなメイドは普通なら切り捨てられるがユウヤにはそれが出来ない。

「フォロウ。何を勝手に……」

拳と怒りは抑えているが、湧き上がるこの衝動はどうにも収まり切らない。

何時ものユウヤならこの程度どつてことはないのだろうが、朝食に出された紅茶に、ちよっとしたフォロウ特製ブレンドが調合されていたため情緒不安定気味である。また、加えてファイのポータージュ（ポタージュ）により限界を突破している。

「いえ。今までユウヤ様がずか様方たちと距離を置いていらつしやるようでしたから、私と忍様、美空様で計画させて頂きました」

顔は白面のように笑っていないが、微笑んでいるように思える。  
フォロウは感情の起伏に乏しいが、微かにだが笑ったり泣いている。ただあまり感情を面に出さないだけである。最低限には感情を出す……。

ユウヤは少し考えて口を挟む。

「と、なると。もう強制的に参加。チェックが掛けられた状態か？」

「はい。その通りで御座います」

「そう……わかった。投了<sup>リザイン</sup>するよ。母さんが敵に回った時点で詰み

だ

「では早速、美空様にご連絡を……」

「 待て！」

フォロウが颯爽に部屋から出ようとするのをユウヤは寸でのこるで捕まえた。

フォロウは無表情ながらも心底残念そう訊ねる。

「どう致しましたか？」

「どうもごうもない！ それはワザとか？ 態となんたる!？」

「ゆ、ユウヤ君落ち着いて」

「止めるなすずか！ 今日という今日はフォロウを倒さないと気がすまん!！」

「その言い回しはあまり良くないかと思いますが。ですが、押し倒されるのは嬉しいですね……ぼっ」

「はっ?!」

フォロウの言い回しにハツとする。ユウヤは今、自分を止めている少女を見た。

先ほどと打って変わって必死さはなく、満面の笑みを浮かべたすずか。

「逃げる!」

「逃がさないよ？」

肩にミシミシと圧力を掛けられた。前にはフォロウ、後ろにはすずか。

退路がない。……というより苦悶に満ちるユウヤ。少なからず肩

に異常な圧力を加えられ、今にも砕かれそうな痛みが走る。

「小学生。それも女の子にしては強過ぎじゃないかなあ？」

「えー。普通だよ」

そう言っでどんどん強まる握力。

フォロウを見るとファンファーレを奏でたり、ペナントを振っている。そのペナントにはこう一言。

頑張れ！（はあと）

ユウヤはそれを見据え、更なる怒りが湧いたが、痛みには耐えきれず気を失った。

ユウヤ side

知らない天井……。

ではないけど、すずかのベッドの上で目が覚めた。……頭が痛い。

そう言えば昨日、すずかに振り回されてそのまま月村家に泊まったんだっとな。

しかし、あの悪夢は？

時計を見るとまだ時計の針は午前3時を回ったところだった。日付を見るとやはりあれは悪夢であると理解する。

「夢だったんだよな？」

隣を見るとすずかが小さな吐息を立てて寝ていた。軽く髪を撫でるとくすぐったそうな表情に変わる。

「すずかがあんなことをする訳ないか。……いや、しかし。どこかで」

ユウヤはあの悪夢を振り払いたかったが、どうしても振り払うことが出来ない。

これからどう転んでも可笑しくないと誰かが囁く。現に忍さんが良い例だろう。

もう一度すずかを見る。寝ていても優しげな雰囲気は健在だ。

「とりあえず、すずかが今のままの性格で成長すること祈るしか出来まい」

……ん？

そう言えば今日の朝食はファイ。昨日の朝食もファイ。まさか

(時間差の攻撃か!?)

今まで何度もファイの料理を食べて来たが様々な怪奇現象が起きている。

最近ではようやく意識を保てるようになったが、ある意味ファイが作る料理は全て神の領域である。そう、ある意味では

(まさか。人に悪夢を見せるほどまでの威力を持ってしまったとは。……それも睡眠時間というタイミングに)

ファイ、恐ろしい子！

ユウヤはこれ以上ファイの料理を考えることを止め、眠りに就く。また、朝になればファイの料理が口に入るかもしれないがどうにもならない。

そう、食べることは必然であり運命である。

料理を運んで来るフォロウから逃れることは出来ない。ましては、ファイの料理を平気で平らげられるフォロウ。

思考を落ち着かせる。……これ以上考えても無駄だから。逃げ道は塞がれている。

そうして僕は、再び深い眠りに就いた。次こそは良い夢でありますように

ユウヤ side end . . .

因みに数日後、結果的に旅行に行くことは成立した。

だが、さすが魔王になることはなく、旅行の成立だけが正夢になつたようだ。

その4「そっだよ、旅行に行こっつ?」(後書き)

今回はイベントの流れを作る伏線のようなものです。  
次回は旅行の話になりますのでお楽しみに

その5「旅行に行こう?」(前書き)

かなり短いです。

冬休みに入ったのですが、時間が……。

その5「旅行に行こう?」

神城ユウヤはフォロウが運転する車に乗って旅行先に向かっていく。

それも、簀巻き状態でユウヤは後部座席に座っていた。

「……フォロウ。どうして簀巻きにされてるのかな?」

「逃げ出すからかと?」

「……そう」

「はい」

「……」

「……」

これ以上話は続かなかった。

フォロウは黙々と運転を続ける。ユウヤもそれ以上追求しなかった。

簀巻きとされた自分の身体を見ると、窓から外を見渡す。

何時の間にか外の景色は見慣れない場所へと変貌していた。

「……此処は暁東市かな」

「はい。日本が誇る犯罪数の少ない街ですね。如何なさいましたか?」

「いや。……ただ。うん、何でもない」

ユウヤは気難しそうな顔をしつつ、すぐに笑顔を浮かべて言った。

「簀巻き姿で笑顔を浮かべるのは……気持ち悪いですよ?」

「なら解けよ!」

「いえ、無理ですね。もうかなりの時間をロスしてますからこのま

ま行きます」

フォロウは更にアクセル踏み込み、速度を上げる。ユウヤは不服そうな顔をするが、少しするとまた外を見据える。景色は何時の間にか風俗街を抜けようとしていた。

刹那、店と店の隙間からある影を見つける。ユウヤは自分と同い年ぐらいの青髪の男の子と目が合う。

ボロボロで、ガチガチな身体。そして、怯えたような瞳。まるで初めてその目で世界を見たような、そんな

ユウヤの瞳にその男の子は寂しそうに映った。

暁東市を過ぎ、更に数時間走る。

自力で簀巻きから脱出したユウヤは、暁東市に入るまで逃げ出すことを考えていた。だが、観念したのか窓を開けて黄昏ていた。潮の香りが仄かに鼻に入る。

車窓から見える青い景色。ようやく目的地に辿り着いたようだ。

「ユウヤ様。もう少しで目的地に着きますのでお召し替えください」

フォロウは助席から服を取り出し、ユウヤに渡す。ユウヤは今の自分を見て納得した。

早朝。

今日は旅行当日と言うことで家を飛び出した。ユウヤは縛られる

のを嫌い、逃げ出したのだ。

しかし、ユウヤに立ちふさがる人物がいる。神城家メイド長、鉄壁を誇るフォロウ。そんなフォロウに隙はない。だが、ほんの少しの穴を見つけ、そこを突くことで何なく抜け出すことに成功する。されど、数時間もすればフォロウひとりに追い詰められた。もう他のメンバーは旅行先に向かったと言うのにフォロウはユウヤを探し続けた。そして遂には追い詰められ、ユウヤは簀巻きにされ連れ出された。

その際、ユウヤはパジャマ服のまま逃げ出したため現在もパジャマ姿のままだった。すぐさま出された服に着替えるユウヤ。

「ありがとう、フォロウ。だけど、逃がしてくれたらもっと嬉しかったかな？」

「私はユウヤ様に仕えるメイドです。この程度造作もありません。ですが、旅行に参加するしないは別ですよ」

フォロウは殆ど無表情ながら最後の言葉に関してのみ力強く告げた。

ユウヤも「わかった」とシユンと身を細めて頷く。それを確認するとどこことなく微笑みを浮かべるフォロウであった。

「さて、お説教はここまでとして……」

「これお説教なの!？」

「はい。体罰と言う名のお説教です。しかしながら、何時の間にか抜け出していらっしやいますので、会話による行為に……」

「わ、わかったから。もう逃げ出さないって」

「それはわかっております。ただ不服感は拭いてございませんね」「まあね」

「本当に旅行がお嫌いそうですね。やはり……あら。もうホテル

の付近ですか。では、これ以上の追求も聞き出すこともなさいませ  
んのので。少しでも、すずか様方たちとお楽しみください」  
「……普通な流れ、だと思っただけ。フォロウの言い回しって微  
妙にズレと悪意を覚えるよ」

と、何時の間にか目的地に着いた車はホテルの駐車場に入り、駐  
車した。

二人は車から降りるとどこから取り出しのかフォロウが電話を掛  
ける。電話先は美空であった。そして、美空に着いたことを報告し、  
ロビーで合流した。

## その6「ユウヤとメイドたち」(前書き)

タイトルはメイドがメインですが、旅行の続きです。  
もう何話が旅行編は続きます。

## その6「ユウヤとメイドたち」

僕はロビーに来ると先に来ていた高町、バニングス、すずかにジ  
ト目で見られた。脅迫じみた視線である。

「……………えーっと。怒ってる？」

「……………」

「無言は止めて欲しいな、なんて」

「……………」

無理だ。

あの三人と視線を合わせられない。この無言。怖すぎる！

僕は今にでも逃げ出したかったが、がっちりフォロウに逃げ道を  
封鎖され、逃げ場を失っていた。

いつそのこと、体罰でも良いから無言は止めて貰えないだろうか？

「それは無理難題ですね。きっぱり断言しましょうか？」

「止めて置くよ。これもそれもフォロウの差し金だろうから」

「残念です。ですが、流石はユウヤ様。私がすずか様方に、『無言』  
こそユウヤ様が最も苦手とする罰であると指示していたと、把握な  
さっておられたのですね」

フォロウは肩を竦めて残念そうに僕から離れた。

そう。フォロウがすずかたちに僕に罰を与えるならこつするとわ  
かっていた。

いたけど、何だろう。この焦燥感。この敗北感。

フォロウを見据えた。彼女は確かに悔しがってるような雰囲気  
纏っているけど、微かに

「ふふふ。ユウヤ様あ。そんなに睨んでくださらなくても、私は何  
時でもユウヤ様を見守っていますよ」

僕はそれを聞いた途端、ロビーを駆け出した。だが、それより早  
くフォロウに肩を掴まれる。

すかさず、柔らかな感触が背中に広がると次は首が絞まり、鈍い  
音が鳴る。

「うぐっ！ だけど……」

「逃がさないよ」

問答無用。それに尽きる。

何時の間にか僕の腕を掴むすずか。笑顔を浮かべているが、腕に  
は強固なる鉄壁と言わざる得ない。腕が軋みを上げる。

「なら！」

腕の力を一瞬弱めすずかの手から逃れる。すかさず、目一杯首を  
回し、フォロウの耳を狙って小さく息を吹きかけた。

そして、視線を此方に持って来る。

「何を？」

「今だ！」

「なっ！」

少しの隙を突き、フォロウの弱まった力を利用し拘束から逃れる。  
フォロウは確かに完璧だ。未だにメイドとしての責務での失敗は

ゼロに等しい。しかし、僕に対しては甘いところがある。

寒さに弱いこと以外に、僕に弱いこと。何を言ってるか僕にもわからないが、それが唯一の弱点であった。

「これなら」

「今回は遊び過ぎましたね。ですが、これにて逃走劇は閉幕とさせていただきます」

「閉幕？ 閉幕だよ」

「いえ、閉幕でございます。ユウヤ様？」

それを最後に僕の意識は途切れた。

ユウヤがフォロウの腕の中で眠りに就くと、なのは、さすが、アリサが二人の前にやって来た。

「偽装ご苦労様でした。マリア、マシロ、ユウナ」

三人をそう呼ぶと淡い光に包まれる。

光の輝きを失うとそこにはフォロウと同じ格好をしたメイドが現れた。

黒髪、金髪、茶髪の少女たちである。

「いえ。この程度造作ありませんよ、フォロウお姉さま。ユウヤ様には悪いですが、最近の行動は度が過ぎます。ですので、少々懲

らしめるのもよろしいかと」

「そうだね。私もマリア姉さんに同意」

「私も別に構わないと思う。最近のユウヤ様は約束破り過ぎですし」

黒髪のマリア。金髪のマシロ、茶髪のユウナが順に答える。

フォロウも三人の言葉に深く頷く。

「では、ユウヤ様にはもう少しお灸を据えるべきだと思っ方は拳手を願います」

「……意義なし（です）！」「」

満場一致でユウヤにお灸を据えることが成立した。

ユウヤをソファーに一度座らせると、美空と颯を皮切りに高町家、月村家、アリサたちがぞろぞろとやって来た。

マリアたちは一礼し、ユウヤとフォロウの荷物を部屋に運ぶためこの場から去る。後ほど海で他のメンバーとも合流することになっていたりもする。

「フォロウ。大変だったようね」

「美空様。遅くなり申し訳ございませんでした。皆様方も貴重な時間を割いてまでユウヤ様をお待たせするなど」

フォロウはユウヤの侍女として旅行に参加した三家にも深く詫びる。

「いえ、此方も初めてのものばかりで此処のホテルについて把握する時間が出来ました」

「そうですよ。それに旅費まで神城さんに……本当に良いんですか？」

「構いませんよ。今回は皆様方とのお近づきを称しての旅行です  
で」

颯は高町士郎、桃子の不安げな物言いに豪快に頷いた。

「では、参りましょうか。なのはちゃん、すずかちゃん、アリサち  
ゃんたちも早く海に行きたいようですし」

美空はチラリと子どもたちを見て提案する。保護者である士郎、  
桃子、忍はその提案に頷く。

「恭也、行くわよ」

「お、おい。待てよ忍」

「海は待つてくれるかもしれないけど、時間と私は待たないわ」

忍は恭也の腕に自分の腕を絡め、ホテルを出た。そんな二人を見  
て、周りは初々しいなあと呟くのであった。

「では、私たちも忍ちゃんに続きましょう」

「でも、ユウヤは良いんですか？」

「大丈夫だよ、アリサちゃん。フォロウが仕立てるから」

「はい。寝ていようと水着にお着替えさせますので皆様方もご心配  
なく」

フォロウの言葉にすずかを含め安堵する。そして、少なからずこ  
の三日間は楽しい旅行になるとフォロウは内心思った。

「海と言えば白い砂浜。透き通った青い海。眩い水着姿のお姉さま」  
「！」

マリアたちと同僚のメイドが咳く。

海水浴場と言うこともあり、周りから変な目で見られるが、男たちの中には足を止めるものもいる。

「何をしているの、アヴィス。早くパラソルを立ててください」

「ちえー。今日は久しぶりの休暇なのにどうして私たちが」

「つべこべ言わず手を動かす」

「横暴だ！ シルファこそ、姉だからと言って手を動かしてないじゃないか」

「私はフォロウ姉さんとアイネ姉さんに陣頭指揮を任されているのです。行ったり来たりと大忙しなのよ。それに、他の妹たちもそれぞれ任務についています。貴女もすっかり役割をこなしてください」

緑髪のシルファが白髪のアヴィスに告げる。アヴィスもそれを聞いて面倒ながらも黙々とこなしていく。

「さて。アヴィスもようやく本腰を入れてくれたようね。そうだね。頑張ってる妹たちのために差し入れを買って来ましょう」

「それはもう買って来てる」

「アイネ姉さん！」

「はい。烏龍茶だけど。……良いかな？」

フォロウに似た顔立ちに、朱く髪を染めたメイドがシルファにペットボトル渡す。

その側にはひんやり冷えたクーラーボックスが置かれている。

「ありがとうございます。しかし、アイネ姉さんがお茶汲みなどを……恐れ多い」

「？」

「いえ。語弊でした。そんなことをなさらずともプレシア様たちを……。私たちを心配したからですか？」

「ううん。そのプレシアたちに行ってお出でと言われたから来たの」「えっ？」

「プレシアたちはレイナがお世話してる。あの子も来たがってたけど」

アイネは寂しそうに事情を説明した。

「なるほど。ではプレシア様たちは向こうに残る。と。それで事情説明のためアイネ姉さんが此方に。ついでに休暇を頂いたのですね」  
「そう」

今の状態のアイネは口数が少なく、最低限の言葉しか発しない。実際、半覚醒状態と言ったところだ。そのため、言葉が硬い。姉妹だからわかることもあったりする。

シルファは頷き、事情について了解した。そこで、今回陣頭指揮に当たれなかったアイネに提案を出す。

「では、アイネ姉さん。私たちへの陣頭指揮をなさってくださいませんか？」

「それは無理」

「どうしてですか？」

「今回の指揮はシルファに一任する。私とフォロウからの命令」  
「ですがそれは、フォロウ姉さんもアイネ姉さんも此方に」

「これは決定事項。だから私は私の得意分野を受け持つ。フォロウにも伝えてあるから、頑張る」

と、言ってクーラーボックスを肩に掛けこの場を去る。

シルファと離れると、すぐさま売り子に間違われたのが男性や女性が一対二の割合で近づいて来た。

「ねえ、お姉さん」

何時の間にか周りを囲まれアイネの姿は人の荒波に消えた。

それを遠からず見たシルファは後に語る。

「アイネ姉さんは基本無口ですが、フォロウ姉さんの双子の妹。その美貌はフォロウ姉さんに劣りはしません。また、アイネ姉さんの意識の大半は寝ており、かなり抜けてたりしますので……俗に言う天然ですね。それに迷子、遭難スキルを持ち合わせていますから」

シルファはそう遠い目をして呟き様に語った。

今回は夕食のバーベキュー前に何とか戻って来れたらしいが、どこぞの廃墟の病院で仮面を被った棒術を使う男性と闘ったとか。

闘った感想はなかなか強かった。タフで何度倒しても気を失わなかった。そうな。

因みにアイネの得意分野は料理だったりする。

その6「ユウヤとメイドたち」(後書き)

今回は十二姉妹を何人か登場させました。

旅行編は姉妹たちがメインかもしれない。

その7「午後のひと時」(前書き)

二月も更新停止していました。

楽しみにしていた読者様、申し訳ありません。

その7「午後のひと時」

目が覚めると日差しの下にいた。重りか何かで身動き取れない。と、いうより埋もれてるようだ。

「あ。目が覚めたみたいなの」

聞き覚えがある声が耳に入る。

「高町か？」

「うん。なのはだよ」

日差しが眩しくて影になっているが高町なのは本人のようだ。んー。何か忘れてるような気がするけど、忘れるってことはどうでも良いことなのだろう。……たぶん。

「高町。起こしてくれない？」

「えっ？」

「見てわからないなら君の目は節穴だね。どう見ても僕一人じゃ起き上がれない状態なんだけど」

ユウヤの身体は顔を残し砂浜に埋もれていた。何をどうしてこうなったかわからないが、とりあえず、ひとりで起き上がることは難しいだろう。

「そ、そうだったね……」

「じゃあ、よろし……」

「ちよーっと、待った!」

なのはがユウヤの身体を覆う砂を払おうとした時、突然“待った”が入る。

「バニングスか。高町、よろし……」

「だから、待ったって言ってるでしようが!？」

「このままじゃ、脱水症状起こしちゃうよ」

「そう。けど、それより重要なことを忘れてないかしら、ユウヤ？」

バニングスはない胸を張って訊ねてくる。      重要なこと？

「僕の生死より重要なのか？」

至って普段通り訊ね返すも、バニングスは“なにそれ？”みたいな顔で頷く。

僕、人命に関わることですが何かとツッコミたいが抑える。彼女はまくし立てることに集中し、聞く耳を持たないからだ。

「ユウヤは言ったわよね。春の終わりに私となのはのこと名前ですって」

「……言ったね」

何だろう。

確かに覚えはあるけど。

……ああ。なるほど

ユウヤの背筋に嫌な汗が流れた。

砂の熱と身体に掛かる熱を放出しようとして頑張っているのだからと思いたい、どうもこれは悪寒みたいだ。

「ど、どうして今もまだ仰々しいのかしら？」

こめかみがピクピクと動きを見せる。  
話を傍観していたなのは“そういえば”と大きく頷く。二人の  
瞳が怪しく光る。

「名前呼びなさいよ（んでなの）！」

鋭いストレートが脳を震わす。

たったそれだけのために俺を茹でタコや釜揚げのようにするつもりなのかと言いたいが、異性に対して親しみ易い名前の交換は一世一代の告白に近いものだろう。  
そのため、夏の暑さと相まって二人の頬が紅く火照っているように見える。

「……………」

「返事は？」

上目遣いは卑怯だと思う今日この頃。  
しかし、ある種の同意はできる。  
ずっと待っていたのだろう。

僕と親しくなるために気を使わすぎたのかもしれない。  
一方的な同意から始まった交友関係。  
更なる前進を二人は求めているのだ。

「……………」

「……………」

緊張が走る。

バニングスは“当然言うわよね”という自信気な顔付きで、高町は小動物のようにビクビクしている。

対して僕は無表情で二人を交互に見据える。…………さて。

「ユウヤ様。そろそろ折檻は終わりと致しましょう」

「「えっ？」」

「タイミングが悪いね。けど、フォロウのタイミングはバッチリかな？」

「お褒めいただき光栄で御座います」

海水浴場でもメイド服という奇妙奇天烈な姿で登場し、ピンクっぽい空気を両断したフォロウ。

まあ、今思い出したけど僕ってまだ罰ゲーム継続中だったんだよね。記憶は臆気だけと思いついたら危険だと思う。

と、ようやく砂浜の中とおさらば出来た。身体の砂を落とすもう一度二人を見る。

「と言うわけで今回もこの話はおじゃんになりましたとさ」

「ひとりで完結するな！」

「ツツコミが鋭いね、バニングス。けど、時と場合を見極めるのは肝心だ」

旅行中だからと言うのもあるのかもしれないけど、僕は命令されて簡単に言う気はしない。だれだってそうだろう。

ある決定的な線を越えて次に移ることは……。それと同じ理論である。

そもそも、僕の交友関係は狭い。

ある期を持って絆を成すのが僕の答えであり、答えの先に親友とも言えるものが導き出された時、改めて名を交換する。

それに至るのは現在、異性で三人。

フォロウたちメイドと肉親や義兄妹たち、加えてある種も除いてである。

二人は少し落胆しているが、僕はそんな二人に告げる。

「けど、この旅行中の間に名を呼ぶかもしれないよ。残りをお楽しみに」

意味深気に呟き、僕はフォロウを引き連れてその場を去った。

二人はそれを聞いて上擦るもユウヤの姿は愚か、フォロウの姿はそこにはなかった。

海水浴場から少し離れた丘に黒装束の少年が佇んでいる。

今日の気温は34度と温暖化の進行を垣間見える真夏日である。

服を着込みフードで顔を隠し、怪しさ満点なのだが暑くないのだろうか？

「……白銀の継承者。久しぶりにひと勝負を挑みたかったが今回は見物に徹しよう。それがいいだろう？」

少年はぶつぶつと問い掛ける。

だが、そこには彼しか存在しない。

「一度鐘が鳴ればどちらかが倒れるまで夜天の笛は鳴ることだろう。」

……君の主は果報者だ」  
「……私の存在を認識しましたか」

彼の言葉に姿を現すシルファ。  
ユウヤと同じ年程度の少年だと高を括っていたシルファだが、一抹の不安を覚える。

「貴男は一体何者ですか？ 答えによってはこの場で」  
「俺？ 俺は死神さ。全てを破壊す者。終焉者が奏でる音色は死を誘う」

フード越しに不適な笑みを浮かべる。  
シルファは無表情で少年の言葉を聞いた。

「しかし、今日は彼奴の姿を見に來ただけだ。俺は彼奴が歩む道を確認したかったんだよ」

「……貴男はもしや」  
「それ以上は言うのも野暮だ。まだ彼奴は迷っている、自分にな。そして俺はこの道を歩む。奴を討つために、夜天を救うために」

少年の足下から黒き闇が広がり少年を飲み込んだ。シルファは焦ることも動くことなく、ただ傍観に徹した。

「帰りましたか」

闇が弾けるとそこに居た少年は消えていた。転移魔法と思われる何かを使ったのだと推測する。

「終焉者の登場。これも齒車のひとつだと言うのでしょうか？」

シルファは少年が居た場所を軽く撫で、呟いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5681o/>

---

忘却の魔法使い

2011年3月28日15時28分発行